
王族という偉大なる変態に挑むいたいけなメイドの人生について

佐藤みりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王族という偉大なる変態に挑むたいけなメイドの人生について

【Nコード】

N5251Y

【作者名】

佐藤みりん

【あらすじ】

大陸最南端に位置する国、フィリカ王国。神の血をひくと伝えられる王族がいるその国では、戴冠式が行われてた。

新しく王位を戴くこととなったのは、エリザベス・フィリカ。民衆の望む要素を備えた美しい女王の即位は諸手をあげて歓迎されていた。

そんな、国が喜びに満ち溢れた祝いの日。女王に仕えていた優秀なメイド、ティア・メディチは一つの決心をした。

この、どうしようもない王族の君臨する王国を滅ぼそう。それが無理なら……国際結婚をして、この国から脱出しよう！

そうした決意のもと、ティアは職を辞して婚活を始めようとするが……！？

『できる女は結婚できない』。これは、そんな言葉を体現している、恋に疎い女の子の婚活ファンタジー！……に、なる予定です。

第一話 革命という悲壮な運命の火種について

それは、歴史の転換点というべき出来事だった。

王宮前の広場には、多くの人が密集していた。

人、人、人の身動きもロクに取れないほどの密集率。決して狭くないはずの広場が隙間もなくふさがり、押しあいへし合うそれらの熱気がまたすごい。みな興奮してざわめいている。そのごたまぜになった感情は、期待、喜び、そういった、めでたいものを前にした明るいものだ。

それを一望できる王宮のバルコニーに、着飾った女性が立っていた。

まだ、二十には届かないだろうか。まばゆいばかりの、金髪。抜けるような白い肌。穏やかで優しい面立ちから、その清らかな内面を察するに余りある。天使か聖女が降臨したといったら信じてしまいそうな美しい女性である。

彼女こそが、このお祭り騒ぎの現況にして主役だ。

「みなさん、こんにちは。本日から我らがフィリカ王国において、女王の称号を戴くことになりました、エリザベス・フィリカですわ」

静かな口調ながら、魔法によって拡大されてた声は集まった民衆の耳に確かに届く。クイーンエリザベス万歳！ 演説を始めた彼女向かって、そんな声がそこかしこから上がった。

エリザベスは、それにつこり笑って答えた。

「国民のみなさん。みなさんがご存じの通り、わたくしが手に入れたこの王位は、血族を蹴落として手に入れたものです」

母親を排除し、父親を押しつけ、弟を抑圧し、親類を寄せ付けず、途中まで協力していた第一継承権をもつ兄をも蹴落としてその地位を手に入れた彼女だが、その悪辣とも言える行いに反して、熱狂的に国民から支持され、祝福されていた。

なにせ、彼女のような王族の登場は、この王国の全国民の悲願だったのだ。

「そんな強引な手法で王位についたことを、快く思わない方もいるかと思いますが。人格に問題のある暴君にならないかと、不安がられたかも知れません。墮落した愚王にならないかと心配されたかも知れません」

フィリカ王国の民衆が求め焦がれる主君。それは、何も賢王でなくともよい。英雄でなくともよい。もちろんそれに越したことはないのだが、それ以上にフィリカ国民が王に求める要素はただ一つだけである。

普通の王様であれば、それでよいのだ。

なぜ国民が普通ならば求めることのない望みを抱くのか。そんなある種当たり前のことに焦がれるのか。その理由は、この王族の呪われた血筋に起因する。

そう。この国の王族は……先祖代々、ゆるぎない変態集団として有名なのである。

「思い返してみればわたくし達王族は、圧政を敷くに等しい苦痛をみなさまに与えてきたのかも知れません。時として行われる王族による奇行の数々。また、王権を盾に施行される訳のわからない理不尽な勅命……。でも安心してくださいませ。そんな愚行が行われる

ことは、もうありません。わたくしは、みなさんに精神的な苦痛を与えることは致しません。そう。わたくしは、いままでの王族と違って、異常な性癖を持ち合わせてなどいないのです！」

例えば、エリザベスの祖父に当たる前々代の国王は『裸の王様』の異名を持っていた。

戦乱の世で王位にあった彼は、質実剛健を旨としていた。儉約を好んだ彼は、税金から王族に与えられる費用を徹底的に削り、自らの生活を切り詰めた。

特に彼が嫌ったのは何枚も重ねて着るような装飾過多な華美な盛装だった。衣装棚にあった服をすべて処分。そして戦時ということもあり、資金不足から国王の着る服はどんぼろぼろになっていた。

その自らを犠牲にする王の行いに国民は感銘を受けたが、地獄はそこから始まった。

彼はそうやって繕いだらけになった服の着用を「みつともない」と言って拒み始めたのだ。いろいろと理由をつけては服を脱ぐ。とりあえず服を脱ぐ。国庫から衣装代をひねり出しますからどうか服を脱がないでくださいと申し出ても、国民の支持を得た「儉約」を盾に一蹴される。そうしてとにかく服を脱ごうとする。国民が「何かおかしいぞ？」と首を傾げた時にはもう手遅れ。あげくの果ては「衣服など不要！ 王様は、裸であるべきだ！」と全くもって意味不明な宣言をし、人間を知的生物足らしめている三大要素である衣食住の一つを完全否定。それ以降の普段の格好は上半身裸でワキ毛力を見せつけるのが当たり前、ひどい時にはパンツ一丁で王宮内を歩き回るといふ常識さでメイドたちを昏倒させ、それどころか市内の見回りと称して裸で馬に乗り、見るに堪えないその姿で市民を阿鼻叫喚のるつぼにしたこともあるらしい。

「わたくしの親類縁者は、みな何かしらの変質的な嗜好を持ち合わ

せてます。残念ながらそれを野放しにしているのは、国民の皆様のお安眠を確保することは出来ないでしょう。いつ王族が奇行に走るか、意味のわからない法令を施行するか、そんな不安におびえることになってしまおうでしょう」

またエリザベスの父である前王レラニーは無類の生足好きであった。嫁選びの際にはガラスの靴を職人に作らせ「この靴にぴったり合う足の持つ主がわたしの理想の女性だ！」と宣言し、国民の女性一人一人にはかせて回ったという逸話はあまりに有名である。

レラニー王はその勅命により国民の時間と税金を無駄に消費し「もしこの靴にぴったりだったら、変態の嫁にされる……！」という恐怖で女性の精神を圧迫した。その愚策でひとりの貴族の女性が選ばれるまで、レラニー王は「死んでくれ、レラニー王」略して「死んでレラ」と、愛称でもって切実に死を願われ続けた。

「ですから、わたくしは心を鬼にして、わたくしと同じく変質者ではないと噂されていた双子の兄と共に、血縁者の排除を始めました。親類から始め、最終的には父である前王を始め、ほとんどの王族を政治の場から隔離することに成功しました。これで、わたくしの母のような不幸な人間を出さずにすみませう」

ちなみにレラニー王と結婚したその貴族、つまりエリザベスの母に当たる女性は、五年ほど昔に王宮を飛び出て実家の領地に引きこもっている。市井の間では「国王の性癖に耐えきれなかったんだ」と、もつぱらの噂だ。

そんな王族との縁子を持つことを、みな嫌がる。

「しかし、その直後、わたくしはあることに気がついてしまったのです」

だって、変態なのである。

相手が常軌を逸した変態とわかっていいるのだ。そんなところに娘や息子をやりたくないのが親心だし、本人だって変態の相手などしたくはない。いや、それだけならまだ利益に目をつぶれる人間いるいるのだが、もうひとつ大きな問題がある。

生まれる子供も、必ず変態になると決まっているのだ。

この悪条件を前にして、国内の貴族は本来ならば喜ばしいはずの王族との婚姻に嫌悪感を覚える。王族と血縁を持った瞬間、社交界の場では「ほら、変態の……」「おお、あれが有名な変質者血筋のお仲間か」などと陰口をたたかれる屈辱に耐えなければならぬ。王族との縁を持つメリットより、大いなる精神的苦痛が課されるそのデメリットの方が大きいのだ。

「兄も、わたくしと同じく変態ではないと期待されていました。実際、わたくしもそうだと思ってきました。だから、彼と共に他の王族との戦いに身を投じたのです。しかし、わたくしは気がついてしまいました。兄もまた　特殊な性癖を持つ人間なのだ」と

エリザベスは悲しげにそつとまぶたを伏せる。無念でたまらないと、ひしひしと伝わるその仕草は国民の心をつかんで揺さぶった。

「変態の血筋は、絶やさなければなりません。王族というのは、常に清く、公明正大でなくてはならないのです。ですから、わたくしは断腸の思いで、協力していた兄をも排除いたしました。繰り返しになりますが、公言いたします。わたくしは、正常です。おそらく、わたくしの子も正常でしょう。いえ、正常に育て上げてみせます！」

いままでの王族は、漏れなく変態だった。

だが、この女王は違う。

平民から貴族まで、王族以外の全員が望んでいた、王族史上初め

ての変態ではない人間なのだ。

「わたしはこの国の王族を、他国に誇れる王族にしてみせます！
いままでの黒歴史など消し去る王族が、この国の輝かしい未来が、
いま始まるのです！」

クイーンエリザベスが高らかに宣言すると同時に、地面を打ち鳴らすほどの歓喜の歓声が鳴り響いた。

女王の自室。

そこでは一人のメイドが主の帰りを部屋で待っていた。

彼女の名前は、ティア・メデイチ。この広い王宮で数いるメイドの中、唯一、女王専属を許された優秀な人物である。

冷静沈着で知られる彼女は、いまも落ちついて主人の帰りを待っているように見える。だがよく観察すれば、時折、足のつま先が上がり床を叩いているのがわかる。国民の歓声が響いた時には、わずかに顔を曇らせたりもしていた。些細なことではあるが、普段のティアは「鉄面皮」とも揶揄されるほど無表情かつ正確に、淡々と仕事をこなしている。そんな彼女にしては、わかりやすいぐらいに感情が表出していた。

そして奇妙なことに、ティアは手のひらにトカゲを乗せていた。

当たり前だが、女王の部屋にトカゲなど持ち込んでいいはずはない。もちろんエリザベスがトカゲを飼うような変わった趣味の持ち主だったりもしない。

ばかりとトカゲが口を開いた。

「ティア……」

「もう少しお待ちください、エリオット様」

何か言おうとしたトカゲを、ティアはぴくりとも表情を動かさずに制する。

しゃべったことからわかるように、このトカゲ、ただのトカゲではない。ティアの鉄面皮が崩れかかっている一因として、このトカゲがエリザベスの兄である元王子という紛れもない事実があるのだ。そう。この度の王族の排除のほとんどを取り仕切った王位継承権第一位の持ち主、エリオット・フィリカである。

容赦ないことに、妹による魔法でトカゲにされたのだ。

メイドもトカゲも、それ以上は一言も口を利かずに待機していた。元凶たる本人がいなければ、何の進展もないと両者わかっているのだ。

そう待たずに、扉が開いた。この国の新たなる女王、エリザベスだ。ここまで付き従っていた侍従はエリザベスのねぎらいの言葉を受け、扉を閉めて下がって行く。

侍従がいなくなったのを確認して、くるりとエリザベスがティアとトカゲへ振り返る。

「ただいま帰りましたわ、お兄様、ティア」

エリザベスが浮かべたのは、悪びれもない幼い笑顔だった。

王家唯一の真人間と謳われるこの王女　いや、もう女王か。その言動は、クイーンエリザベスと祝福される若き為政者の振る舞いにしては、少々幼い。

「おかえりなさいませ。式典、お疲れだったでしょうか」

「うっん。大したことじゃありませんわ」

まず先に動いたのは、ティアほうだった。何よりもまず帰ってきた主に頭を下げ、手の平に乗せていたトカゲをテーブルに移す。式典用から普段着のドレスへと女王の着替えを手伝いながらも沈痛な表情で申し出た。

「エリザベス様。どうか思い直していただけませんか」

彼女はメイドではあるが、この国有数の権力者であり高潔な人格者として知られるメディチ侯爵の令嬢でもあり、才媛としても広く知られている。社会勉強の、そして一種の諜報活動の一環として王宮に奉公しているのだ。この国の行く末を、少なくとも現在王位にある女王よりは案じている。

そしてティアは、エリザベスの王女時代から使えているため彼女のことをよく知っていた。

「エリオット様を人間に戻し、国民の誤解を解いてくださいませ。まだ間に合います。いまは熱狂的に支持されておりますが、エリザベス様の、その……王家特有のご病気がばれましたら、国民は一気に手のひらをかえしましょう。期待が高かった分、そのしっぺ返しは強烈です。そうなる前に、エリオット様に王位を受け渡すべきなのです」

そう。残念なことに、エリザベスもゆるぎない変態の王家の例にもれず、変態なのだ。

エリザベスは、人をいじめて喜びを覚える。そんな性癖を持っているとSの変態で、あくまでその対象が血縁者限定に限られているから国民にその性癖が露呈していないだけなのだ。

「あら、ティアはそんなにそのトカゲ君を応援したいんですの？」
「はい」

自分の兄であるトカゲを指差すエリザベスに、ティアは無表情ながらもはつきり頷く。トカゲにされたとはいえ何の問題もなく喋れるのだが、エリオットは交渉の邪魔はするまいと黙ったままだった。
だが

「そう。けれど、いくらティアの頼み事でも、い・や・で・す・わ」

案の定、エリザベスはあっさり笑って断る。

「エリー。お前な……」

そのやり取りを耐えられなくなったトカゲの王子、エリオットも苦々しく呟く。

「自分が何をやってるのかわかってるのか？」

そもそもエリオット達の母親が実家に逃げ帰ったのも、実はこの妹のせいなのだ。母親は普通の貴族の生まれながら「この美しい足は誰かを踏むべきものだ。できるならば平民よりも、貴族を。欲を言えば自分より身分の高い高貴な方々を踏みたい」と、常人にはとつてい理解できないことを常々思っていたらしく、生足好きでそれに踏まれると喜びを覚えるという変態の国王とはこれ以上ないほどお似合い夫婦だった。

そう。二人の性癖は、がちり噛み合っていたのだ。ということ
は、エリオット達の母は、別にレラニー前王の変態嗜好についていけなかったわけではない。彼女が実家の領地に逃げ帰ったのは、国民で噂をされているようなことが原因ではないのだ。

「全然わかりませんわ。お父様が変態丸出しの勅命によってお母様を見つげ出したように、またお母様が嬉々としてお父様のことを踏んづけていたように、おじい様が好んで衣服を身に着けていないように、わたくしはわたくしのようにしたただけですもの」

「……はつきり言おうか、エリー」

彼らの母が実家に帰った原因は、エリザベスである。変態の二人の間から生まれたやはり変態のエリザベスは、物心ついてから母親のことをねちねちくじくくちくちくいやがらせやらを続けた。それはもう楽しそうに、時には恍惚とした表情で、人目につかないよう、陰険極まるイジメを続けること十三年。

その結果、母親は実の子による精神的虐待に耐えきれなくなつて実家に逃げることになった。

「あんな、エリー。お前、王位つてもんは趣味で奪っていいもんじやねえんだよ……！」

そして今回エリザベスが王位を篡奪したのも、その趣味によるものなのだ。

この変態王族を一網打尽にする計画はもともとエリオットが画策し、ティアの協力を仰ぎながら取り仕切っていたものだ。双子の妹である王女と共に国民から「変態ではない」と期待されていた彼は、その期待にこたえようと行動したのである。

そして、その最後で妹に裏切られた。

ティアがトカゲになったエリオットを発見し、エリザベスに理由を問い詰めると、いわく「王位を取られて悔しがる親類および父親、そしてお兄様の姿は見ていて楽しいのですわ。お兄様の味方をしていたのは、その一環なの」とのことだ。使命感に駆られて行動した王子とは、行動原理があまりに違う。

「エリザベス様。わたしからもお願い申し上げます。国民の為に動いていたエリオット様の功績を奪い、その理由づけの為にエリオット様まで変態に貶めるなど、あまりに無体。なにより政治は、趣味で、お遊びで弄んで良いものではありません。わたくしたち貴族、王族は常に公務の無私であり、国益を、国民を優先して動くべきなのです」

真摯にうつたえるが、エリザベスの笑顔は崩れない。

「あら、でも変わらないと思うの。誰が王位に就こうと、うちの一族はみいーんな変態。残念ながら、国民の期待にこたえることは出来ませんわ」

「ですから、エリオット様は違うのです。この方は正真正銘、王族史上初の
「
「いいえ」

やわらかい笑顔のまま、首を横にふってティアの言葉を遮る。

「わたくし、知っていますの。隠してはいるものの、お兄様も変態。我が王家の、ゆるぎない変態の一員。ねえ、この シスコンお兄様」

「え？」

ティアは、無意識のうちに一步後ずさった。ティアは、この王子に限っては変態ではないと信じていたのだ。だからティアは国の為、エリオットに知恵を貸し、陰ながら支えてきた。

なのに、まさか……？

「お、王子……？」

「おいおい、ティア。勘違いするなよ？ エリーもなに言ってるんだ。誤解されるじゃないか」

妹たる女王の言葉に、トカゲとなったエリオットは慌てない。どころか、トカゲの分際で器用に鼻で笑って見せた。

そんな王子の様子にティアは安堵の息を漏らす。どうやら、エリザベスの勘違いの

「まったく、何てことを言ってくれるんだよ。確かに俺はお前のことを愛してる。ああ、母上より父上より深く広くお前を愛してるさ。こんなトカゲにされたいまでも愛してる。だがな、それはあくまで家族に向ける感情の域を出していない。例えば、腹心の部下にエリーの行動を見張らせて逐一報告させていたのは、妹のことを知りたいという兄心の一環だ。エリーが昔に使っていた布団やシーツ、服や下着を回収させていたのは、妹の過去の思い出が欲しかったからだ。基本的に妹にしか反応しないが、それは妹とひとつになりたいたいという、そんな純粋な思いだ。俺は、お前らと違って正常なんだ！」

「申し訳ありません、エリザベス女王様。わたし、本日をもって王宮からお暇をいただきたく存じ上げます」

いつの間にそこまで下がったのか。熱弁をふるうトカゲの王子から一刻も早く離れたかつたらしく、ティアは扉を開いて半ば部屋を出ていた。

「しまったやっべえ口が滑ったあああああああ！」

エリオットが叫ぶが、それを見るティアの顔にさきほどまでの同情はない。いつそ冷徹で、勝手にやっつてこの変態王族共、と顔にはつきりと書いてあった。

「あら、辞めちゃうんですの。さびしくなりますわ……。でも、無理に引き留めるものではありませんわね。今日まで御苦労さま、ティア。あなたは良く仕えてくれましたわ。召使えてくれた人間に友愛の情まで持てたのは、あなただけ。その旨、きちんとメディチ侯爵に伝えておきますわね」

「過分なお言葉、もったいのうございます」

「ちよちよ、ちよつと待つんだティア。俺は変態じゃないんだ！ さっきのは軽いジョークなんだよ！ だからマジで見捨てないでくれ！ 参謀代わりのお前がいないと、ここからの挽回は」

「エリザベス女王様への愛を語る時、うっとりしておりまして。この上なく嬉しそうに総合を崩しておいででした。超キモかったでございます」

「しし、してねーよ！ 家族への愛を語ってただけで、そんな顔になるわけねーだろ。てか、爬虫類の表情がわかるのかおまえは！？ 表情筋ないんだぞ！？」

「いいわけはよろしいです。もうあなたに協力する理由は一切ございません、へんたごほんごほんエリオット元王子」

「おい、いまナニ言おうとしたメイド！？」

「わたしはもうメイドではございません。誇りあるメディチ侯爵家の三女、ティア・メディチです」

エリオットが無表情でせきこんだティアを言及するが、元王子への敬意が微塵に砕けた今、彼女の目にある侮蔑の光は揺らがない。

「もう王家に希望はないとはつきり判断しました。いえ、そもそも少しでも期待していたわたしが愚かだったのです、しすこげふんげふんエリオット元王子。革命でも起こって、王家の高貴なる血筋が絶えることを切に願います」

「おま……。っ。んなことになったら、この国たぶん滅ぶぞ！？ い

「まの体制がどれだけ王族に負担掛けているのかわかっているのか!？」

エリオットの反論は、何も大げさではない。この国は、王族の力によっているところが大きいのだ。

この呪わしき変態一族を王族たらしめているゆえんは、その高い戦闘能力にある。ある特殊な血筋である彼らは、男児ならばかならず一騎当千の猛者となり、女児ならば変幻自在の魔女となる。戦の時には王族自ら前線に出張り敵を蹴散らすその姿は、「王族が変態でも別にいいんじゃないか! 彼らは勇猛果敢に国を守ってくれている!」と国民や貴族に畏敬の念を抱かせるほど圧巻である。

しかし、ティアの白けた視線は動じない。

「知ったことではありません。いえ、むしろ、未来の為、人民の為、人類の為、こんな王族が治める国など滅んだほうがよろしいのではございませんか? ねえ、変態シスコン元王子」

エリオットは、ティアのあまりにはつきりした物言いに絶句する。フィリカ王国内の王族すべてに向けた不敬も甚だしいのだが、兄がいじめられている様子が楽しいのか、エリザベスはここにこ観覧していた。

だが実際、これがいまの国民の気持ちである。一昔前の乱世ならばいざしらず、最近は国内外を問わず落ちついて平和なのだ。いま王族に対する敬意は、新たな女王へのものを除けば地に落ちていると言っている。もしクイーンエリザベスの変態性が表ざたになったら、すぐにでも反乱が起きるほどの不満が国民には積み重なっている。

「わたしはもうメイドなどやめて、ただの貴族の娘にもどり他のまともな方と結婚でもして幸せになります。さようなら。いままでお世話になりました、変態トカゲ様。もう二度と会うことはないでし

よう」

「ティア……二度と会えないなんてさびしいこと言わないでくださいな。わたくしたちは、友達でしょう」

「エリザベス様……身に余る光栄です。それと、勘違いをさせてしまったようで、申し訳ありません。このティア・メデイチ、爬虫類なトカゲと尊敬すべき女王を同列に並べたりは致しません。エリザベス様とともにあったこの三年間は、忘れがたい貴重な日々でした。女王のお傍にあったこの勤め、これからも決して無駄には致しません。お目にかかれる機会があることを、切に祈っております」

「おいちよつと待てティア！　なんか俺とエリーとの扱いの差がひどくないか！？　俺も一応王族だぞ！？　それにエリーも変態だろ！　なあ！　何が違うんだよ！」

「人語を発する摩訶不思議なトカゲが何か騒いでおりますが、お気になさらなでください。これからはお忙しい御体です。御身を大切になさってください。爬虫類が発する雑音など、女王陛下のお耳に入れる必要はありません」

「そんなことは、もちろん承知していますわ。ティアには一点の非もありません。……あ、でも、結婚するときは知らせてくださいな。かけがえのない友人の婚姻ですもの。全力でお祝いたしますわ」

「お言葉、つくづくもつたいのうございます。それでは」

「だから待ってくださいティアッ、ティア！　待っ　ちつくしよおう俺の野望がああああああ！」

ばたん、と。

わざとらしく音を立てて、ティアは扉を閉めた。

「さあってお兄様。ティアもいなくなつたことですし、気兼ねなく遊びましょう。あつちに、お父様もおじ様もおば様も、みーんな小動物に変えて閉じ込めてありますの。うふふ。遊びがいがありそうですね」

「ちよ、エリー、やめろ、やめるんだ！　いくら妹でもやっていいことと悪いことが」

「うふふ、そんなこと言つて内心では喜んでるくせに。妹にいじめられるのがそんなに嬉しいんですの？　さすがはシスコンマスターですわね。顔がだらしなく崩れていますわよ、お兄様のへん・た・い」

「おかしいだろう！　なんでお前らは爬虫類の表情を読めるんだよ！？」

「うふ。それにわたくし知ってますのよ。お兄様が王位を欲した理由。妹とでも結婚できる、っていう内容の法律を作りたかつたんでしよう？　全くもう、お兄様つたら。血族に恥じない、ゆるぎない HENTAI ですよわね！」

「な、なぜそれを……ティアにもばれないようにひた隠しにしたのに……？」

「……………いま、自分の使命がわかりました」

かすかに漏れ聞こえるそんな会話を聞きながら、ティアはひとつの決心をした。まともなる王家の人間を擁立して、誇りある秩序をこの国にもたらそうとしたのだが、あまりに浅薄だつたらしい。ティアは、自分の考えの甘さに恥入り、己の心を戒めた。

もう容赦はしない。

かつかつと足音を響かせながら、ぐつと握りこぶしを作つて決意

を固める。

「一刻も早く、この国を滅ぼさなければ」

最低でも、あのトカゲは自分の耳目の届く範囲から駆除しよう。
そう決めたティアの足取りに、迷いはなかった。

その人生においてただの一度も敗北することのない女王エリザベ
スと、敗北と妥協を重ねながらも確実に自分の目的を達する元女王
付きのメイドだった令嬢ティア。

この二人が相對するようになるのは、まだまだ先の話である。

第一話 革命という悲壮な運命の火種について（後書き）

見切り発車で始めました。なんちゃって異世界ファンタジーです。適当に決めたゆるゆるな世界観でやっていけるのでしょうか。いまから不安でいっぱいです！

それと、一つだけ言い訳を。本来この世界に存在していないはずの単語（シスコンとかどSとかシスコンとか）を多用してますが、お目こぼしくください。やっぱり「妹好き」より「シスコン」、「加虐趣味」より「どS」にしたほうが、伝わるものが全然違うと思うんですよ！

何かご指摘ご感想ございましたら、お気軽に書いてください。泣いて喜びます。

第二話 大陸という複雑怪奇に入り組んだ情勢について

ティアが王宮の奉公に来た、初めての日。

王女の自室に向かうために王宮の廊下を歩いている彼女は、緊張をしていた。

身を包んでいるメイド服は、初めて袖を通したわけではないが、やはりまだ着慣れてはいない。わずかにうつむいている顔は無表情に見えるが、ティアの平時に比べればやや青ざめこわばっている。

祖父に言われ、王女に仕えるために初めて入った王宮はきらびやかだった。目にはいる人すべてが自分より洗練されており、華やかであるように思えた。こんなところで自分はやっていけるのだろうか。侯爵である祖父の顔に泥を塗ってしまわないだろうか。可能な限り王宮内の情報を集めて伝える言われているが、自分にそんなことができるのか。様々な不安が胸に渦巻く。そして何より。

自分は、場違いではないのか。

どうしても、その思いが拭い去れなかった。もちろん、ティアも礼儀作法は学んでいる。女の身であるため大学にこそ通っていないが、家庭教師から相応の教育も受けている。

けれども、自分は違うのだ。

生まれも育ちも性格も非の打ちどころがない成熟したレディである二人の姉とは、後継ぎとして立派に成長している弟とは、悪い意味で違うのだ。例えば侯爵令嬢という立場あったとしても、所詮自分は

「見ない顔だけど、新入り？」

突然声をかけられてびっくりと身をすくませる。向かいから人が来ていたことにすら気が付いていなかったのだ。

「何か御用でしょうか」

緊張からくる余裕のなさから、ティアは必要以上に固い声で答える。

警戒心をまとっているティアに、男はにこりと人好きする笑顔を浮かべた。

「いや、王女付きのメイドが今日来るって聞いてたから、君かなーって思ったんだが」

「そうですね」

「そっか。やっぱりな」

最低限の言葉だけで受け答えをするティアに、当たった当たったなどと嬉しそうに言いながら男は手を伸ばした。

なんだこの人。身構えるも、男の手はティアの警戒をあっさり突破。

むにり、と男はティアのほっぺをつまんで伸ばした。

えいや、とティアは反射的に男のノドぼとけに拳を叩き込んだ。

「じぶっ!?!」

鎖骨と首の境目に上手く入った。殴ったティア自身がほればれするよつなナイスキラーパンチ。しかも殴りつけるのと同時に、魔法で微量の電撃を流してある。

本来人が操れる魔法というものは、ささやかなものだ。フィリカ王族でもない限り脆弱な魔法しか使えないため、人を気絶させるどころか服を通してほどの電気は発生させられない。ティアだってその例に漏れない。

だからこそその、外気にさらされているノドへのパンチである。そ

して無警戒に電気を浴びれば人は身をすくめる。これも、上の姉から伝授された、メデイチ家護身術（レディ専用）の成果だ。姉さまありがとう。いまは嫁いで遠いところにいる姉に感謝しつつ、とどめを刺すため、ドコとはいわれないがナニを蹴り上げようとして

「あ」

さすがにまずいと我に返って行動を止めた。

仮にも王宮内部を歩いているような人間である。しかもここは王女の部屋がほど近いような奥の場所。いきなり女性に触れてくるようなジェントルマンの風上にも置けない変態紳士な人間であろうと、身分の高い人間である可能性が大だ。

「大丈夫ですか、へんた……ええつと、名も知らぬお方」

「げほつ、げつほ……ふう。いや大丈夫だけど、まさかいきなり殴られるとはな……って、おい。いまなんか失礼なこと言おうとしなかったか？」

帯電させた拳を人体の急所に叩き込んだというのに、平気そうにしている。というか、ティアにとっては都合なことに、そもそも電気を流されたことに気が付いていないようだ。

無駄に丈夫なのか、鈍いだけか。どちらにしてもやや失礼なことを思いつつも、ティアは素直に頭を下げる。

「申し訳ありません。上の姉から習った護身術に『もし不躰に触ってくるような変態男がいたら』という題目があったもので、ついで」

「全然申し訳なさそうに見えねえな……というか、そのお姉さんがどんな人なのかすごく気になんだけど。まあ、確かにこっちが悪かったか。ごめん。でも、ちょっとは緊張ほぐれただろ？」

「え」

男に指摘されて初めて気が付く。どうやら、ひどい顔だったらしい。事実いつもに比べて青ざめていた顔には、いまはうつすら赤みが差している。

ちよつと業腹だが緊張がほぐされたのは確かだ。

「どうも、ありがとうございます」
「どういたしまして」

ささやかな自尊心から、礼を言いつつもツンとして決して愛想のよくないティアに、しかし彼は気を悪くした様子もなかった。余裕のある態度だ。ティアは何気なく先ほどつねられたところをさすり、ふと気が付いた。

自分の表情はかなり読みにくいほうなのだが、なぜ極度に緊張していると分かったのだろうか。

尋ねようとしたが、その前に

「大丈夫大丈夫。王女様は優しいから、あんまり固くなりすぎないで接するのが一番だ。できるだけ自然体で、ぜひとも仲良くなってくれ。あんたなら、大丈夫な気がするよ」

「……王女とお知り合いで？」
「まあね」

聞いておくのも悪くないだろうと思って尋ねる。遠慮など今さらだ。

「王女は、どのような方ですか？」

「基本、優しくて淑やか、かな。評判はすごいいいな。人徳もあるし、人を見る目もある。猫かぶりがつまいともいえるかな。あ、そ

れと」

率直な意見である。参考にしようとしてありがたく頭の中で情報を整理していたティアは、男がにやり、といたずらめいた笑みを浮かべたのに気が付かなかった。

「ノックをされるのが嫌いだから、そのまま部屋に入っちゃったほうがいいぜ」

「ノックが……？ 気難しい方なのですか？」

「気難しいっていうか……まあ、悪い子じゃないから、そんなに心配すんな。あ、時間がやべえ。んじゃね」

「そうですか。いろいろありがとうございました」

そうやって二、三、半端な助言だけ残して、彼は去って行った。

それを見送ったティアは、ぼつりとつぶやく。

「……変な人」

お互い名も告げなかったそれが、ティアとエリオットとの最初の出会い。

彼が見えなくなってもなお、エリオットが去っていったの方向にティアの目が向けられていたのはなぜなのか。ちよつとだけ胸が温かく満たされたそれがいったいどんな感情の始まりだったのか。それを自覚するまでゆっくり考えいられる余裕は与えられなかった。

なぜならば、この直後にエリオットの忠告を鵜呑みにしてノックもせずに王女の自室に入ったティアは『弟をイスにしてとても楽しそうに遊んでいる、真人間かも期待を受けているはずの麗しきエリザベス王女の変態的行為』という衝撃的かつショッキングなものを

目にすることになるからだ。

長く、数度鳴らされた汽笛の音で、まどろんでいたティアは目を覚ました。

「ん……」

少し、低い天井。横壁にはめられている窓から見える風景は、後ろへ後ろへと流れて行っている。車輪とレールの摩擦で揺れる列車の車両は、丁寧に造られてはいるが木製だ。

どこだここ。石材が基本の王宮にこんな場所があったか。一瞬だけ夢と現在がごっちゃになって戸惑う。

「あ。お目覚めになりましたか？」

ぱちぱちと目を瞬かせるティアに、迎えの席に座っていた少女が声をかけた。ティアと同年代の、栗色の髪を持つかわいらしい少女だ。

彼女の声に、すこし混線していたティアの意識がすつと現代に戻った。

「うん。わたしはどのくらい寝てた？」

「ええっと、ほんの五分ぐらいです」

「そっか」

なにか懐かしい夢を見ていた気がするが、思い出せない。横に視

線をやると、ティアの視界は流れていく風景を窓越しに捉えた。

ティアがメイドを辞して二か月後。彼女は実家の館に戻るために鉄道で揺られているのだ。

実家に帰るまで間が空いたのは、身辺整理のためである。夜逃げをするわけでもあるまいし、身一つで戻るわけではないのだ。仮にも女王付きのメイドであったティアが王宮からさるのには様々な手続が必要だったし、侯爵令嬢が手ぶらでひとり館に戻るような不用心をするわけにもいかない。帰る際にはわざわざ実家から迎えのメイドが送られてきた。

とはいえ

(屋敷に帰るのぐらい、一人でできるのにな……)

それがティアの本音である。

王都とティアの実家である屋敷がある港湾都市は、フィリカ王国の要所の一つである。鉄道導入の際には真っ先に王都とつながれているため、馬車で何日も揺られることなく、半日もかけずに到着できる。ついでに貴族の令嬢らしくなく精神的に自立しきっているティアは、街中を一人で歩くことぐらい何とも思わない。

ティアの乗っている二等車両の対面に座る彼女は、ティアが帰るのに合わせて送られてきた。見覚えのない少女だったが、三年ほど実家にいなかったのだ。顔の知らない使用人の二人や三人増えていてもおかしくはない。

エレンと名乗った彼女は、先ほどから黙り込んでいるティアのほうをちらちらとうかがっていた。ほとんど会話もしていないこの空間が気まずいのだろう。そもそもこのメイド、手際が非常に悪い。経験が浅いのだろうが、手回しができていなかった。馬車の手配も鉄道の切符の購入もティアがすべてやったのだ。実質、荷物持ちぐらいにしか役に立っていない。

そのティアは、付きそいであるエレンのことは完全に放置し、鉄

道列車の中でつらつらと考え事をしていた。

(領地に帰ったら、何しよう。革命を起こすにしても、すぐというわけにはいかないし。ていうか、だんだんやる気がなくなってきた…)

なかば私怨で革命を決意してみたティアだが、自分がすぐに革命を引き起こせるとは思っていなかった。というか、考えれば考えるほど不可能ごとの気がして、現段階ですでに革命という難事を放棄しかけている。

(だって、よくかんがえれば王族を倒す必要性も見当たらない)

軍神マルスト、大魔女モルフィナの子孫。それがこのフィリカ王国の王族だ。それはこの国の建国神話であり、れっきとした史実である。

はつきりと自らが神の子孫だと宣言している王族は、大陸中見渡しても稀だ。このフィリカ王国と、梟神ネルバの子孫である北の帝国ユージニアの王族ぐらいだろう。両国ともに大陸に名をとどろかせる強国だ。

だから、神の子孫たるこの国の王族の正当性、神聖さは、大陸随一と言っている。

自分もこつそりと参加していた手前そんなことは口が裂けても言わないが、そんな王族が内部抗争などとしていいわけがないのだ。

(それだって、対外的に見ればぎりぎりのラインだし。そして、もっと切実な問題は、あの王族がいないと南土はもたないということ)

大陸の勢力は、『南土』『央土』『氷土』の三つに大きく分けられる。

かつて起こった産業革命の発信点となり大陸経済の中心点として成り上がった、大陸中央部に位置する諸国連合が央土。

一年の大半が冬で、雪と氷に包まれた厳しい環境で貧しいながらも広大な領土と強大な軍事力によって圧倒的な存在感を示すのが氷土。

それらに比べて、南土の国々には決定的なものがない。大陸南部諸国の総称である南土は、地域により多少差はあれ、平坦な大地に温暖な気候と豊かな土壌を持つ。農業をはじめとする第一次産業が豊かだが、それだけだ。

農業のしやすい土地柄は、文化的に発展しにくいという側面を持つ。なぜなら、工業の中心である第二次産業を發展させずとも、これまで通り第一次産業に従事していれば十分に暮らしていけるからだ。

豊かな土壌を基盤とする国力を持つが、全体の技術、及び文化水準では央土に劣り、豊かさゆえに危機感が薄く軍事力では氷土はるか央土にも後れをとる。そんな国家が集まっているのが南土と呼ばれる地域だ。

同時にそれは、他から見れば搾取の対象となるということでもある。豊かな癖に、弱い国々の集まる地域。野心溢れる強国にとってはまさしく垂涎的だっただろう。

特に央土。大陸最大の軍事力を誇る北からの圧力に常に晒されている彼らが、すぐ隣にある豊かな南土を植民地にしようとするのは当然だろう。産業革命が起こって以降特に、央土の経済成長は目覚ましい。国力に差をつけた彼らがのんびりと農業にいそしんでいた南土へ侵略してきたのは、半ば決まっていた運命だった。

それが原因でおこったのが、一世代前の戦乱だ。南土は一時期央土にほとんど占領されかけた。南土の国々が立て続けに敗北したのは、物量の差であり、兵器の差であり、戦略の差であり、経済力の差だった。

最後に最南端にあるこの国のみが残り、誰もが央土による南土平

定を確信した。

そして、央土の諸国連合は、ただ一国に敗れ去った。

原因は、いくつがある。

央土内で、南土の領土分割の条件交渉が原因で、いささか内部分裂を起こしていたこと。同時にそれを好機と見た氷土が央土に侵略してきて、そちらの対応に気がそれたことも大きいだろう。

だが、何よりもあの変態王族たちの力は無視できないほど多だった。侵略していた央土の軍隊をほぼ真つ二つにぶつた切り、戦線を崩壊させた。相手が混乱しているうちに、散りじりになっていた諸王国の兵をまとめあげ、フィリカ王国の指揮のもと央土の侵略に對抗。最終的には南土の境界線まで押し返した。

フィリカ王国は戦線を押し返した後、攻め滅ぼされていた南土の各国を藩属とすることによって各々の領土に返還した。そのおかげで、大陸最南端の小国でしかなかったフィリカ王国は、一気に南土の宗主国となることになった。

この国の王族は、南土の要だ。

彼らがいなくなつては、フィリカ王国どころか南土そのものがないかねない。

(やっぱり王族は殺せないかな……。いや、もともと殺すつもりはないけど)

やや潔癖な性格のティアとしてその身分だけでなく、王族のことは人格的に尊敬しているのだ……。あくまで、その性癖を除けばという条件付きで。ちなみにティアを欺いていた元王子で現在トカゲになっているどっかの誰かに対しては、本気で死ねばいいと思っているが。

一番いいのは、この国の政治から王族を完全に隔離すること。実

権を何も与えず、象徴としての王族として飾り立てることだ。

だがそれは、あまりにもムシのよい話である。

なぜならば、フィリカ王国の王族は、南土が侵略された際には真っ先に前線へと駆けつけなければならぬ義務がある。

(フィリカ王国に敗北したのは、央土にとっては手痛い失敗。だからこそ、央土に対する牽制として与えられている南土全土での統帥権。そして、有事に南土をまとめるために絶対無比の効力を発する、勅命という伝家の宝刀)

かつてに比べれば経済的基盤はしっかりしているが、それでも南土は央土には劣る。いま南土をまとめている仕組み上、統帥権の剥奪など不条理といってもいい。王族に南土全土の統帥権が与えられているのは、王族だからという理由だけではない。軍事において彼ら以上に貢献できる人間が、また央土に恐れを持たせられるだけの力を持つ人間がフィリカ王族以外にいないことを、さきの戦乱において証明して見せたからなのだ。

フィリカの王族に南土の統帥権がある理由は、名実ともにそろっている。この発案は、交渉の壇上にすら拳がらない。

そもそもいまだって、王族はほとんど国政にかかわっていないのだ。

この国の頂点たる彼らは、総じて権力に興味がない。軍事には絶対的な権力を浸透させているが、行政、司法、立法にほとんど関わっていないのだ。フィリカ王国の王族は代々「君臨すれども統治せず」が原則である。ティアだって権力に野心があるわけでもないが、それでも王族の欲のなさには驚いた。

なんとというか、彼らは自分たちの国土が守られ、その理解しがたい性的欲求が満たされていればそれで満足なのだ。統帥権があるのは、南土に安心感を与えるためだ。その強大な力をふるったことはない。やることといえば、その異常な性的思考からくるわけのわか

らない勅命とか意味のわからない奇行だけだ。その頻度も、決して多くはない。

その唯一が多大な迷惑なのだが、絶対王政による完全な恐怖政治を敷く氷土の王族などに比べれば、慎ましいものである。ティアの懊悩など、ぜいたくな悩みと言い換えてもいい。

(いつそ央土あたりと通じて、侵略の手引きでもしてこの国をなくしてやるうか。……いや、もっとダメだ。伝手がなし)

それ以前に、いくら王族　　というか王子もどきのトカゲ　　憎しとはいえ、さすがに売国奴になる気はない。ティアは、それなりにこの国を愛しているのだ。

考えれば考えるほど、革命の必要性などない気がする。必要性が存在しないということは、確固たる思想がないということにもつながる。政治的な革命において、思想は動力源だ。思想がない革命など、ありえない。

しかしそれは、王族がこれ以降も君臨し続けることを肯定するしかないということだ。あの変態どもが、これからも、この国の、頂点で、あると、いう、ことだ。

まあ、それは許そう。いまの情勢での王族の必要性はいまさら疑うまでもない。エリザベス女王のことだって敬愛している。これから先に生まれていくだろう変態王族も好きに生きればいいと思う。

しかし、一個だけ問題があるのだ。

(それだと、あのトカゲを殺せない……!)

そこである。

それだけ、ティアはどうしても許せない。あのトカゲが同じ国土にいるというだけで、ハラワタが煮えくりかえるような怒りがふつふつとわいてくるのだ。

ティアがそんな思考のドつぼにはまっていると

「あ、あの」

目の前に座るエレンが声をかけてきた。

「……なに？」

ティアは問い返しつつも内心で首をかしげた。

基本的に目下の人間は、用がなければ目上の人間に話しかけない。純然たる身分さと上下関係があれば、それはなおさらだ。ティアはそこまで気にしないが、向こうから話しかけてくるのは勇気がいっただらう。それを盾にして、一人で静かに考え事をしていたのである。

「もしや、ご気分でもすぐれないのでしょうか」

「ああ……違う。ちょっと考えごとをしていただけ」

たぶん、黙り込んでうつむいているティアの様子から、乗り物酔いをしたのだと勘違いしたのだらう。

さすがに、申し訳ない気持ちになる。身分差を盾に、相手にとっては気まずい空間を作って放置していたという自覚もあるからなおさらだ。

思考に沈んでいた頭を切り替える。普段は無愛想で無表情だし、わりと腹黒い内面をしているが、目下の相手への気遣いはきちんとするのだ。あくまで『仕事の上では』という注釈つきになるため、プライベートでしかないいまはそれがやや欠けている。

「黙り込んでて悪かった。何か聞きたいことがあるなら、何でも言っ
つて？」

「それでしたら、あの……」
「どうしたの？」

エレンにとって、ティアは主人。名実ともに格上の相手だ。口ごもるのも無理はないだろう。それをメンドクサイと思わなくもないが、メイドの相手は主人としての義務でもある。自分を納得させたティアは、言葉の先を促した。

エレンはそれにつられ、意を決したように口を開く。

「あ、あのつ。お嬢様のご結婚は、いつになるんですか!？」

「ごん、と痛そうな音を立てて、ティアの頭が窓枠にぶつかった。

「だ、大丈夫ですかっ？ 頭をぶつけられるなんて、そんな鉄道が揺れましたか!？」

「あ、ああ、うん。平気。別に揺れのせいじゃないから気にしないで」

ティアが頭をぶつけたの原因を、列車が揺れたからと勘違いしたらしい。どちらかというと、原因は目の前のこの娘なのだ。

「で。なんでいきなり結婚なんて話になるの」

あまりの質問に、目下への気遣い放棄してぶっきらぼうに尋ねる。だが、遠慮を捨てて目をきらきらさせているエレンはそんな主人に気が付いた様子もない。夢見る乙女の表情で続ける。

「だって、王宮での奉公を終えて館にお戻りになるといことは、そういうお話があったのではないのですかっ？」

「ああ……」

そう言われれば、納得もできる。

確かに王位についたエリザベスのお付きを唯一許されていたティアがわざわざ帰って来たとなると、そういう想像が膨らんでもおかしくはない。

ティアは諜報活動という裏の目的のため出向していたが、ふつう貴族の令嬢が王宮に奉公する目的は、世間や教養を学ぶため、何より王宮付きであったという嫁入りの際に有利になる箔付け、もしくはもっと直接的に、王宮に仕える将来有望な役人や軍人を結婚相手としてゲットするためなのだ。

とはいえ、そんな浮いた話は残念ながら存在しない。諜報目的で王宮に奉公したティアが王宮で作った縁といえば、おいそれと口外できないようなものが多い。

しかし

「そっか……」

そうだ。なぜ気が付かなかったのだろう。やはり、一人の思考などたかがしれてるなと反省し、大切なことを気が付かせてくれたエレンの手を握る。

「ありがとう、エレン。あなたのおかげで道が開けた」

「へ？」

いきなり手を握ってきたティアにエレンは目を白黒させているが、かまわなかった。うん、そうだ、とそれに気が付かなかった自分に視野の狭さを笑う。

自分は、女なのだ。

女王が存在するという国柄、男女の格差が少ないフィリカ王国であつても、政治は基本的に男が動かすものである。女のティアが頭

を悩ませて変態王族とかこの国の政治とか大陸の情勢がどうか、もう考える必要はない。ぶっちゃけメンドクサイことはすべて男に押し付ければいいのだ。生きるために働く必要はないのだ。全部ほうりだして、どうか適当な相手と結婚してあとは慎ましく暮らせればいいのだ。

（うん。いわゆる、隠居というやつだ。外国の……氷土は絶対に行きたくないし、南土だとかこの国の王族の影響が大きすぎるから……できれば、央土。うん。央土諸国の貴族が有力な商人を捕まえて、この国から逃げよう。そしてトカゲのことは、忘れよう）

ティアの結婚を隠居とし手段とするその、ある意味ではとても貴族らしいが、残念ながらちっとも乙女的ではない考え方。また、三年に渡る王宮でのメイド生活において、男にはいつさい目をくれず諜報活動にいそしんでいたという実績。そしてなにより、自分の初恋にも気が付けないような鈍さと疎さ。

世の中、そんな思考と行動の持ち主がそう簡単に結婚できるような仕組みになっていないというのを思い知らされるのは、もうちょっと後のことだ。

第二話 大陸という複雑怪奇に入り組んだ情勢について（後書き）

別に複雑でも怪奇でもない、いたってシンプルな大陸情勢でした。

鉄道が走っていることからお分かりのように、中世じゃなくて、近世です。イギリスで言うヴィクトリア期、日本という明治維新あたり。魔法もあるけど銃もある世界観ですが、基本、科学寄りです。

ここで書いた基本設定ですけど、これからちよちよいと書き換えるかもしれません。その時は「設定の都合が悪くなったのか……」と生暖かいめで見守ってやってください……。

第三話 メイドという主に従順なはずの職業について

「おかえりなさいませ、お嬢様」

そう言ってティアの帰宅後に部屋でくつろいでいる彼女のもとに
来たメイドは、リリアという。穏やかながらも大人びたその容貌や、
金髪を肩口で切りそろえているその髪型は珍しく目を引く。

「ただいま。久しぶり」

王宮ではメイドをやっていたティアだが、実家に帰ればかすずか
れる身分である。リリアはティアが王宮に行く前からこの家に勤め
ている。まだ二十半ばの女性だが、祖父の信頼も厚い優秀なメイド
である。この若さで使用人の取りまとめ役であるハウスキーパーを
こなしている。

ティアの言葉にリリアはにっこり笑い

「三年ぶりですね。控^{むくち}えめで慎^{おそ}ましやかなご性格はご健^{けん}在なようで、
安心いたしました」

そして、台詞の行間に率直な本音を挟むのが非常にうまい二枚舌
の持ち主である。

「リリアも相変わらずな性格で」

「お褒めいただきまして何よりです。エレン。あなたもお疲れでし
たね」

無然とするティアをあっさりスルーし、エレンに声をかける。後
ろでもたもたと荷解きをしていたエレンの背筋がびんっと伸びる。

「は、はいっ」

「道中どうでした？」

「はいっ。お嬢様にもよくしていただきましたし、自分の経験不足を色々と思い知らされました！」

「そうですね。ところで」

一見笑顔に見えるリアの瞳の奥で、きらりと鋭い光を放たれた。

「なにか粗相ソドをしていませんよね」

「そ、そのようなことは……」

笑顔で迫る上司からの追及に、エレンの目がすいーっと泳ぐ。わかりやすいぐらいに隠し事が下手である。

その会話に、ティアは少し苦々しい気分で道中を思い出していた。

(ドジといえば……)

さんざんだったのだ。帰りの手回しが全くできていなかったことに加え、道を歩けば方向を失うわ転びそうになるわ、荷物を持たせれば中身をぶちまけかけ、鉄道に乗れば切符を落とすようになったりしていた。正直、ティアがフォローしなかつたら帰れなかつたに違いない。付き人という名目で来ているはずなのに、はつきり言って邪魔以外の何物でもなかった。

慣れない主人と土地に緊張しているのだろうと思っていたが、リアのこの尋問を見る限り、あれがエレンの素のようだ。

「そのようなことは？」

「あつう………しましたあ」

縮こまりつつも正直に白状する。どうせここで嘘をついても、後でティアから暴露されることだ。それを考えれば、賢明な答えである。

だが、賢く答えたとしてもそれが常に問題を回避してくるわけではない。

案の定、リリアは、はあと嘆息した。

「エレン。わたしたちは雇われの身でしかありません。主とメイドなど、所詮は契約おかねとおかねので縛られた関係。ですから別に主に絶対の忠誠を尽くせなどとは言いません」

「はい」

説教にしてもやたら率直な意見にしても、そういうのは主一家のいないところで言うべきことである。

よそでやってくれないかな。そんなことを思いつつも、蚊帳の外の外のティアは二人のやりとりをぼうつと眺める。リリアがわざとティアの目の前でああいうことを暴露しているのは承知しているから、言っても無駄だろうとあきらめているのだ。

「ですが、お金を頂いて仕事を任されているのです」

「はい」

「だというのに任された仕事も満足にこなせない。まして器物を破損する。経験不足は仕方ありませんが、これらはそれ以前の問題。そんな人間むのうに賃金を払う価値はありません。ですから、失敗の分だけ、罰さめつりよせんびきを与えようと言いましたようね？」

「ゆ、許してください！ 後生です！ 今月のお給金は、もう雀の涙ほどしか残っていないんです！」

「大丈夫ですよ。安心なさい」

エレンが必死に嘆願する。同情を誘うに十分な仕草だったが、リ

リアの笑顔はちつとも揺るがない。

「もうちよつとぐらいはありますよ」

「そんな！」

「マイナスという手だってあるんです」

「そんなあ！」

とうとう涙目になり始めたが、理由が理由だけに全然同情できない。ただだけ失敗してるんだという話である。

しかし、そろそろ飽きてきたのも事実だ。目の前で繰り広げられる寸劇を、ティアは「ふう」とため息をつくことで遮った。

「リア。おじい様に挨拶をするから、そのぐらいにして」

新人いじめを見かねた、というわけではないがティアが助け船を出す。エレンの荷解きがやたら時間かかっていたので後回しにしていたが、そもそも帰って来てまずしいけないことはそれである。

そこはリアも異論がないようで、あっさりと引き下がった。

「そうですね。取り次いでまいります。エレン。お嬢様の身だしなみを整えて差し上げなさい」

「は、はい！」

エレンがほつとしながら返事をする。

「では失礼します。あ、お嬢様。あとでぜひとも王都での土産話を
お聞かせくださいね」

いたずらっぽく笑いながら一分の隙もない、優雅な一礼をして部

屋を出る。

それを見送りながら、ティアは軽く眉をひそめる。

「リリアは相変わらず、性格が悪い」

あのメイドの性格は、ティアがいたころから変わっていないようだ。口を除けば口の打ちどころのないほどに有能だというのが、また性質タチ悪い。

エレンの失敗談でも話してやれば満足かな。さりげなくひどいことを考えながら衣装棚を開ける。

エレンが着替えの手伝いをしてくれるが、人に着せるのに不慣れなのが丸わかりだ。ティアが一人で着替えたほうが確実に早い。タイムリミットはリリアが戻ってくるまでなのだが、このままでは間に合わないだろう。

「エレンの勤め始めはいつから？」

「う」

ティアの質問に、エレンの手が鈍った。

「ふた月ほど、前からです」

「なるほど」

それだと、まだ積み上げの時期だ。本来ならば、下働きをする期間である。付き人をやれる経験はない。

仮にも子女の世話をするレディースメイドは、メイドの中でも上級職だ。それなのになぜ新人が、と不審に思う。

「申し訳ございません……」

もたつきを責められたと思ったのだろう。エレンがうなだれた様子で謝罪してくる。実際、責められてしかるべきな手際だったので、少し厳しくすることにした。

「謝るくらいなら、ちゃんと仕事をして」

着替えが終わったので、自分でイスを引いて鏡の前に座る。それを見たエレンが慌てて櫛を取り出す。リリアだったら櫛にしてもイスにしてもティアが行動する前に用意するが、エレンにそれを望むのは難しいのだろう。

「ねえ」

「は、はいっ」

髪をすかしながら質問する。心地よいとは言えない手つきだが、これ以上は責めるつもりはない。一生懸命丁寧にしようとしているのは伝わるからだ。

「エレンって、もともと何で雇われたの？」

「えっと。パーラーメイドです」

一口にメイドといっても、その仕事は細分化されている。メイドの中でもちゃんと役職が決められており、上下関係は存在する。パーラーメイドは、その中で給仕と来客の取次をするのが主な仕事だ。接客担当だから、容姿がいい者が採用されやすい。まっすぐに伸びた、手触りのよさそうな栗毛。可愛らしく整った顔立ちは、年の割にちよつと幼い感じもするが好みだろう。むしろ可愛げが増すかもしれない。

なるほど、エレンの見た目ならそれは納得だが……

ティアはエレンの顔をしげしげと眺めた後、ぼつりとつぶやく。

「……お客様にお茶でもかけた？」

「はい、ご明察で……。熱いお茶を、頭から……」

「……」

「しかも頭に茶器までぶつけて、お客様を気絶させてしまって……幸いというべきか、頭をぶつけたせいかな、その時のお客様の記憶が飛んでいて大事にはなりませんでした」

エレンはうなだれながらも語る。せいぜい服にこぼしたぐらいだろうと思っていたティアは、予想の斜め上をいくドジっぷりに思わず口を閉じてしまった。というか、気絶とは。いったいどんな勢いでぶつかったのだろう。

「リリアさんにごつてり絞られて、その後スカラリーに格下げされたのですが……」

スカラリーメイドは食器洗いなど厨房の掃除を行う専門職だ。メイドの中でも地位が低いし、かなり薄給である。

しかし厨房はコックの領分であるから、本来ハウスキーパーであるリリアの権限が及ばないはずなのだが、なにか無茶を言ったのだろうか。それともリリアの権力が厨房までに及んでいるのか。どちらかというと、後者の気がする。

「そこでは食器を割りまくったと」

「いえ、それもあるんですが……その、ボヤを起こしてしまって……」

「それはまた……」

もはやかける言葉も見当たらない。エレンも自分の失敗談が情けない自覚があるらしく、話すごとにだんだんしょぼくれてきた。

しかし聞けば聞くほどあきれられる内容である。

(……よくリリアもクビにしなかったな)

本人の手前、口には出さないでおいたが、ティアがそう思っ
てしまっても仕方がないほどの失態の数々だ。

ハウスキーパーは、メイドの人事を任される立場である。当然、
部下であるメイドが失敗すれば上司である彼女が責任を問われる。
ティアも王宮にいた時には上級メイドとして多少の人事を任される
こともあったが、そんなポカやらかす奴がいれば、即刻やめさせて
いる。食器を割るぐらいならまだしも、ボヤはない。

「このままではやらせられる仕事がないとリリアさんも頭を悩ませ
ていたようなんですが、ちょうどその時にティアお嬢様のご帰還が
ありました……」

「それでレディースメイドに格上げ、か。運がいい」

「はい。わたしの他に、お嬢様の身の回りを世話できるような、適
当な年齢のものがいなかったというのと、傍にいて見栄えがいいだ
ろうと。……ただ、いくつかのあるはずの仕事と本来ある特権は取
り上げられています。あと、給料もスカラリーの時のままです……」

悲しげに言うが、クビにならなかったただけ幸運である。エレンも
そこは承知しているのか、声は悲しげでも愚痴る様子はない。

「実家は何をやってるの？」

「もとは商家でした、けど、その……」

エレンが口ごもる。基本的に商人は平民のなかでもかなり裕福な
部類だ。もちろんピンキリだが、資産で貴族を優に上回るものも多
い。その娘がメイドなどやっているからには、相応の事情があるの

だろう。

「言いにくいなら、別に無理しなくてもいいけど」

「いえ、大したことじゃないんです。詐欺にかかって、一転、借金持ちになっただけで……」

「そう……」

実家の傾きも、もしやこの子が原因じゃないか。いままでのドジっぷりを見ているとそんな邪推をしてみたが、さすがに関係ないだろう。

暗い表情になったエレンに、問いかけてみる。

「……エレン。メイドの仕事は、つらくない？」

綺麗な手を見ればわかるが、苦労とは無縁の裕福な環境だったのだろう。あの壊滅的なドジっぷりも許せるほどに。そんなお嬢様が、人のために動きささいな失敗で叱られるような立場に転落したのだ。さぞかしつらいに違いないだろうと、さして同情もせずなんとなく口にしたのだが

「いえ、楽しいですよ」

声を弾ませて答えたその表情は、一片の曇りのない笑顔だった。意外な返答に一瞬だけ目を見張る。

「いろんな人と知り合えました。いままでやれなかったことも、いろいろできます。たぶん、あのままだと経験できなかったことがいっぱい。だから、不幸なんかじゃないです」

「……そう」

繕ったわけではない、気丈とはまた違う笑顔。それに、エレンの人柄を感じて口元をほころばした。なるほど。これは、リアアがクビにしないわけだ、と納得する。

「お嬢様も王宮でメイドをされていたんですね。どうでしたか？」
「つらいことも一杯あった。理不尽にもさらされた。なんであんなことをやってるのか、疑問に思ったこともあった」

隠すようなことでもない。正直に話す。特に最初の一年の王宮生活は、決して面白いものではなかった。エリザベスの世話の間を縫って他の下働きの仕事もこなしていたあの生活は、かなりの激務でもあった。

それでも王宮の生活に耐えきれたのは

「けど、なんだかんだで、主が良かった」

変態だけど、というのは国家機密に該当する秘事なので、決して言葉には出さない。

特に直接主人に仕えるメイドというのは、主の人柄によって仕事への思いが変わる。主が悪ければイコール仕事場が悪いということになるし、その逆もまた然りだ。

いまは自分がエレンの主なのだ。ならばできるだけ、自分も頑張ろう。

そんな決心をしていると、ふと、エレンの目がきらっきらに輝いていることに気が付いた。

「主って、エリザベス女王様ですよっ。どんな方なんですか！」
「……」

言われてみれば、彼女はいまフィリカ王国でもっとも有名な人間

なのだ。多少興奮してしまうのもわかる。

「基本、優しくて淑やか。王宮内の評判もすごい、いい。人徳もあるし、人を見る目もある。猫かぶりがうまい。それと」

言っただけいいこと悪いことを頭の中で分けて答えながらも、ふと芽生えたいはずら心から、余計なことを付け加える。

「ノックをしないで部屋に入ると、すぐに仲良くなれる」

「ノックを……？」

当然その言葉の意味がわからないエレンは首を傾げる。ティアもわざわざ説明する気はない。

しかし、中流階級とはいえ、裕福な家庭ならば貴族と通じるところもあるだろう。どうせならと思って尋ねることにする。

「ねえエレン」

「はい？」

「恋人とか、いる？」

「残念ながら、これでも元は箱入りでしたので」

「そう。じゃあ、結婚って、どうやるか知ってる？」

「……………は？ その、いま、なんと？」

聞こえなかったのだろうか。いま信じられないことを聞きましたけど自分の聞き間違えですよ、という顔をしているエレンに、もう一度、今度はちょっと大きめの声で同じ質問を繰り返した。

「だから、結婚のやり方を教えて」

「……………え？」

エレンの目が点になった。

第三話 メイドという主に従順なはずの職業について（後書き）

三人称はやっぱり難しいなあとしみじみ思います。

そういえばこの間、資料にと読んだ本『ヴィクトリア朝の性と結婚』（中公新書）を読み終わった後の感想を、一言。

現実には、夢がないですね（危ない発言）

ということ、これは大部分が夢と希望と妄想でできたファンタジーです。

第四話 侯爵という責任ある立場にいる祖父について

ティアにとって、恩人であり尊敬すべき人物である祖父との面談は非常に緊張する。

メデイチ侯爵は、一言で表すならば巖のような人物だ。下の姉などは「あれで可愛いところがあるのよ」などと理解不能なことを言っていたが、ティアにとってみれば祖父は殿上人に近い。いや、むしろ心の距離としては、仕えていた王族のほうがまだ近いといってもいいかもしれない。

「ただいま戻りました」

「うむ」

挨拶のあと、二、三の報告をする。王宮の様子。王都にいる下の姉の様子。知っている限りのことをできるだけ詳細に伝える。とはいえ、もともと緊密に連絡を取っていたので、そう伝えることもない。

「ところでおじい様」

一通りの連絡を終え、本題ともいうべきことを切り出す。

「何だ」

「何か、私宛の縁談の申し込みなどはありませんか？」

びくん、メデイチ侯爵の片眉が跳ね上がった。

いま祖父に問うたのは、エレンから聞いた結婚する方法その一だ。ティアぐらいの身分と年齢ならば、縁談の十や二十は必ず届いているものらしい。むしろなぜそんなことも知らないのかと問いたたださ

れた。

(子供でも知ってる、淑女だったらたしなみ以前だ、と言われても知らないものは知らない……けど、おじい様はどうされたんだろう?)

貴族同士の婚姻は、保護者が決めてしまうことが多い。ならばそういった申し込みはすべて祖父のほうに回っているはずだ。いままでは特に興味もなかったが、もし都合の良い相手から縁談の申し込みがあつたら受けてしまおう。そう思つての申し出だったが、気のせいか、祖父が狼狽している気がする。

エレン曰く、子供でも知っているような事柄を口に出したただけだ。それなのにあの厳格でゆるぎない祖父がなぜ、と思つたが

「ない」

厳めしい顔で断言されてしまった。その声音はいつもと変わらな
い。

狼狽云々は、どうやらティアの思い込みだったようだ。

「そうですか……」

答えながら、落胆に少し肩が落ち込んだのは仕方ないだろう。ティアとて女の子なのだ。普通ならばあるべき求婚がないとなるれば、それなりにショックである。

(そんなに魅力ないかな……まあ、こんなやつペリ顔じゃしかたないか)

つるりと自分の顔をなでながら思つ。

四人いるメデイチ家の子弟の中で、ティアのみ異大陸の血が混じっている。この大陸では珍しい黒髪黒目もそうだし、肌の色も他と比べて少し濃い。それに顔立ちも、この大陸の人間に比べて彫が浅くなっている。

(器量もよくないし、妾腹でしかもそれが異大陸の人間……壁は多い、か)

しかしそれでも侯爵家の人間なのだ。積極的にこちらから仕掛ければ、もの好きがいるだろう。

「では、何かしらの招待状などは届いていませんか？」

エレンからの伝授その二。積極的にパーティーなどに行つて知り合え。そして男を捕まえる。

大変わかりやすい教えである。

「それならば心当たりはあるが……ティアよ」

「はい」

「先ほどからの質問は、なんだ？」

祖父の問いに、ティアは小首を傾げた。

ティアは知らなかったが、淑女のこういった行動は一般常識だぞうだ。ならば祖父が知らないはずないと思うのだが。

少々不審に思いながらも、ティアは正直に答える。

「結婚するために活動しようかと思ひまして」

「……………」

当然のことを言ったただけのだが、ずんと重い沈黙がメデイチ侯爵

を包んだ。

気のせい、ではなさそうである。ティアはそんな祖父の様子を怪訝に思いながらも、ふと思いついて言葉を重ねる。

「もしよろしければ、おじい様からどなたかご紹介していただけますか？」

「……………考えて、おこつ」

唸るように返って答えは、明らかに乗り気な様子ではなかった。

「ということだった」

「そ、そうですか……………つぶつぶ」

「うん。リリアはおじい様の様子に何か心あたりはある？」

「いえ、わ、わたしにはとんと見当も、くふ、つきません、よ？」

「そう。ところでリリア」

話を終えたティアは、さっきから肩をぶるぶると震わせて笑うのを耐えている金色短髪メイドに、じとつとした視線を送った。

リリアに祖父との面談の一部始終を伝えたのだが、縁談の件あたりからこのありさまなのだ。

「何かおかしいの？」

「いえ、くくつ。ただ、お嬢様の純粹じゆんじゆんさは磨き抜かれているな、と思ひまして」

ようやく笑いかみ殺し嚙下し胃の中に収めたエレンは、とてもいい笑顔でよくわからないことを言う。その表情には、大変面白い話をごちそうさまです、と書かれている。

さすがに意味も分からずここまで笑われればいい気はしないが、ティアにとってこのメイドの性格の悪さは今さらである。「あつそう」と、これ見よがしにため息を吐いて、話題を切り上げることにした。

祖父との面談を終えたティアは自室に戻っている。門前の掃除に行かされているそうで、エレンはいまこの部屋におらず、リリアと二人きりになっている。

確かにあそこの掃き掃除ならば複雑な手順もいらず壊すようなものもないが……まかり間違つて、馬車にひかれたりしまいそうで怖い。なんとなく心配になったティアは、窓をのぞいてエレンの無事を確認してしまう。

楽しそうに掃き掃除をするのんきな栗毛の頭が見えた。

「しかしお嬢様は、昔からお変わりないですね」

「そう?」

「はい。お嬢様が王宮生活で大人おとなになつてしまわれたらどうしようかと心配していましたが、ここまでお変わりせいちょうしないのも、また素晴おもしろしいものですね」

「……よくわからないけど、バカにされてない?」

「いえいえ。滅相めしやうもありません」

リリアは人を食った笑顔のまま、綺麗な一礼で頭を下げる。

一発殴つてもいいかな。ティアは割と本気でそう思う。感情は0 Kとゴーサインを出したが、残念ながら理性がNOと言う。体罰は、ティアのポリシーに反するのだ。

……いやでもやっぱ殴ろう。

静かに堪忍袋の尾を切ったティアが、そつとこぶしを握り

「お嬢様。お茶をどうぞ」

「……どうも」

ティアの思考を読んでいるのでは、と思えるほどに絶妙なタイミングでリリアの言葉が入る。

カップに注がれた紅茶を勧められ、握っていたこぶしを解いて受け取る。香りを楽しんで、一口。腹立たしいが、王宮で自分がエリザベスに入っていたのに比べてもおいしい。先ほどまでの怒りが、すうつとどこかへ流れて行った。

「おいしい」

「ありがとうございます」

ティアの素直に礼に、リリアもまた素直に返礼する。

お茶菓子とセットになっているこれらは、ティアが部屋に戻ってくる前に用意してあった。エレンだったらこつはいかないだろうなややひどい、しかし正当な評価を下し、まだ温かいスコーンをつまみながら窓の外にいるエレンを観察する。

リリアはそんなティアの様子を見ながら、問いかけてきた。

「エレンはどうですか？」

「いま、エプロンドレスの裾を踏んで転んでる」

「それはまた、はしたない」

「そして勢いよく植木に頭を突っ込んで、枝を折ってる」

「後で庭師に頭を下げさせに行きませんと」

ほのぼのとお茶をしながら、ティアは先ほどのリリアの問いに答えた。

「……何であの子を？」

先ほどリリアから問われたエレンの評価を、ティアは疑問にして明確に表す。

いくら人がいなかろうと、あそこまで未熟な侍女など必要ない。リリアが彼女をクビにしなかったのはエレンの人柄だろうが、それはティアの付き人にする理由にはならない。例えば目の前にあるこの茶器をエレンに準備させたら、それはもう大惨事になること確定だ。

人事の不手際を問われたにも関わらず、リリアは後ろ暗いところなどありませんと言わんばかりの笑顔だ。

「お嬢様におしつひびつたりだと判断したまでです」

「リリア……」

あまりに予想通りの答えに、ティアの声が思わず不穏になる。

だが、リリアの笑顔はそれにも微塵も揺るがない。

「何しろわたしはお嬢様を信用していますので。か弱いそんが子女ならともかく、ティア様ならエレンの不手際ドツの対処しりあもできますでしょう？」
「部下の世話は、リリアの仕事のはず。あれが傍付きのメイドになるぐらいなら、わたしは自分で家事をこなして一人で過ごす」
「そんな。良家の娘がそんなことではいけません。家の中でも手袋をして、家事など一切せずに優雅な遊びを仕事とするのが貴族の女というものです。それに」

ティアは静かにエレンの言葉の続きを待った。なぜならば、二枚舌も使っていない完全なる建前を申した後に付け加えられるものは、率直な本音以外にないからだ。

「わたしもいい加減、心労めんどりにが重なりまして」
「……リリア」

ティアは、ゆっくりと自らの侍従に問いかける。

「殴って、いい？」

リリアは、にっこり笑って自らの主に答えを返す。

「拒否ほつりよくはんたいいたします」

「死ね」

貴族の娘のものとも思えない、言葉汚い罵り。それとともに遠慮なくふるわれたティアの拳は、残念ながら空を切った。

身をかがめてあっさりティアの暴力をかわしたりリリアは、にっこり余裕の笑みを浮かべる。

「残念は・す・れ、ですね」

リリアの性悪な頭を殴ってやろうと立ち上がって拳を薙いだティアは、舌打ちだけして席に着きなおした。

「それにあの子、手際は悪いですが、運が良いんですよ」

「うん。だから何？ 運が良くても、わたしの侍女にする理由にはならないと思うんだけど」

「例えばお客様に茶器をぶつけて気絶させたことがあったのですが」
「リリア？ 無視？ というか、その話はもうエレンから聞いた」

何事もなかったように繰り出された話は、失礼を通り越して事件

になりかねない例の一件だ。たぶん、エレンのドジの中でも一、二位を争うだろう。

しかし、リリアはティアの追及など聞こえないものとして話を続ける。

「あのお客様は好色な方でしたので、つい不問にと思ってしまったのです」

「……………」

「さすがにかばえきれない失敗でしたが、幸いなことに被害を受けた方も記憶ない状態でしたし……つくづく運の良い子ですよね」

ティアは無言で紅茶をすすった。このメイドとは、いっぺんことんまで話し合っておかなければならないことが多い気がする。とりあえず、追及はもう無駄っぽいので話に乗っかることにした。

「でも降格されたってきいたけど？」

「あれは絨毯を汚した罰です」

リリアは一切悪びれもなく白状する。

「そう……………」

確かに絨毯のしみ抜きは大変だ。そんな問題の本質とはズレた思考は、ただの逃避でしかないということぐらい自覚している。

しかし、と思う。

あのメイドのすまし顔をたたき割れないものだろうか。ティアはその方法を検討して、ふといいものを持っていることを思い出した。

「リリア。荷物の中に封筒が入っていないかった？」

「それでしたら机の上に置いておきました」

打てば響く答えが返ってくる。荷解きは、やはりエレンでは終わらせられなかったようでリリアが進めたらしい。
やっぱりなと思いつながらティアは机の上を確認する。

「うん、確かに。……はい、あげる」

「お土産ですか？」

リリアはティアからやたら分厚い封筒を受け取りながら、にこやかにそんなことを言う。

……このメイドは主人に何をもとめているのだろうか。うん、金か。

ティアはそんなわかりきったことを考えながらも、リリアの急所というべき単語で答える。

「アンジェラ姉さまからの、手紙」

メイドチ家次女の名前を出すと、ぴしりとリリアの笑顔が固まった。

それを見て、表情には出さずに内心でくすりと笑う。大成功である。リリアの様子に、ティアは淡々と、しかしできる限りのいたずら心を一杯に込めて言った。

「どうぞお読みになってください、お義姉さま」

ティアの追撃に、リリアの固まった笑顔が、ぱりりと音を立てて砕けそうになった。

「お、おじよ、う、さま？」

饒舌なリリアらしくもなく、その言葉を引き出すだけの動作がやたら鈍い。リリアの体の関節が、ぎぎぎ、と錆びた車輪のような音を立てている気さえする。

リリア・ウィング。貴族であるものの、没落しかけているウィング男爵家の次女。彼女は、壮絶なる恋愛の末にウィング家の長男と結ばれたアンジェラの義妹になる。

つまりはティアの義姉にあたるのだが、リリアは自分の義姉であるメディチ家の次女アンジェラをものすごい苦手にしている。

とりあえず、壊れかけなリリアの笑顔にとどめを刺しておくことにした。

「お嬢様だなんて、水臭いです。どうせなら、これから義妹と呼んでくださいな？」

とうとう、ばりんという破碎音を立ててリリアの笑顔が砕け散った。

「そんなことをするぐらいでしたら、舌かんで死に雲隠れします」「あつそう」

あんな良い姉さまなのに、何でそんなに苦手なんだろう。完全に笑顔が崩れ落ちて無の境地に達しているリリアの心境を不思議に思いつつも、ティアはカップを持ち上げてお代わりを催促する。

「……どうぞ」

「ありがとう」

珍しく無表情なリリアによって注がれたその一杯。

勝利の味は、なんだかとても渋かった。

第四話 侯爵という責任ある立場にいる祖父について（後書き）

ヴィクトリア朝の服飾を勉強中。ぶっちゃけ洋服描写が全然ないのは、まだ全然知識がないというそんな理由からです。情景描写もそうですけど、そっちはまだまだ……。服飾については興味深いことも多くて、へー、ふーん、と感心することも多いです。

しかし、なにより一番思うことは

これ全部書くのはメンドクサごほんげほん。

……うん。もうちょっと知識いれたら、順次作品に反映させていきたいと思います。

小話 真・侯爵という責任ある立場にいる祖父について

夜。

机の上でももされているランプの明かりを頼りに、リリアは手紙を読んでいた。

ハウスキーパーの特権のひとつとして、個室が与えられるというものがある。住込みが基本のメイドは、基本的には相部屋から四人部屋。それも、決して広い部屋ではない。その中で個室に住むというのは、かなりの厚遇なのだ。

リリアもその例にもれず、きちんと部屋を貰っている。そこで義姉であるアンジェラからの手紙を読もうと努力していたのだが……なにせ、封筒を分厚く膨らませていた手紙だ。量が半端ない。そして何より、内容がひどい。

フィリカ王国では都心部でも識字率は六十パーセントほどだが、貴族の端くれであるリリアは教養として読み書きを習得している。世の中、自分の文字も書けない人間が多く存在する。そんな中で当たり前のように教育が受けられた自分は幸運なのだ。それはリリアだってわかっている。教育を受けるということが、非常に恵まれたことなのは、わかっているのだ。

だが、いまだけは自らに与えられた教養という恩恵を呪っていた。この文字が、読めなければいいのに。

アンジェラからの手紙を前にして心の底からそう思うのだが、読まなくてはならない。きちんと読んで返信しないと、アンジェラは恐るべきことに、すねるのだ。いい年したいい女が、子供のようにしかも、それを放っておくと直接会いに来る。なんでなんでお返事してくれないのと言いながら、涙目で迫ってくる。

リリアにとってそれは、鳥肌ものを通りこして心臓が自爆しかねない光景である。なんとしてでも阻止しようとしているのだが、内容がもう読んで疲れる。結婚生活五年目にもなっただけなのにラブ

ラブなのはよくわかったが、身内ののろけなんて読んでいても胸焼けするだけだ。

「アンジェラ様に、ティア様の可愛げのなさを分けて差し上げたい……！」

そうすればもっと扱いやすくなるのに。そんな思いで頭痛がし始めた頭を押さえながら唸る。

そうやってざーざーざー口から砂を吐きながらもなんとか半ばまで読んだところで、リリアは手紙をたたんだ。

読むのがつらかったからではない。そもそも最初からこの手紙には苦痛しかなかったのだから、そんなのは今さらである。

屋敷を見回る時間なのだ。鍵を管理するハウスキーパーにとって、大切な仕事の一つである。

手紙はまだ読み終わっていないが、私事で仕事をおろそかにするわけにはいかない。続きはまた明日に回すことにし、リリアは机の上に置いてあった灯りを持って立ち上がった。

一室一室、鍵を確認する。たまには部下であるメイド達の寝室を抜き打ちでチェックすることもあるが、今日は非常に疲れているのでやめておいた。

そうやって屋敷を点検していると、ある一室から明かりが漏れているのに気が付いた。

メデイチ侯爵の私室からだ。火の消し忘れだろうか、と覗き込んだのが運のつきだったのだろう。

「……リリアか」

ティアの祖父、メデイチ侯爵がそこにいた。

夜の部屋に二つの影があった。暖炉の火によって、その影はゆらりゆらりと揺れている。

一人はこの屋敷の主、メデイチ侯爵である。

もう一人は、リリアだ。主の晩酌に付き合うべくきちんと場所を整えた彼女は、侯爵の向かいに座っていた。本来ならば同席できるような立場ではないが、侯爵によって半ば無理やり着席させられていた。

こういうのは執事の仕事だと思うんだけどな。内心で愚痴りながらも、表情はにこやかな笑顔なのがリリアという女だ。

「ティアの王宮生活も終わったか……あの娘は、予想以上に優秀だったな。王宮にずっとしてもらいたかったほどだ」

「左様ですか」

適当に相槌を打ちながら、リリアは主の杯を満たす。

メデイチ侯爵は、机の上に置いてある燃料を一掴み分、暖炉に放り込む。可燃性に優れるそれらはあると灰になった。

本来ティアに任せられた情報収集など、王宮での噂を集めてくればもうけもの、程度のもだったのだ。

それが、送られてきたものは、スパイも真つ青な内容だったのだ。驚いたのなんの。機微に疎いくせに、任された物事を反射で必要以上にこなせてしまうティアの有能さは、危ういものがある。

「ところで新しく入ってきたメイドの様子はどうなのだ」

「彼女ですか」

メデイチ侯爵がわざわざエレンの尋ねてくるのにはわけがある。

非常に目立っているのだ。もちろん、悪い意味でだが。

「一応、身元を確かめました。が虚偽はありませんでした。もともと両親は外国にいたらしいのですが、祖父の代で事業が破たんしたそうです。再起を図るためにこの国に来て、貿易会社を設立。そこそこ成功したところで、詐欺にあつた、と」

しかもこの詐欺が巧妙で、契約書の裏をかき、法律にひっかからないように行われていたらしい。犯人は雲隠れしているが、見つげ出したとしても訴えるのは難しいだろう。詐欺にかかったのをエレンの両親の落ち度、というのは厳しい意見だ。相手が悪かった、としか言えない出来事だ。

「仕事面に関しましては……まあ、使えない娘です。しかし、あそこまで邪気のないものも貴重です」

リリアがエレンの価値を認めるのは、その一点のみだ。

残念ながら、住込みのメイドの窃盗などは珍しくない。また、小遣い稼ぎの感覚で屋敷の情報をもよおす不届き者もいる。それを抑えるのもリリアの仕事になるが、やはり一番効果的なのはそもそもそういうことをしない人間を雇うことだ。

もっとも、予想以上に器物破損の被害が重なっている。いまはやや後悔している。折よくティアが戻ってこなかったら、解雇も検討しなければならなかっただろう。

「何の仕事も任せられないような娘ですが、お嬢様の有能さと足し合わせればちょうどいいでしょう。お嬢様はなんだかんだで世話見がよろしいので、相性はいいかと思われませう」

上手くいけば、きっと主従という関係以上に仲良くなれる。そう

いう期待を込めての人事だ。エレンの出す被害もティアが押さえこんでくれるだろうし、一石二鳥である。

「そうか」

「はい」

沈黙が下りる。

ぱちぱち、と暖炉の中でまきがはぜる音がする。メデイチ侯爵がまた一掴み、暖炉の中に燃料を放り込む。暖炉に放り込んでしまうには少々上等なそれらは、もともとくべられているまきなどより遥かに早く灰になる。

「ところでリリアよ」

「はい」

ぴん、と空気が緊迫したのに気が付いたが、あえて知らぬふりをする。空いたグラスに酌をしながら相槌を打った。

「ティアが、結婚をしたいといってきたのだ」

「はい。お嬢様もそういう御歳でしょう」

言われなくとも、リリアはティアから全部聞いている。リリアからすれば、へそで茶を沸かせるようなちゃんちゃらおかしな話だが、そんなことはおくびにも出さずに答えた。

「そうか……しかし、わしは、どうすればよいのだろうか」

あつという間に飲み干された器をまた満たす。このお酒、けつこ
う度が強いけど大丈夫かな。そんなことを思いつつも、従順なメイドであるリリアはそれに対して意見することもない。

「お館様がなさりたいようにするのが一番です」

「リリアよ。おぬしはわしにとってみれば娘のようなものだ」

「……」

一瞬だけぴたりとリリアの動作が止まってしまったのは、できれば思い出したいくない人物が想起されたからだ。

「恐縮です」

どうも酔いが回ってきたらしい。過分に与えられた言葉にそう判断しながらも、淡々と酒を注ぎ足す。顔は笑顔を保っているものの、答えるリリアの言葉がやや苦々しくなってしまうたのに、侯爵は気が付かなかった。

「そのおぬしにとってみれば、ティアは妹のようなものだろう」

「そうでございますね」

メイド生活によって鍛えられたリリアの二枚舌は「いや別に」という内心とは裏腹の言葉を紡ぐ。率直が旨のリリアだが、わきまえるときはわきまえるのだ。

「おぬしの義姉のアンジェラも、それは出来がよかった」

「………そうでございますね」

酒によってだんだん饒舌になっていく侯爵に対し、リリアが平坦な口調になってしまったのに、他意はない。確かにはたから見ている分では、リリアの目から見てもアンジェラは素晴らしく魅力的な女性ではあるのだ。その客観的な事実是否定できないし、主観的な感情を晒すつもりもなかった。

「あの娘が家出同然で結婚していったときには、それは胸が引き裂かれるような思いだった。ひとつ、よかったことをあげれば、リリアよ。お前のような孫が新たにできたことだ」
「……………そうでございますね」

あの時は、それはもう上へ下への大騒ぎだった。リリアは遠い目になって当時の苦勞を思い出す。

まだ働いていなかった自分をおいて、実家はどたばどたばた大混乱。自分たちよりはるかに身分の高い娘さんを、相手先の許可を貰わずに連れてきた兄を前にして、顔を真っ青にした両親の様子は、いまだありありと思い出せる。父親など、これでウィング男爵家も終わりだ、と嘆いていたほどだ。

それからなんだかんであって、リリアは実家から離れてこの屋敷に奉公に来た。過程はともかく、理由は簡単。
アンジェラのいる実家にいたら、きつと精神が崩壊すると思ったからだ。

「わしは、かわいい孫娘を嫁になどやりたくないのだ……！」
「そうでございますかー」

苦渋に満ちた表情で、侯爵はさきほどから暖炉に放り込まれている机の上の燃料　ティアへの縁談の申し込みの手紙　を全て暖炉にくべてしまう。

あっさりと燃え尽きていくティアへの愛の告白の数々を見ながら、リリアは完全なる棒読みで返答。もしかしたらこの人、自分が結婚するときにもなんか邪魔してくるかも。そんな恐ろしい思考がリリアの頭にちらりとかすめた。

「ティアのひやつも、ずっと王宮で働りゃいておれば、結婚にやど

せずとも……！」
「そうでございますねー」

メデイチ侯爵は、泥酔してとうとう呂律も怪しくなってきた。ちなみに本人には自覚がないが、ティアは非常によくモテる。妾腹であり、異大陸の血が混じっているという障害があつてなお、だむしろそこがいいというアホな意見も聞いたことがある。あの大陸特有の艶やかな黒髪は非常に目につきやすいし、目をそらさないティアの黒目は、相手にはっきりと印象を残す。小柄でほっそりした体躯は、華奢で可憐。すっきりしつつも整っている顔立ちには、他にないオリエンタルな魅力がある。

ティアが王宮に行き人目に触れるようになってから、まあ縁談の申し込みが増えるわ増えるわ。いつの間にもやら暖炉の燃料になるだけの量がどっさりたまってしまった。さすがに容姿だけではここまです釣れないだろう。王宮でどんなメイド生活していたのか、多少は興味がある。

(あとでしつかり聞きだしませんと)

そして、自室で腹を抱えて笑うのだ。そんなことを考えながら、リリアはその夜、主が酔いつぶれるまでししおどしのように機械的な動きでグラスに酒を注ぎ続けた。

小話 真・侯爵という責任ある立場にいる祖父について（後書き）

かわいいおじい様は好きですか？

いや、いいんですよ。答えなくていいんですよ。回答を思い浮かべる必要もないんですよ。だって、まあ、わかってるんです。需要がないことぐらい、わかっているんです。しかも、うまくツンデレに書けなかったことぐらい、承知しているんですけど……！

小説の奥深さに敗北感を思いつつも、きつといつかリベンジすることを誓って。 2011・11/25

第五話 自由という誰もが憧れる夢について

どの国でもそういうものなのだが、税金の収支を計算すると、必ず0・1〜5%ほどの財源が行方不明になっているのがわかる。わかりやすく式に表すと、本来ならば税収＝年度支出分＋余剰分、とならなければいけないのだが、なぜだがこの等式が成り立つことはどの国家のどの年度でも決してありえない。

ティアがいま読んでいる新聞などにも堂々と公開されている情報なのだが、意外なぐらい騒ぎ立てられることのない事実である。

「ワイロかな」

もしくは、横領か。朝食を食べ終わったティアが新聞を読みながら税金の行方不明分の行先を予想すると、後ろに控えていたりリアはにこりと笑い

「私の意見としては、女性のドレススカートはおかねがいつぱいの膨らみかと」

と彼女一流の言い回しで答える。

ティアはなるほど、と納得してしまう。歴史の影に女あり。実際、不明分は結構な割合で女性に貢がれているはずだ。高級娼婦だったり、サロンに佇む上流貴族の婦女だったり、その行先は様々だ。

「細かく計算したら、どの税金がなくなってるかわかるかな」

「暇むだつぶしにしかありませんよ？」

「うん。言ってみただけ」

ティアとて別に財源の裏を探る気もない。国庫の数パーセントをやすやすと収めてしまう女性の服の神秘に感心しつつも、ティアは

新聞をめくった。

どうでもいいゴシップ記事に埋もれるようにして、興味のひかれるニュースが二つ三つ。斜めに目を走らせて、ふとその中の一つに目を吸い寄せられる。

南土内にある、少し離れた国で、国王を中心にして改革が推し進められているというものだ。

「何か気になるニュースがありませんか？」

「うん。これ」

動きを止めたティアにリリアが問いかける。ティアは、リリアにわかりやすいように紙面を指さして見せた。

「改革、ですか」

「うん。これからが気になる」

これは前々からティアも小耳にはさんでいたが、とうとう新聞に載るほど表面化してきたらしい。あの国ではしばらく愚王が続いていたが、今代の国王は賢王だと聞く。どんな風に国が変わっていくのか、余所事ながら少し楽しみだ。

「我が国に、何か影響はあるでしょうか」

「あの国は国王がきちんと弁えてるから、国外には大した影響はないと思う。ところでリリア。うちの屋敷も抜本的な人事の改革をすべきだと思うけど、どう？」

「いえ、その必要はありません」

どこを何とは明言しないが、何をどうにかしてほしいティアの提案をリリアはゆるぎない笑顔で棄却する。

「適材適所な人事を行っている」と自負しております」
「ふーん」

適材適所、という言葉にティアはおざなりに頷く。その言葉に納得できない要素がいまこの部屋に存在するからだ。

「適材適所という割には、なにかこの部屋に足りないと思わない？」
「はて」

問われたリアはぐるりと部屋を一瞥する。

この部屋にいるのはティアとリアの二人だけだ。調度品はいつも通りの配置で、怠ることなく掃除をしている証明か、ほこりなどをためることなく磨かれている。ティアの寝起きで乱れた寝台もベツドメイキングもすんで綺麗に整えてあり、朝食後のお茶の用意まで完璧だ。

リアはもともと把握しているだろう部屋の様子をわざとらしく確認し、しれっとした笑顔で首を傾げる。

「朝食おかわりですか？」

「違う」

「では紅茶ちほりおかわりですか？」

「なんでそんなにおかわりにこだわるの？」

そんな掛け合いをしていると、廊下からはたばたとあわてふためいた足音が聞こえてくる。

それを聞いて、ティアはため息。

「やっと来た」

「そうですね」

同意するリリアの表情をちらりうかがったが、その笑顔は残念ながら変化なかった。

間をおかず、ばんっ、とメイドの所作にあるまじき勢いで扉が開かれる。扉を開けたのは、本来リリアの代わりにティアの傍に居べきレディースメイド、エレンだ。

「申し訳ありませんっ、寝坊しましたあ！」

どうしようもない理由でせえはあと息を切らせながら、それでも頭を下げる。その勢いで頭にかぶせていたナプキンキャップが吹っ飛び、ティアを強襲。狙ってやってもうまくいかないドジだが、むざむざ食らうこともない。ティアは真つ白な帽子を空中で指にひっかけて掬い取り、ドジなメイドの顔面にぶつけて返した。

「あうっ」

「おバカ。三十秒あげるから、身なりを整えて」

「は、はいっ」

飛んでいったナプキンキャップはもとより、廊下を全速力で走ったせいか、エプロンドレスもしわくちやで見苦しい。

「では、私はこれでしつれいします」

適材に適所が現れたので、その代役をこなしていたリリアは一礼して部屋から下がる。

命じられたエレンは、あわてて栗毛の髪をナプキンキャップに収め、ぱたぱたとドレスの裾を整えていた。

そつだ、カフェに行こう。

ティアがそう思い立ったのは、エレンに『乗せているものを落とさないトレイの持ち方』を教えていた時だった。

エレンがお茶をひっくり返しそうになり、ティアがそれを阻止する。それを繰り返すこと三度ほど。世の中習うより慣れるという言葉があるが、エレンはちっとも慣れる様子がない。トレイを持てば乗せているものはなぜか十六ビートの震えを刻み、お茶を汲ませれば、味や香りがどうこう以前にこぼしそうになる。

こんなメイドに尽くされていても、心臓がハラハラするだけである。これは最初から教え込んだほうが早いかもと見切りをつけ、エレンに基礎をみっちりたたきこんでいたのだ。

一から十までティアの知っている限りのメイド知識を叩き込みながらも、そういえば、王宮にいたころもこんな感じに後輩に教えていたな、と思う。内容はここまで低レベルではなかったし、覚えがこんなにも悪い生徒は一人としていなかったが。

そんな風に昔を懐かしみ、エレンがようやくいれるのに成功した紅茶をすすった時に、ティアはふと思つたのだ。

（味も香りも飛んでる。高いお茶の葉が台無しだ。トレイをしっかり持てるようになったら、ちゃんと温度とタイミングをつかめるように教えな……………な

んでわたし、こんなことしてるの？）

と。

ここはメデイチ侯爵の屋敷であり、ティアはその令嬢だ。子女なのだ。けっこう偉いのだ。尽くされる立場であるのだ。断じて尽くす側でなければ、教育する立場でもないのだ。

だというのに、いまやっていることはメイドとさして変わりがない。

それは、いまの行動を王宮でのメイド生活と重ねてしまったことから考えても間違いない。

そもそもがおかしいのだ。リリアに会えば遠まわしにからかい倒され、エレンが傍にいれば彼女のドジに心休まる時がない上に教育を施している。ティアがリリアに言い負かされてエレンを指導しているこの状況は、控えめに言ってもわけがわからない。

これはおかしい。

というか、ティアだってたまには心安らかに尽くされたい。

「という訳で、外に行ってくる」

エレンの助けを借りずに手早く着替えたティアは簡潔に告げる。身に着けているのは裾の閉じた白いブラウスに、腰に細いベルトをまいて黒いスカートをはいている。首には、飾りに灰色のケープが巻いてある。

それぞれそこそ高級なものだが、貴族の令嬢の服装としてはやや素っ気なさすぎる。もともと王宮にいた時に外出用として使っていたティアお気に入りの一着だ。

「え、えっ？」

一方エレンは主人のいきなりの行動についていけない。彼女が目を離れた数十秒で、主人が外出の支度を整えていたのである。とはいえ、もとから置いていくつもりだったので、ティアは混乱するエレンをスルーして廊下に出る。

が

「にがしませたのみどうなさいましたか、お嬢様」

「……………」

何故か、笑顔のリリアがそこにいた。

「……暇なの？」

「まさか」

返された言葉に、ティアは恥じ入った。いまのは確かのリリアの言う通り、愚問だった。もしやずっとこの部屋の前に張り付いたのでは、と邪推していたが、そんなわけではない。リリアはこの屋敷で最も忙し人間の一人なのだ。おそらくはティアの行動を読んで、ベストタイミングでここに来たのだろう。

それはそれでアホみたいだとは思うが、なにせよりリリアにティアの外出を止める権利はない。このまま強行突破してしまうのが最善手と判断した。

「じゃあ、わたしは外に行ってくる」

「左様ですか。馬車はご利用ですか？」

なにが『じゃあ』で何故外出するのか。ティアの行動を予測して先回りできるほどに優秀なメイドであるリリアは、そんなことはいちいち聞かずに返答する。れっきとした上流階級の家であるこの屋敷には、専用の馬車が存在する。

その質問に、やはり、とティアは思考する。別に、ティアが外出すること自体はどうでもいいらしい。リリアが問題としているのは、いままさにティアが逃れようとしているものなのだ。

「いらぬ。歩いていく」

「左様ですか。では付き人はご利用ですね？」

「もつといらぬ。一人で歩いていく」

押し売りをきっぱり断ってリリアの脇を抜けようとする。

だが一步踏み出したところで、につこり笑ってその進路をふさぐ性悪メイドが一人。ティアは強制的に二の足を踏まされる。

「……」

エレンのドジはかわせるし、なんとか矯正も可能なようだが、リアの性根はそうたやすいものではないらしい。ねじまがったその心根は、なかなか人の手に負えるものではないということを変更して実感する。

ティアは面を上げて、障害物をぎつとにらみつけた。主人からこんな凶悪な視線を頂けば、恐れおののくのが普通の神経をしている使用人というものだが、もちろん普通の神経でないリアがひるむはずもない。ティアの威圧など、どこぞ吹く風。何でしょうかとばかりに、にこりと笑って首を傾げた。

「ばちり、と両者の間に火花が散った。」

「エレン」

「部屋の中にいて」

「はいっ……え？」

上司と呼ばれ、しかし主人に押しとどめられたエレンはどうすればいいのかわからない。二人の圧力に挟まれてかわいそうなおろおろとろたえるが、そもその原因は彼女のドジなので、これぐらいは当然の報いだらう。

体の半分だけ中途半端に廊下に出してしまったエレンはどっちに味方をすべきか判断できず、しかも両側からの圧力にはさまれているため右往左往することもできない。

そこに偶然、廊下を掃除中のメイドが通りかかった。

「……っ。……っ！」

エレンはその同僚に視線で助けを求める。悲壮感漂う仕草には、思わず助けたくなってしまいたくなるような小動物的な魅力があった。

しかし救援を求められた彼女は、リリアとティアを目撃した途端に、ぼん、と手を打つ。どうやら何か急用を思い出したらしい。くるりと踵を返して「お掃除しなくっちゃ！」少々わざとらしく自分に発破w pかけ、今しがた掃除をしてきた廊下に戻っていった。

「~~~~~」

裏切り者ーっ、と涙目になるが、ティアとリリア、その二人の間に板挟みにされたエレンをどうにか助けることができる者のは、残念ながらこの屋敷ではメデイチ侯爵その人ぐらいなものだ。

そして当然、侯爵が通りかかるなんて偶然が起こるはずもなかった。

第五話 自由という誰もが憧れる夢について（後書き）

拙作にお付き合いいただいている方、本当にありがとうございます。

しかし、全然話が進みませんね。でも安心してくださいつ。そういう仕様なんです！ 作者が！

……というのは冗談（を装った本気）で、あと二、三話したらちよびつと話が進む予定です。話が進んでもティアの婚活が進むとは限りませんけどねうふふ。

第六話 甘味という口の中でとろける至高の品々について

やはりというべきか結局というべきか、なんだかんだで負けたティアは、エレンを連れていくことになった。

石畳で整備されたこの都市の道はきれいなものだ。少し昔に異常に潔癖症な王族があり、国中の都市部で大量の清掃員を雇って国中を掃除したのが原因である。当時は予算の無駄遣いと揶揄されたらしいが、町はきれいになるし、清掃のために多数の労働者を雇うことはそのまま低所得者の救済につながった。王族の変態性が良い方向へつながった一例であり、いまでも国策として清掃員を雇い街道を掃除するのは続けられている。とはいえ、全区域にという訳にはいかず、この都市では異人街や貧民区にはほとんど手は付けられない。

そんな道をティとエレンのふたりは並んで歩いていった。ティアの足取りが心なしかとぼとぼしているのは、エレンというお荷物がかくつついたおかげで、外出を決意したときよりやや気落ちしているからだ。

エレンはメイド服からエプロンをはずしたシンプルな黒いドレスという格好で、頭には白いキャップの代わりに外出用のポーラーハットをかぶっている。地味な格好だが、メイドは主よりも目立ってはならないという不文律が存在するので、おしゃれは楽しめないのだ。

ちなみにティアも先ほどの服に加え、結い上げられた黒髪に月下美人の花を模した飾り付きの綺麗な帽子をかぶらされている。その上、白無垢の長手袋をはめた手で、金糸の刺繍でふちどられた真っ黒な日傘を差していた。先ほどに比べ、貴族令嬢らしさが増している。

そんな令嬢ティアは、心の中でちょっぴりむくれていた。

(リリアめ)

ティアはもつと気楽な格好で出歩きたかったのだが、リリアとの論争に敗れた後「外は陽が照ほつしやうがいっていますかがつていけ。なのでご用心あとを」と、忠告を装った強制をされたのだ。

しかし置いていくつもりだったエレンを連れて行く羽目になったのを考えれば、それも仕方がない。あまり質素な格好が過ぎると、かえって同行するエレンが困るだ。しぶしぶティアも妥協した。

ティアが自分で日傘を持つているのは、エレンに持たせると確実に壊すか飛ばされるかするだろうと予測しているからだ。同じような理由で、たまに辻馬車が通る道ではティアが中央側を歩いている。普通は従者が主をかばう位置にいるべきなのだが、馬車の近くにエレンを歩かせると轢かれる気がしてならないので、できるだけ危険度の低い位置に配置しているのだ。道行く人に、ちよつとだけ奇異の視線を向けられるのはそういう理由だろう。

(とはいえ、エレンはなんかどうしようもないぐらい不器用だからな……)

ティアは日傘をくるくると回しながらそんなことを思う。エレンは少し目を離せば何かやらかすため、ものすごく気を使ってしまうのだ。いまのティアの心境は、駆け回る子供の世話をする母親によく似ている。この子は自分が守らなきゃな、という、主従が逆転した気持ちだ。

主人からそんな心配をされているとはつゆとも思っていないエレンとはいえば、やる気いっぱいの様子でずんずん道を進んでいる。ティアにとってみればこの外出はただの息抜きでしかないが、彼女にとってみれば立派な仕事だ。

エレンは結果を出せてはいないものの、仕事に対しての熱意は人

並み以上なのだ。仕事に意義を見出して頑張ろうと意気込んでいるのはわかるし、ティアの目にはその積極性が好ましく映る。

だが、それはそれとして、ティアはとある根本的なことに疑念を抱いていた。

「エレン」

「はい！」

半歩だけ先導する彼女に声をかけると、エレンは元気よく振り向いた。後ろでひとつにまとめてある栗毛が、それに合わせてぽんと跳ねる。

馬の尻尾にも似たそれをなんとなく目で追いながら、ティアは問いかける。

「どこへ、向かってるの？」

「……………あ……………」

エレンは、ぴしりと音を立てて固まった。止まるには不自由だろう、半身になった不自然な体勢で停止した。

「エレン？」

名前を呼びつつ、ティアは彫刻と化したエレンの肩にぼん、と手を置く。むろん、労をねぎらうための動作ではない。

そのまま、表情を変えずにずっと迫った。

「いま『あ』って言った？ 何？ もしかして、何も考えていなかったの？ あなたはそんなにおバカなの？」

「ち、違うんです。え、えっとですねっ」

問いただしてみれば、石化はあっという間に解けた。あたふたと言い訳をするエレンの視線が、目を合わせて逸らさないティアの黒い瞳から逃れるように、ついつと明後日の方向に飛ばされる。

「『えつと?』」

エレンの言葉をおうむ返しにして問い詰めた。そちらに目的地があるのだろうか。エレンの視線をたどってみるが、どうしたことだろうか。なんとも不思議なことに、ティアの目には青く広い彼方へ続く大空しか映らない。

「そのう」

「『その?』」

「ま」

「『ま?』」

「ま、前へ向かっています……?」

「こっちへ行こう」

ティアは諦めの悪い天然ドジ娘の腕を、むんずとつかんで方向転換した。

「このおバカ」

「うう」

「やたら自信ありげに歩くから、なにかお勧めの場所でも紹介してくれるかと思ってたのに」

「あうう、すみません」

ティアの軽い叱責と嫌味を受けたエレンは、肩をすぼめて縮こまる。

とはいえ、ティアにも非があった。

エレンは元箱入りだ。町の様子なんて知っているわけがない。案内どころか、エレンを一人で歩かせれば、迷子になるに違いないよなレベルだ。

そんな少し考えればわかることを失念していた。

ちよつと緩みすぎていたかもしれない。メイドをやっていた頃はこんなことはなかったのだけれど、とティアは反省する。

「確かあつちに新しくお店ができてたから、そつち行こう。三年前にはなかった」

「な、なんでそんなことご存じなんですか」

「昔は姉さま達と一緒によく出歩いてた。それにいまの町の様子はよく知らないけど、いま言ったカフェは帰ってくる時に馬車からちらつと見えたでしょ？」

「ええつ、そんなのわかりませんよ！」

エレンがびつくりして声を上げるが、そんなに驚くことでもない。走る馬車から外を確認して場所を把握するなど、慣れれば誰でもできる。馬車の中というものは、意外によく見えるものなのだ。

「エレン。街の把握は、きちんとしなさい。買い物もできないでしょう？ 仕事でお使いを頼まれるかもしれない」

「うう……はい。かしこまりましたあ」

「わかればよし。ケーキおごつてあげる」

「ほんとですかっ？」

とたん、縮こまっていたはずのエレンの目がきらきらつと輝く。いつそ面白いぐらいの釣らようである。お菓子をあげれば知らないおじさんにもついて行ってしまいたいそうだ。エレンの無垢で現金な様子に、ティアはちよつと苦笑した。

アフタヌーンティーが習慣づけられ、毎日趣向の凝らされたお茶

菓子が出される貴族とは違い、庶民にとってケーキなどのお菓子は贅沢品だ。贅沢品といっても、あまりに高価なものでなければ、庶民でも少し無理をすれば買える。しかし、そんなことにお金をかけるぐらいならば別の生活必需品をそろえるのを優先するだろう。

商売がうまくいっていたころならばともかく、特に困窮しているだろうエレンにとってみれば、嗜好品から久しく離れていたはずだ。久しぶりに甘味が味わえるとなれば、それは喜ぶ。

「うん。子女付きのレディースメイドの特権」

「わたし、ティア様に仕えられて幸せです！」

自分とは正反対に、感情表現が大げさな子だ。両手を組んで目を潤ませるエレンに、ティアはもう一度苦笑をもらす。

ただし。

子犬みたいに喜ぶエレンを見て、ティアの胸の中にいたずら心がひよっこり芽生える。

タダより高いものはないというし、ちょっとだけ意地悪をしよう。

「いい、エレン。あれがプロの給仕というもの」

「は、はい」

こじやれた内装のカフェの中では、給仕の女性が動き回っていた。トレイに乗っている紅茶に波ひとつ立てない技術。テーブルに食器を上げ下げするとき、一切の音を立てさせないその手腕。机に置いてある鈴を鳴らされればすぐにそちらに向かう機敏さ。どれをとってもエレンにはない要素だ。

「しつかり見本にして、自分に何が足りないか考えて」
「はい」

せつかくの機会である。エレンにはどうせなら接客のやり方を見て習えと、とある制限付きの命令を出しておいたのだ。

カフェの接客係の服の形はメイドと変わらない給仕服だ。ふつうのメイドと違い、エプロンの下のドレスが薄桃色なのはお客の目を楽しませるためだろう。うちのメイド服もこの色合いなら楽しいのに、と一瞬だけ思ったが、接客だけでなく掃除洗濯炊事を行う彼女たちに向いている色ではないので、その案はすぐに棄却する。

店の中に配置された丸テーブルを前にする客の多くは、中流階級の人間のようなのだ。まあ、上流階級では屋敷を構えてその中で料理人を雇いメイドを働かせているため、家にいれば多くの人間が自分にかしづく。そんなところに住んでいる人間が、わざわざこの店のように不特定多数の来客者に少数の人間がサービスを提供するような場所に来る必要はないのだ。ティアのように、メイドから解放されたいからという来客理由は、間違いなく少数派である。

(でもいい。久しぶりに平和だし)

自分のマイノリティさを自覚しつつも、ティアはのんびり紅茶をすすする。

ティアの前には先ほど注文した紅茶とティラミスが置いてある。ティラミスは、ビスケットに乗った一口サイズのものがみつつ並んでいる。てっぺんにミントの葉が飾られて三段に重なり調和したその色合いは、食べる前に目も楽しませてくれる。

しかし、と、ティアはそれを前にして少し残念な気持ちを抱く。

ティラミスはともかく、いま飲んだこの紅茶がちょっと問題だ。

エレンのものとは比べるのも失礼なほどおいしいのだが、リリアの

いれるものと比べれば少し劣る。

(ううん、やっぱり紅茶はリリアのがいちば……ちょっと待て)

そこまで考え、はたと気が付く。

リリアの紅茶が懐かしくなっている。それに、ティアは慄然とした。

(そんな。これは、末期だ……！)

リリアを懐かしむなど、どうかしている。

すっかりしろ、ティアは自分に言い聞かせる。と王宮に勤めていときだつてそんなことを思ったことがなかったのに、いつの間に餌付けをされてしまったのか。

ティアが懊悩していると、エレンが声をかけてきた。

「あの、ティア様」

「なに？」

おそろおそろ呼びかけてきたエレンに疑問符を返しつつ、ティアは気を取り直してティラミスをひとつ口に放り込む。

(うん。おいしい)

ビスケットのサクサクとした歯ごたえ。それと絶妙なハーモニーを奏でるクリーミーなマスカルポーネチーズ。口の中でとろけるその味を惜しみなく称賛する。なにより、屋敷でお茶をしていたら身に降りかかってくるドジも毒舌もないのがいい。そう。味よりもの大切なもの、それが環境なのだ。さっきのは、ただの気の迷いだ。どうかしていたのだ。自由、万歳。改めてそう確信する。

「そのう、ケーキ、食べちゃダメですか？」

お預けを食らった子犬のように上目づかいで許可を求めるエレンの前には、手つかずのショートケーキがあった。

これまた見るからにおいしそうなケーキである。上品なシャンテリークリームが、ふんわりしたスポンジを白無垢に飾り立てている。そこを彩るように、絶妙な配置で挟まれ、また何よりケーキてっぺんに乗せられた、堂々たる真っ赤ないちご達^{いちご}。

嗜好品の名にふさわしい、シンプルにしてケーキの道を極めた至高の一品だ。

それを食べるなどと、ティアはそんな残酷なことは言わない。もちろん、と頷いた。

「いい」

「ほんとですかっ？」

「うん」

ぱあぁと咲いたエレンの笑顔に、頷いたティアまで嬉しくなってしまう。エレンの笑顔には、そんな人を幸せにする何かがある。それはきつと、彼女が持つ最大の才能だ。

だからティアは、心の底からのわきあがった笑みを珍しくそのまま顔に表した。

「さっき言った通り、この店の給仕の動きを完璧にマスターしたら、ね？」

「……………はい」

稀なるティアの笑顔の華を向けられて、メイドのエレンが半泣きになって絶望したのは、言うまでもなく余談である。

第六話 甘味という口の中でとろける至高の品々について（後書き）

今回、魔法について書こう、と書いていました。この世界観において、魔法がどんな立ち位置にあるのか、どんな意味合いを持つのか、いまのままではあまりにも宙ぶらりんすぎる。このままではいけない。こんな未熟な作品を読んでくださっている方々のためにもわかりやすく、きちんと明確にしよう。そう意気込んでいました。そして。

ドトールでミルククレープ食べながら書いてたら、こんな話になりました。

第七話 魔法というただそこにあるだけの存在について

ティアは、魔法というものを愛している。

魔法というものは、かつて人が神や精霊から受けとったものである。

かつて、大陸には神々が多くの精霊たちが住んでいたと伝えられている。

人と比べてはるかに強く賢かった彼らは、基本的に人が好きで、少し悪戯を好んだ。自分達よりはるかに短命で脆弱な人間たちの開拓を鷹揚に見守り、時にちよっかいをかけ、時に個人に自分たちの力を分けながらもうまく共存していたという。

そして、その神々や精霊から分け与えられた力のかけら、恩恵や祝福こそが魔法。

例えばメデイチ侯爵家ならば、ほんのちよつと雷を生み出せる能力。ウイング男爵家ならば、風をそよがせる力。与えられた力はどれもそんな些細なものだったが、それは偉大な神や精霊に愛された証明であり、誇りだった。

神や精霊に愛されたものは、当然何かしらの魅力があり能力があったため、自然とその地位を高めることとなる。そして親から子へと、血によって魔法が伝わるのが判明すると、血縁によって地位が決まるようになった。神から恩恵を与えられたものは王族になり、精霊から祝福を受けたものは貴族となる。これが、王権を中心とした貴族政社会の始まりである。

そして、三百年ほど前から、神々と精霊に関しての文献がぱったりと途切れることになる。

彼らがなぜいなくなったのかは定かではない。だが、これと時を同じくして、必然的に神や精霊の祝福によって魔法を得て貴族になれる人間がいなくなった。これにより、人々が重視するものは能力

から生まれへと偏重され、ますます上流階級は血統主義に偏ることになる。

魔法というのが役に立つのか、具体的に何かに貢献しているのかといえば、一部の例外を除けばそんな事実はない。武力に足りえない程度の火力しかなく、産業に役立つような利便性もない。魔法というのは貴族であるということを示すもの、いわゆる『血統の証明』でしかないのだ。

けれども、いや、だからこそ。

魔法がなかったら、ティアがメデイチ家に来ることはなかった。

だから、ティアは魔法というものを愛している。例え、それが何の役に立たないものだとしても、自分をメデイチ家の系譜へと導いてくれたそれが、彼女にとっては宝物のように愛おしいのだ。

ティアが自室で、エレンに紅茶のいれ方をどう教授しようかと悩んでいると、入室の許可を求めるノックがされた。

「開いてる」

「失礼いたします」

入ってきたのは、もちろんリリアだ。肩口で切りそろえられたさりりとした金髪を揺らし、ティアにとってみれば胡散臭いとしか表現しようのない笑顔でいる。ちょっと嬉しいのは、その手に茶器の一式を持っていることだろうか。

「外出お疲れ様です、お嬢様。何の問題も起こらなかったようで、
何よりですね」

「……………」

いまリリアの持つ茶器を見て、一瞬だけ彼女の来訪を喜んでしまった自分を刺し殺したい気持ちにかられた。

「大丈夫」

ティアは主人の安全よりも自分の楽しみを優先するメイドをじろりと睨みつける。

「よしんばなにかあっても、姉さまから教わったメディチ家護身術がある」

「ああ、あの護身術たじしんたけなまじゆですか」

「……………くらわしてあげようか？」

「遠慮します」

いつも通りのやり取りを交わしながら、リリアは紅茶をいれて座るティアの前に差し出す。

強制的にも人を落ち着かせる心地よい芳香に、ささくれ立ったティアの気分もなだめられていく。卑怯だ、と、ティアはリリアに気が付かれないように心の中でむくれた。

「いまエレンとすれ違いますが、随分と上達しましたね」

「ああ、うん」

エレンはといえば、先ほどまで何度も何度も紅茶を汲ませ、とうとうお湯がなくなつたので厨房に下げさせたのだ。その際エレンとすれ違つたのだろう。はたしてカフェでのイメトレはかなりの効果を上げたようで、トレイをひっくり返すことだけはなくなった。

「教えるコツはなんでしようか」
「やっぱり、アメと鞭の使い分け」

しかしリリアの指導を受けてなお、エレンはただ食器を運ぶだけでも満足にできなかったのだから恐るべしである。

だから、リリアが二か月かけてもできなかったことをやり遂げたティアは、ちょっと誇らしくなる。心の中で胸を張りながら、紅茶に口をつける。

やはり、おいしい。

「ところでお嬢様」

ティアが紅茶の味と香りを堪能していると、リリアが手紙を差し出した。

「これは？」

「お館様からお預かりしたものです。この間のお嬢様がお望みになったものかと」

ティアが祖父にお願いしたものとえば、パーティーへの紹介状以外にない。

封がすでに開いているのにちょっと違和感を覚えたが、祖父が確認したのだろう。ティアは中身を取り出して、ちらりと目を通す。

日にちは十日後。場所は

「……王宮、か」
ホームシック
「懐かしいですか？」
「別に」

からかってくるリリアに、強がりでもなく否定する。

「わたしのホームは、ここ」

恥ずかしげもなくティアは言い切った。七つの時に迎えられ、十五で王宮に奉公へと出された。ティアの十八年の人生のうち、半分もない場所だが、ティアにとってはここが帰るべき場所なのだ。

「そう、ですか」
「うん」

なぜかちよつと言葉を詰まらせたリリアに頷き、紅茶を一口飲む。そういえば、エリザベスはどうしているだろうか。ティアはふとそう思ったが、わからない。手紙のやりとりすらもしていないのだ。ティアが王宮に行くまで、エリザベスは特定の傍仕えを置かなかった。

いまはどうしているのだろうか。新たにメイドが付いただろうか。それともティアがいた以前のように、メイドが日替わりでエリザベスの世話をするようになったのだろうか。

ホームシックではないが、ちよつとだけ自分の主人だった女王へ思いを馳せていると、リリアが言葉をかけてきた。

「お嬢様は」
「うん？」
「たまに、そうやって気恥ずかしい事をおっしゃいますよね」
「そう？」
「ええ、そうです」

そうかな、と自覚なしで首を傾げるティアに、リリアは迷いなく頷く。

指摘されたティアは、そんなメイドにちよつとだけ反抗心が湧い

た。

「リリアも」

「はい？」

「いまのは、珍しく二枚舌を使わなかったね」

リリアの場合、毒を吐くときは大抵言葉の裏に潜ませるのだが。そんな、なにか言ってやりたくて尋ねた、こじ付けに近い言い方がり。

それに、リリアはにっこり笑顔を向ける。

「ソウジそうですね」

「……」

いつも通りの答えを返され、ティアは沈黙する。

ちなみに、先ほどのリリアの言動をティアは疑問に思ったが、別に不思議なことではない。行間に本音を入れなかったのは、むしろ当然のことだ。

だって、照れ隠しの言葉に率直な本音を挟めるはずがない。

メイドの珍しい態度にの理由に気が付かなかったティアは、無意識に窓へ視線を向けて、そういえばこの方向は、とちよつとした発見をする。

この窓のずっとずっと先。

そこに、ティアが三年過ごした王宮がある。

同日同時刻の王宮の、女王の自室。

そこでは、部屋の主たる女王エリザベスと、書類に埋もれるようにして執務に励んでいるメイド服姿の人物がいた。

なぜメイド服の人物が女王の自室にいるか。それは、そのメイドの格好をしているのが女王の給仕をしているからだ。

ではなぜそのメイド服の人物が女王の自室で書類仕事をしているか。それは、この人物がそもそもメイドではないからだ。

「もうやだ、やってもやっても終わらないよ……」

「エル。ファイト」

「うわぁ……むかつくよう」

一枚やつてもまたその下に一枚。果てしなく終わりが見えないのだ。完全に他人事のエリザベスの応援に、メイド服の人物は涙目で毒を吐いた。

畏れ多くもこの国最高権力者、エリザベス女王に口答えをしたメイド服の人物は、妖精のようという形容詞がぴったりの愛くるしい容貌をしていた。大きく澄んだ碧眼が印象的な小柄で可憐な顔立ち。綿菓子のようにふわふわと膨らんだ、輝く金髪の持ち主。

「あらあら、ちよつと生意気ですわね。反抗期ですの？」

「うるさいよう、お姉ちゃん」

お姉ちゃん、という言葉が指し示す通り、この人物こそ王家の第三子、エルレイン・フィリカである。

エルレインはこの間の王家追放劇で、なにもやらずまた何の被害も受けていない唯一の人物だ。

エルレインも、とある変態であるが、別に害のある変態ではないため世間や社交界から許容されているし、王家継承権では姉より下、

何より最初から姉と兄には逆らう気がなかったもので、先日の王家追放劇からは逃れた形になっている。

だが、その代わりに書類仕事に捕まることとなった。

「なんで、なんでボクがこんな仕事を……」

「仕方ありませんわ。エル以外、適任がいませんでしたの」

その嘆きに、エルレインをこの仕事に任命した張本人がこともなく答える。

この国では、軍の頂点は軍神マルスの子孫である王族でなければならぬという暗黙の了解がある。別に女王が兼任してもいいのだが、仕事をしたくないエリザベスがエルレインに押し付けたのだ。

おかげで、エルレインは軍のトップたる大元帥に据え置かれたのだ。ちなみに、統帥権はあくまで女王たるエリザベスが保有している。権力より仕事のほうが多い、ありがたくない職である。もしかして、姉はこのためだけに自分を残したんじゃないかなろうかとエルレインは勘ぐっている。

しかもティアというそば付きのメイドがいなくなったエリザベスは「ちょうどいいから」という理由でメイド姿の大元帥が完成した。ちなみに世間では、エルレインが自ら姉に志願してメイドもどきをやっていることになっている。

「納得いかないよ……!!」

事実と食い違う噂に拳をふるわせ訴えるが、姉はスルー。悔しいそんなエルレインの様子をおかずに、大変愉快そうにして笑っている。

とはいえ、かわいいものが大好きなエルレイン、メイド服を着ていること自体はまんざらでもない。屈辱に思うどころか、メイド服を着せられた直後には「わあい、エプロンドレスだ!」と花を飛ば

しながらも浮かれていた。

これで、姉の給仕でなかったら完璧なのに。そう思わずにはいられない。

ちなみに家族限定にどSを発症させる変態な姉は、書類仕事に埋もれて死にそうになっているエルレインを、にこにこ楽しそうに眺めている。バカみたい書類仕事が多い軍のトップに比べ、司法、立法、行政にかかわることのない女王の公務はほとんどないといつてもいい。

「頑張ってくださいませ、エル。あ、紅茶のお代わりを頼みますわ」
「そんなヒマないようっ！」

半泣きで叫び返すも、紅茶を汲まなくてはどSの姉から何をされるかわからない。エルレインは泣く泣く書類仕事の手を止めて、紅茶の準備を始めた。

「お兄ちゃんとティアちゃんがいたころは、もっと平和だったのに……」

おっかなびつくり慣れない手つきで紅茶をいれながらもぶつぶつと文句を言う。

昔は軍の仕事は兄がやっていたし、エリザベスの世話はティアが行っていた。末子のエルレインはたまに姉からいじめられるくらいなもので、その他は小規模なお茶会などを開いて平和に暮らしていたのだ。地位なんていらぬ。分相応な位は人を不幸にする。エルレインはいま心の底からそんなことを思っていた。

「ねえ、エル」

そんなエルレインの胸中を知ってか知らずか、いや、間違いなく

察していながらその悲しみを楽しんでいるエリザベスは、注がれた紅茶を飲んで、にっこり笑う。

「これ、まずいですわ。汲みなおしてください？」

「うあああつ、もう！ 仕方ないじゃんつ。だって、紅茶のくみ方なんて、知らないもん！」

エリザベスの要求に言い返すエルレインは、悔しさのあまり我慢の限界を超えて地団太を踏んだ。

そりゃそうである。メイドの格好はしていても、エルレインは紛れもない王族。給仕なんて、見よう見まねでやっているだけなのだ。

「もう、エルは生意気ですわ……。はいはい我慢して差し上げますわ」

「我慢してるのは、ボクのほうだからね！ ていうか、ボクは忙しいんだからほかの家族で遊んでよ」

「でも、他はみんなはほとんど戻してしまいましたし……」

一時期は小動物化されていた王族だが、いまはほとんど人間に戻され、王家所有の離宮か実家の公爵家のほうに行っている。建前上は自主謹慎としているが、実際はエリザベスから逃げるための口上だ。

「お父様のバカあ、伯父様の意気地なし」

唯一逃げ遅れて王宮に取り残されたエルレインは、泣きながら薄情な家族をのしつた。

実はフィリカ王族の血縁者は、他の国の王族に比べてかなり少ない。神から恩恵を受けて王族となった他と比べ、神の直系たるフィリカ王家の扱う力は膨大だ。その血を継げば必ず強大な力を得るた

め、徹底した管理を行っているからだ。

何せ、一人が一軍に匹敵するといわれる王族である。国外にその血統を流出させるのは問題外なことから、王の結婚相手は必ず国内で見繕わなければならない。また王家の血が増えるということは、それだけで戦力の増強とみなされている。あまりに無秩序に子供を増やせば諸外国に無用な警戒心を抱かせてしまうため、直系の子供は三人が上限と決められている。

そして、これが極め付けなのだが、王族の血を分ける公爵家は二家のみと定められ、しかもその公爵家では結婚することも子供を作ることも認められていない。実質的にこの国の公爵家とは、王位に就けなかった王族を迎え入れるためにつくられた、権力もなにもない形式上な地位でしかないのだ。

そして、そんな環境であつても王家の血を継ぐ彼らは、国土が侵略された際には戦場へと赴く義務がある。

ちなみにエルレインも、大元帥になると同時に養子に入り、爵位を返上して自宅謹慎をした前公爵に代わりめでたく公爵位を継いでいる。

こうした恐ろしく非人道的な仕組みは、国民にはほとんど知られていない。貴族たちはもちろん知っているがその代わりに王族の変態的な要請に関しては全面的に受け入れているのだ。

ちなみに当の王族だが、この仕組みにそんなには不満を抱いていない。

彼らの場合、性欲が性癖を超えろという人間として不可解な原理を持つ。『裸の王様』こと前々王ならば服を脱げば満足し、『死んでレラ』ことレラニー前王ならば生足を堪能できればそれでいい。それ以上にと、次の行為に臨まなくともご満悦になれるのだ。

そして血縁をことごとく小動物にして遊んだエリザベスだが、実は決して家族からは恨まれてはいない。

なぜなら自分の性癖をなにより優先させるは、王家にとつてみれば当然なことだからだ。自分の性癖のために行動することは、あら

ゆるしがらみによって行動ががんじらめにされている王族にとって唯一自由に許されていることであるし、なによりこの王族の変態病には、由緒正しい理由が存在する。

なにをバカなということなけれ。その証拠に、軍神マルスに関してとある文献にはこう記されている。

『神とは何か。それは、私たち矮小な存在である人間にとってみれば、永遠の課題になるだろう。一つだけ言えることは、彼らはちっぽけな社会に、常識に生きる私達には理解が及ばない存在であるということだ。』

私は偶然、その一柱に出会うことができた。彼の偉大な名は、マルス。数々の大精霊、また同じ神々すらをも従えるその雄姿はまさしく軍神にふさわしい。彼は、神や精霊の中にあつてこそ特別なのだ！

しかし、である。その光景以上に、私の心に刻まれたことがある。英雄色好むというが、さすがは神という至高。彼の性への嗜好は、人間には到底及びのつかない。私はそれに恐ろしくなりながらも目を引き離せなかった。ああ、やはり神は人智の及ばぬ存在であつたのだ！』

この書記には具体的に軍神マルスがナニをドウしたかは記されていないが、この一節が示しているような軍神マルスの特性を受け継いだがために、王族は変態をこじらせてしまっている上に、その変態に正当性が付与されてしまっている。

だからエリザベスは、自分に流れる神の血に従い、そして行動したのだ。国民が諦めている以上に、彼らは自分達の性癖を許容している。いや、彼ら王家の人間は自分の変態性を愛しているといつてもいい。神の血をひく彼らにとって、それらに起因した行動を恨む

のは筋違いなのである。それがどんなに役に立たないものであろうと、世間から外れたものであると、その変態性は自分たちがマルスの系譜であることを何よりも確かに示してくれているのだ。だから、彼らにとっては、その変態性が宝物のように愛おしいのである。

「そういえばエルって、お兄様がシスコンだったことに気が付いてましたわよね？」

「うん」

何を隠そう、エリザベスの情報物品をとあるトカゲに流していたシスコンの腹心の部下とは、このエルレインである。

「お姉ちゃん情報を流す見返りに、他のこといろいろ協力してくれまし」

「そう。でも、ティアにはそのこと黙っていましたわよね」

前述したように、変態というのは王族にとってみれば忌避することではない。エリザベスだってその特性上他人にはバレいかなかっただけで、家族は了承していた。

だがエリオットの場合は、エルレインを除いたすべての人間に対してそれを隠していた。そして、エルレインもエリオットの変態性を黙っていたのだ。

「だってお兄ちゃんが『シスコンだってティアにはれたら、俺はきつと殺される』って、真剣な顔で頼むから」

「お兄様、ちゃんと危機感をお持ちでしたのね……」

その割には壮絶な自爆の末に暴露されたが。

「そういえばお兄ちゃん、最近見かけないけど何してるの？」

一週間前、エリザベスによって小さなガラス瓶に閉じ込められているのを見たのがエルレインの目撃したエリオットの最後である。その質問にエリザベスは、ああ、と頷く。

「お兄様なら、この間わたくしが呟いた『ドラゴンの剥製がほしいですわ』っていう冗談を真に受けて、王宮を飛び出していきましたわ」
「え」

ドラゴン。それは、恐怖の代名詞としても使用される生物の総称だ。小さいものでも一軒屋ほど、最大のものではこの王都と同じほどの体躯を誇る、デタラメな生き物。また貴族と王族以外で、唯一魔法が使える存在でもあり、その威力は人間が行使する魔法の比ではない。なぜか過酷な環境を好むため人が遭遇することは少ないが、かつてその群れは容易に一国を滅ぼしたこともある、人を超える大陸最強種である。

近代的な兵器や軍隊をそろえた今でこそ人類はドラゴンに対抗できるようになったが、それでも彼らはまがうことなき最強種。それに、兄は挑みに行ったのだという。

エルレインは、おそろおそろ尋ねるた。

「トカゲのまままで？」

エリザベスは笑顔で頷いた。

「ええ、トカゲのまままで」

大陸極北に連なる大山脈。一万メートルを超える絶峰にして、人類が踏破するにはあと百年はかかるいわれられている未踏の地。その厳しい自然が、何よりそこに住まう大陸最強の種族が人の立ち入りを許さない。

その山間にある、ただ白いその景色。ドオン、ドオオンと太鼓を打ち鳴らしているかのような音がした。

音の発信源を探してみると、一つの生物があった。

あまりの大きさに、一見してそれが生物と判断できるものはいないだろう。背中に生える二枚の羽を広げた全長がいくらになるか、想像するだけでも恐ろしい。ドラゴン。神々と精霊の退出したいま、大陸最強の生物といわれる恐怖の権化。

それが、唐突にひっくり返った。

巨躯が地面を打った衝撃で、またもドオオオン、と音が響く。遠目から見たら、ドラゴンが勝手に転んだようにしか見えなかっただろう。

だが、実際は違った。

「はっはっはー！」

その原因は、いま笑い声をあげているトカゲである。足元にいたトカゲが、その体軀からは想像もできないような力を発揮してドラゴンをひっくり返し、打ち据え、追いつめているのだ。

「妹のためだ、潔く死ねええ！」

この静かなる風景を台無しにしているトカゲは、変態的なことを叫びながら、ひっくり返ったドラゴンに追撃をかけようとして

横合いから放たれた炎が、トカゲを包み込んだ。

「!?」

突如現れた炎は、一面の銀世界をあっという間に飲みこむ。地面にあつた雪が一瞬にして蒸発。黒焦げた地面が現れたが、まだ終わらない。

ズズ、と地面が揺れた。

「ちよ、待て」

周囲の斜面にあつた雪が、今の熱で緩んだのだ。ただでさえ、さつきから山をも揺るがすような衝撃が繰り返されていたのだから、この現象は当然。

エリオットの精子の言葉など聞かず、雪崩が山間を埋め尽くした。巻き込まれてはかなわないと先ほどのドラゴンは慌てて翼をはばたかせて逃げていく。しかしトカゲが飛べるわけもなく、エリオットはなすすべもなく埋まっていった。

そうして雪が滑り落ちきり、地響きが収まったころ。のそりと、雪で埋まったそこに現れたのは、やはりドラゴン。同族を助けるかのように火を吹いたそれは、エリオットがひっくり返したドラゴンよりさらに二回り大きかった。

「ちっ、なんだ」

ぼこり、と雪が小さく盛り上がる。もちろん、エリオットである。高熱の火であぶられその直後雪に生き埋めにされたというのに、生きている。さすがに無傷とは言わないが、ちよっとうろこが痛んでいるぐらいである。

新手か、邪魔しやがって。雪に埋められたエリオットは恨み半分でそう思ったが、そのドラゴンは、それ以上のものだった。

「ナんだとハ、こツちノ台詞だガのう」

いま現れたばかりのドラゴンが、重低音を轟かせしゃべったのだ。

「……っ!？」

さすがのエリオットも硬直する。しゃべるドラゴンなどというものは、彼の知識にはなかったのだ。

「シカし、ペット共ガ騒ガシイカラ視に来てみれば、なんとまア」

だが、そんな常識など知らぬという風に、流暢ではないにしても、話す。くつくつと笑う。喉を鳴らして、愉快そうに笑う。

ドラゴンがしゃべるなど、ありえない。知能的にも生物的にも。事実、そこにはひどい違和感が、例えるならば人間がドラゴンの精神に乗り移って無理やりしゃべっているような違和感がそこにあった。

「トカゲがトカゲを狩ッテイルトは、また面白いものガ見学でキタ
ノウ」

「……お前は、もしかして」

先ほどまでの、勢いで戦っていた時とはまるで違う。この目の前の存在の正体を察したエリオットは、正真正銘の殺気を膨らませて問う。

「妾力？」

だが、その者は怯まない。ドラゴンをも屠れる強者を前にして、

彼女は己の覇を唱えることにいささかの畏れもなかった。

「妾八、帝王じゃ」

ドラゴンを駆逐するトカゲって、やだな。

まさかトカゲとドラゴンがしゃべっているなど、その予想の斜め上に行く珍風景が繰り広げられているとは知る由もないエルレインは、そんなさぞかしシユールな光景を想像して遠い目になった。

「お兄様の雄姿、ぜひ見てみたいですよわね……」

「ボクは絶対やだ。お姉ちゃんが見たいのは、お兄ちゃんが踏みつぶされる瞬間でしょ」

そんなことを言い合いながらも、エルレインたちにはもとよりエリオットが敗北するという思考はない。確かにドラゴンの巨軀はそれだけで脅威だし、行使する魔法は普通の人間が使う魔法を凌駕している。

だが、敗北がないからこそその王族。それが軍神にして大魔女の子孫、フィリカの名を代々受け継ぐ存在なのだ。トカゲにされたぐらいでドラゴンなどに敗北するようならば、フィリカの王族たる意義がない。

そんなことを考えていたエルレインはバサバサと散乱する音に引き戻された。

「あら、このパーティー」

「って、うわああああっ。お姉ちゃん何やってるの!?!」

ちよつと思考をそらしている隙に、エリザベスが書類の山を崩してぐつちやぐつちやにかき回していた。先ほど、というより、今現在も響いている紙の崩れる音は、これが原因だ。

その様子に、エルレインは青ざめた。

「お姉ちゃん、自分が何やってるかわかってるの！？ 今日中にこの書類を終わらせないと何人が困ると思ってるの！？ お姉ちゃんのほか、バカ、馬鹿あ！」

「む、なんですの」

エルレインの正当な抗議に、エリザベスはぶくつと頬を膨らませた。

「だって、この手紙だそうしたら、崩れてしまいましたの」

「うわああああん、絶対わざとだあ！ お姉さまのどS！ 変態！」

頬を膨らませつつも、エリザベスのその目は嬉々としている。エルレインはどSの姉を喜ばせるだけとわかっていても叫ばずにはいられない。

「エルレインったら、相変わらず生意気な子ですわね。で、これは？」

「うう、うちでやるパーティー。その書類、姉ちゃんのだよ」

うち、というのは王宮のことだ。

王宮内で行えられるパーティーへの出席は、女王の数少ない公務である。特にいまエリザベスが持っているそれは、国内外の重鎮が集う大切な夜会だ。

「ふうん、フォン子爵、メデイチ侯爵……あら、ティアのおじい様も招待してありますのね」
「そうなのー？」

多忙なエルレインが、姉の出るパーティーの出席者の把握などしているはずもない。シクシク泣きながらも散らばった書類を拾って返事をする。

そんなエルレインをしり目に、パーティーの出席者名簿に目を通していたエリザベスの動きが、ふと止まった。

「……ユージニアの全権大使」

その名前は、ぼそりと低温の声音でつぶやかれた。

「お姉ちゃん、どうかしたー？」

「わたくし、その日はきつと気分が悪くなりますわ」

エルレインの何気ない質問に、偉大なる女王様が笑顔でそんなことをのたまった。

「え」

エルレインは姉の仮病宣言に顔をひきつらせて硬直する。せつかく集めた書類が、ばさばさと落下していった。

なにせ、神の血をひく王族の健康優良児ぶりは、東西に有名である。いままでどんな流行病もはねのけてきた鉄壁の抗体の持ち主なのだ。それが、体調不良などといっても説得力など皆無である。

「だって、そこ、血統的に受け付けない人がいますの。適当にごまかしておいてくださいな、エル」

堂々と告白する姉に、エルレインは軽く絶望した。

「無理だよ、お姉ちゃん！」

「無理じゃありませんわ。軍神と大魔女の名を預かるわたくしたちに、不可能はないんですの」

「だって、いや、うん！ そうだっ。お姉ちゃんが自分で断つてよ！」

「エル。お姉ちゃんの頼みごとがきちんとできたら、ご褒美に一週間女体化魔法をかけてあげますわ」

「ボクにはうちり任せておいてよ、お姉ちゃん！」

青ざめていた一瞬前とは一転、エルレインはびつと親指を立てて了承する。

エルレイン・フィリカ。

フィリカ王国軍の頂点たる大元帥にして、はた迷惑な姉と兄を持つ王家の末子。この国屈指の地位に座り、社交界の花とほめそやされ、愛くるしい容貌と性格で周囲に受けいれられている寵児。

そして何より彼は 女体化魔法をかけてもらうためにと姉のメイドに甘んじるような、重度の女装癖を患っていることで有名な、変態であった。

第七話 魔法というただそこにあるだけの存在について（後書き）

目を通してくださった方、お気に入り登録をしてくださった方、評価を入れてくださった方、本当にありがとうございます。もしご指摘ご感想リクエスト等ございましたら、お気軽に、ぜひぜひお申し付けください。

今回は説明回でしたが、まさかの一万字超えです……。さすがに長いのでティアと王族で分けようかと思ったのですが、そうすると二回連続で説明回になるので、まとめて投稿しちゃいました。

なにはともあれ次はパーティーです！ 全力でティアを着飾らせるので楽しみにしてください！

第八話 王宮という華やかな舞台を作り上げる者たちについて（前書き）

警告です。エマーゼンシーです。ワーニングです（なんか違う気がする）。

この物語ですが、あらすじに『婚活ファンタジー』とか銘打ちましたが、ごめんなさい。婚活というものはそもそも恋愛ではありません。ごほんごほん。ええっと、ともかく、この物語は婚活をダシにしたファンタジーでしかありません。恋愛要素は薄目です。

主人公とヒロインのヤキモキするようなすれ違いは（あんまり）ありません。

胸キュンな展開も（ほとんど）ないです。

ティアがデレれ甘々になるような場面に至っては（マジで全く）予定していません。

本来一話目があらずじに書いておけという話ですが……そんなのでもよろしければお付き合ってください。

第八話 王宮という華やかな舞台を作り上げる者たちについて

その夜、王宮の脇にあるホールで華やかな宴会が行われていた。上質なタキシードと燕尾服、それに色鮮やかな流行のドレスがホールを回遊する中、料理や飲み物を持ったメイドが、給仕のためにきびきびと動きまわる。参加者は年配の人間が多い。若くて、三代半ばまでだ。パートナーとして愛人を横に連れている人も見られる。

その中にティアはいた。

今夜ばかりはティアの質素すぎる美的センスによるものではない。リリア特製である。

まず基本は真っ白なドレス。レースとフリルでこれでもかというぐらい可愛らしさを強調しているそれを着せられている。断じてティアの趣味ではないのだが、そんな抗議などリリアはいつもの笑顔で封殺。ティアの黒髪を鮮やかに結び上げたリリアが用意した長手袋は、黒。金糸によって鮮やかな刺繍がなされているそれは、不思議な存在感を示しながらも白無垢なドレスと調和している。

そんなティアが思うのはただひとつである。

(なぜ、こんなことに……)

実のところティアは、ここにいる人間の名前と顔がほとんど一致していた。

前もって調べていたという訳ではない。むしろ今回、ティアは出席者については全く調べていなかった。

だが、参加者の多くが政治家や資本家、その中でも上にいる人間ばかりだ。このそうそうたる顔ぶれ。みながみな、政財界のどこかしらでの重要人物である。この王宮を作り上げている人間たちがそろっているといっても過言ではない。

そんな人間が集まるところは、間違っても女の社交界のデビューに使ったりはしない、というか、そもそもティアのような小娘が出られる場では断じてない。

（これ、間違いなくおじい様本人が招待されていたパーティーだ。わたしなんかには代役を任せるなんて、何を考えているんだらう、おじい様は……）

まさか己の孫をよそにやりたくない侯爵が「ここなら絶対にティアの結婚相手になるような者はいないだろう。ふはははは」というわけで選出したなどと、ティアは思いつきもしない。

ティアは自分の場違いさをつらつらと考えていたが、自分の横にそれと同じようなことを考えている少女がいた。

「あ、あのティア様」

声に反応して横を向くと、そこにはティア以上に着飾られた少女がいた。

エレンである。ティアがリアにいいように人形扱いされたので、八つ当たり気味に着飾らせてみたのだ。化粧を試してみたら、普段の幼い様子からは考えられないほど大人びた顔になったので、当初予定していた衣装を変更。可憐に飾られたティアとは真逆の方向へ。背中の大きく開け胸元も強調した、紫紺のイブニングドレス。普段は一つに縛っているだけの栗毛はティアの技巧の極致を尽くして結い上げ　というより、頭に盛っている。そして、そんな髪に差して頭上で咲き誇っている百花の王たる牡丹の花。花弁の一枚一枚を赤銅で精巧に造られたそれは、誰が見てもこう思うだろう。

（……うわ、重そう）

と。

飾り付けたティア本人ですらそう思ったのだから間違いない。あれは、昔合戦で使われていた兜並みの重さがあるに違いない。

服装から綺麗に調和も取れて似合っているし、人の目を引くのに成功しているのだが、いささかやりすぎた感が否めない。たぶん、頭に本を乗せるといふ淑女の訓練はこのようなときにあるのだろう。実際、その訓練を受けていなかったエレンの頭はぐらぐらと不安定に揺れている。

「何をお考えになって、わたしをここへ……？」

その綺麗におめかししたエレンはただ立っているだけだということに涙ぐんでいる。

ちなみに、ティアがここに出席できない以上に、エレンのような立場の人間がここに入ることはかなわない。主催者側で給仕が用意されている以上、パートナーは連れてきても、自分の従者を連れて行くようなことは普通はしないからだ。

そんな普通でないことをしでかしているティアは、エレンの瞳を三秒ほどじつと見つめてから口を開いた。

「いや、なんとなく」

「ティア様あ！」

「うるさい」

悲痛な声をぴしゃりと叱りつける。

勘違いをしている人間も多いのだが、ティアはもともと直感に従って生きている。合理的な思考も大事にしているが、それでも感情に引つ張られることもあるし、根拠のない思いつきに身を任せることも多い。今回エレンを連れてきたのも、まさになんとなく。特に理由はない。しいて言えば一人は嫌だなと思っ、リリアを連れてく

るのはもつと嫌だなあ、という思考の末である。

そんな主の気まぐれに付き合わされているメイドの気持ちは斟酌せずに、ティアは問いかける。

「そもそも、何が嫌なの？」

「うう、だって、恐れ多くて」

「大丈夫、エレン。そんなに緊張するなら、列席されている方々を人間だと思わなければいい」

「そ、そうですねっ。えっと、カボチャとかと……」

ティアが目で周囲を指し示すと、エレンが自己暗示をかけ始める。そう。ここにいる者たちは人間などではない。ここにいる人間は生き馬の目を抜くような競争で勝ち残り、常人では息もできないような魑魅魍魎の群れの中を跋扈しているような傑物ばかりなのだ。

「そうそう。あそこにいる方々を、北山の人食い竜や、大海の船食い竜だとも思えば」

「帰りますっ！」

「待て」

ついつつかり本音が出てしまった。

人類がいまだ敵わぬ生物で例えられるような群れから、涙目で逃走しようとしたエレンの腕を、ティアはがしりと掴んで引き留める。

「冗談だから」

「ほ、ほんとですか……？」

「ほんとほんと。だれもエレンを食べたりしない。こんなパーティー出る機会なんてもうないだろうし、気楽にきなさい。ほら、あっちにお菓子があるから取ってきて」

「あ、ほんとですね！」

ティアの家でもそうそう出ないような高級菓子の山を示すと、先ほどとは打って変わって笑顔になる。そんなエレンに、ティアはバカナ子だなあ、と思う。

スキップしかねない足取りで跳ねるエレンの後ろ姿に顔をほころばせていると、ティアが一人になったのを見計らったのだらう。近くにいた赤毛のメイドの一人がシャンパンの入ったグラスを渡してくる。かつて王宮で勤めていたティアだからこそわかることだが、今日、給仕に出ているメイドたちの動きは非常にいい。

「ありがとう」

実はティアがメイドをやっていた時の知り合いだったので微笑みかけて礼を言くと、赤毛のメイドが驚いたように固まってから、顔を赤くしてそそくさと下がっていく。

そんなことをしていると、後ろから声をかけられた。

「おや、ティア嬢ではありませんか」

声のほうを向くと、すらりとした長身を、詰襟の軍服で包んでいる青年がいた。アッシュブロンドの髪をオールバックにして、優しいな笑顔を浮かべている顔は女性受けの良い整い方をしている。ティアやエレンよりは年上だらうが、それを除けばこの場でもっとも若いだらう。

その青年を見て、ティアが一瞬にしていつもの無表情に戻った。覚えがある。ティアがメイドをやっていた時に作った人脈の一つだ。たしか

「……軍連中の情報源」

あんまりといえばあんまりの評価に、さすがに青年の顔が引きつった。

「イグサです」

「知ってる。イグサ・フォン子爵」

「……随分、口調が変わってませんか？前はもっとうろ、慇懃でしたが……」

「これが素。イグサ・フォン少尉」

メイドをやっていた時とは違うのだ。背負うべき立場が異なる。皮肉以外の何物でもない口調で肩書きを並び立てるティアに、軍の中でも内偵を担当する、嫌われ者の男は肩をすくめた。

「前言撤回します。相変わらずですね。メイドをやっている時と、変わらないようで安心しました」

物言いがそこはかたなくリリアに似ている気がして、ちょっと力チンときた。

「イグサ少尉は、何？軍務で来たの？」

「いえ、別に。個人として招待されましたよ？」

「胡散臭い」

いくら優秀とはいえ、彼のような若造がこんな場所に招待されるとも思えない。そんなティアに、イグサは苦笑を漏らす。

「相変わらず信用がないみたいですね」

「当たり前。軍務じゃないって言いたいなら、軍服着るな」

「これは正装ですよ」

心外です、とでも言いたげな表情だ。確かに軍人の礼装は軍服で間違いない。しかし、情報部の人間が着ていたら、胡散臭いと思っ
て当然だ。

「ところで、あなたがこんなところにいるとは、どこかに不穏な動きでも？」

イグサの邪推に、ティアは顔をしかめた。なんでパーティーに参加しただけのティアが、軍情報部の人間にそんなことを言われなければならぬのだ。

「何もない。というか、それはわたしのセリフ」

「何も？」

「そういうのは、もう卒業した」

「卒業？」

「最近、もう新聞くらいしか読んでない」

「新聞？」

ティアが言葉を重ねることに、イグサがどんどんいぶかしげな表情になる。随分信用がないというか過大評価のされすぎというか。しつこく食い下がってくる男に、ティアはだんだんと不機嫌になってきた。

「では、なんでまたここに？」

「おじい様の代役」

「何でまた」

知るか、とは答えなかった。知ることが大好きな人間に、知らないという情報をやるのは業腹だ。

ただ、別の方向で回答してやる。

「結婚相手を探してる」

「は？」

イグサがぼかんとした表情になる。曲者として知られている男のそんな顔は、ちょっと見ものだ。ティアはシャンパングラスを揺らして、内心で笑ってやる。

だが

「は………けっ、こん。ああ、結婚、ですか………あはは！ じゃあ、僕なんてどうですか？ 自分で言うのもなんですが、けっこつ優良物件ですよ？」

「願い下げ」

さもおかしいジョークを聞いたというように笑い声をあげる。イグサの失礼な態度に、ティアはいささかムツとしながらもこき下ろす。

「若いくせに性悪な諜報員の嫁なんて、気苦労するだけ。しかも、陰謀屋。巻き込まれたりはしたくない」
「ははっ、違いありません。ところで」

若手のくせに諜報などに身をやつしている男は、すつと神妙な表情になる。

「こんな話があります」

「いらない」

ティアは諜報じみた真似はもうおしまいにしたというのに、しつこい。切って捨てようとしたが、それでもひかず口を寄せてきた。

「宮廷を辞したあなたが御存知かどうかは知りませんが、女王が政治の場に出ようとしているという動きがあります」

「デマ」

即座に否定してから、内心で舌打ちする。

反射的に答えてしまったが、つい乗せられてしまった。

だが、今は紛れもなく本心だ。ティアはエリザベスのことを、誰よりも熟知しているという自負がある。エリザベスの性格上、いままでの伝統を破ってまで内政にかかわろうとしたりはしないだろう。野心もなければ、メリットもない。

「女王陛下と連絡は取っていないのでは？」

「……陛下の性格から、予測しただけ。間違いなくただの噂話。そんな流言を真に受けるなんて、陰謀係の名前が泣く」

「そうですか？　しかしこれには、裏付けに近い情報があるんです

よ

「？」

ティアからしてみれば、確実にデマだと言い切れる話だ。イグサも確認程度に聞いてきたのだと思っていたが、やたら自信ありげな様子だ。

「その手始めとして、信頼でき、かつ優秀な側近に周辺貴族の懐柔などの前準備を任せている、と。我が国の有力貴族であるメイチ家はいち早く女王側についたという、そんなまことしやかな噂話まで流れる始末です」

「……」

「ああ、女王の側近といえば、大変優秀と評判だったメイドがいましたね。王家の三子皆様と親しく、仕事に勤勉で同僚にもよく好か

れていたとか。なぜか女王の即位と合わせて任を解かれていたが、不思議な話もあるものですよね。彼女の実家は……ええと、どこでしたっけ？ ご存知ですか、ティア・メディチ侯爵嬢？」

目の前の伊達男に、グラスの中身をぶっかけてやるうか。ここが社交の場であることを承知していながらも、ティアは真剣に迷った。自分の葛藤と戦うために黙り込んだティアの様子をどう見たか、イグサはひとりで満足そうに頷く。

「なんならご協力しましょうか？ 王族との縁は、いかな金銀財宝よりも価値がありますからね」

ティアならば、そんな縁はこちらから金を払ってでも売り払ってしまいたい。

「所詮、噂話」

「……そうですね」

掛け値なしの真実なのだが、明らかに信用していない。

「ティア嬢。そちらから何か聞きたいことはありますか？」

「……じゃあ、ルイ王国がどうなっているか知っている？」

投げやりに問う。何でもよかったのだが、この間新聞で見て気になったニュースを聞くことにした。

「あそこですか。最近、国王と議会の乖離が広がっていますね。少し、混乱気味の情勢です」

「そう」

「……あそこに、何かあるんですか？」

「別に。新聞で見てもちよつと興味が惹かれただけ」

手短かに答えながら、思う。

(やっぱり、しがらみが多い……)

やっぱり、こんな国は早々に捨てて他国で一生を終えよう。

改めて、そんな決意を固めた。

そのためにやるべきことが、婚活だ。ここにいる人間は、すべからく人脈が広い。彼ら自身は対象外でも、彼らの知り合いを紹介してもらうことができるかもしれない。せっかくなのだから、いろいろと話しかけていこう。

イグサが離れていったのを機にそう決め、ティアはどこかの会話の輪に混じるべく、ふらりと歩き出した。

そういえば戻ってこないエレンのことなど、きれいさっぱり忘れて。

従者のことを忘れるティアもティアだが、エレンはエレンでその時主の命をきれいさっぱり忘れていた。

それも、目の前のお菓子に心を奪われたという割とどうしようもない理由で。

色とりどりのケーキ、マカロン、クッキー。そのさまざまなおスイーツをつまみながら、自分は幸せだ、ティア様ありがとう、と先ほどまで抱いていた恨みなど忘れて自分の主に感謝の念をささげ、甘味を堪能していた時、ふと一人の貴婦人と目があつたような気がした。

その瞬間、エレンの目に軽い衝撃が走った。

「……っ」

なにかが眼球を介してエレンの内部に入りこもうとして、しかし弾かれのような感触。もちろん、何かがぶつかったわけではない。はたから見たら、エレンが突然よるめいただけにしか見えなかっただろう。

だが、いまの目。

逃げよう。

そう思った。なぜかはわからない。今の衝撃がなんなのかも。だが、警報が鳴っていた。お菓子のことなんか、もう頭になかった。とりあえず、ティアの傍に。信頼できる人の庇護のもとへ。そう辺りを見渡したが

「……あ」

小さく、息が漏れる。

エレンの前に、一人の貴婦人がいた。間違いなく、先ほど視線があった女性だ。

その女性は言ってしまうと、平凡な婦人に見えた。四十を超えているだろう、髪に白髪が混じった婦人だ。穏やかな物腰で上品だが、少なくとも、エレンの主であるティアのような美しさはない。

だが、何の変哲もないその鳶色の瞳の奥に、見るものの胸をかき乱すような妖しく仄暗い光があった。

「ただ失敗したならともかく、弾かれたのは初めてよ。……あなた、貴族ではないのね」

婦人がくすり、と笑った。だが、エレンはそんなことはどうでも

よかった。

エレンは、目の前にいる女性が誰なのかは知らない。上流階級の人間の顔など、把握しているはずもない。

なのに、彼女がなんなのかはわかってしまった。

「ネルバの……っ」

「そうよ」

婦人はあっさり認める。エレンに彼女がなんだかわかってしまったように、目の前の婦人はエレンがなんなのかわかってる。

ぞくりとした。

「あ、その……っ」

「ただの釣り得のつもりだったけど……あなた、少しだけ興味深いわ」

逃げ出したかった。だが、目の前の女性は、当然のようにエレンの言葉を無視した。

「うふふ。あなたみたいなの、初めて見るわ。ねえ。あなたは自分が何かわかっているの？」

婦人には、逃がすかという意思すらない。エレンが逃げられるはずがないというのを承知の上で言葉を重ねてきた。

「何か不幸にさいなまれていない？ 理不尽に覚えが悪かったりしない？ よく、悪意のある他人に目をつけられない？ 何か、周りに不運がふりかかったりは？ ああ、全部承知の上なのね。私に気が付いたということ垂、そういうことだものね。だって、あなたは」

その問いは、エレンの答えなど必要としていなかった。何もかも見透かしているかというように、エレンの瞳を覗き込んで、笑う。その笑みに、エレンは心中が、ぎしりとゆがんだ。限界が近い。怖い。問いかける一言一言が刺さってくる。何もしていないのに壊れてしまいそうだ。

だが、目の前の婦人は一切かまわなかった。

「あなたは、自分がなんなのか知っているくせに、生きているのね？」

意外なくらい、ここにいる人間たちとの会話は盛り上がった。

ここにいる人間はみな、いろんな分野に造詣が広く教養深い。また、会話も上手い人間が多いため、興味深く聞き入ってしまうことも多々あった。有益な情報交換もでき、非常にためになったといえる話し相手にすっかり名前を覚えてもらっただろう。祖父にも、胸を張って代役をこなしたと報告できる。

ただ、惜しむことがあるとすれば

(……しまった。話が盛り上がりすぎて、婚活のことを話すの忘れてた)

という、非常に本末転倒な結果になったことぐらいだろう。

ちよつと落ち込みつつも、そういえばエレンはどこに行ったのだろうと見渡してみても、目を見開いた。

エレンはすぐ見つけることができた。だが、発見したはいいものの、エレンの話し相手が、ティアが目を見張ってしまうぐらいには

大物だったのだ。

(イリヤ・オスボーン……！)

エレンと話している女性は、おそらくここにいる中でも屈指の大物だ。

広大な氷土の領土の九割を治め、残る一割の小国を属国とする北の帝王、大陸の覇者に最も近いといわれるユーヅニア帝国、そこで女性ながらも権力を握りつている女傑だ。これは定かではないが、彼女はユーヅニアの王族の血をひいているという噂もある。

それが、何やら怪しい空気を放っている。

一瞬躊躇した。

なんか、あそこには、行きたくない。そういう空気が漂っている。が、連れてきた手前、こっちに気が付いて子ウサギみたいに目をうるうるさせて助けを求めているエレンを見捨てるのもどうかと思うので、ためらいを振り払う。

「お初にお目にかかります、イリヤ・オスボーン閣下。ティア・メデイチと申します。わたしの連れが何か粗相をしでかしましたでしょうか？」

ドレスの裾をつまんで一礼。簡潔ながら、自己紹介をする。

閣下、という敬称からもわかるように、外交において他国に駐在する全権大使という役職は、ただのいち外交官ではない。公使館に駐在する全権大使は、その国の王から任命される。言ってしまうえば大臣と同じクラスの大物なのだ。

「あ、ティア様……！」

「いいえ。ちょっと声をかけていただけよ」

本当か、と目で問いかけると、エレンはこくこくと必死で頷いた。エレンらしく何かドジをやらかした、というわけではないのは確からしい。

ほんの少しだけ、緊張を解く。

「始めまして、ティア嬢。けれど、面白い従者を連れてきているのね」
「ありがとうございます。しかし、光栄ならなぜわたし達などにお声を？ 御用でも？」

向き合ってみると、不思議な人物だ。

先ほどまで話していた人たちには、何かしら特出したものがあった。精力的で勢いがあったり、熱意に満ち溢れていたり、穏やかながらも芯が強かったり、他人を出し抜ける狡猾さが垣間見えた。

だというのに彼女にはまるで覇気がない。物腰も柔らかで、ただの上品な貴婦人だと思えない。いまの提案も、好意から出た謝罪の証明にしか聞こえなかった。

だが、そんなわけではない。

ティアが知っている程度ですら、イリヤ・オスボーンという人物がその程度であるはずがないというのはわかる。

「何故？ あなたに用？ 特にないわ」

「そうなのですか？」

「ええ。別にいいじゃない。ただ、可愛い女の子がいたから話しかけただけよ。誰もかれも、私が声をかけたというだけで、物事を大きくしないでほしいわ」

「失礼いたしました。お察しいたします。わたしも、因縁をつけられたばかりです」

「そうなの？」

「はい」

ティアは共感を示す。だが、イリヤは穏やかぶ宣言したくせに「けれどもね」と意地の悪い声音で付け加える。

「私の場合は、ほかに用事がない、とはいわないけどね」

「……そうですか。やはり、様々なお仕事が積み重なっているようで、地位にふさわしい忙中にあるのですね」

「そうね。ああまでやるのが積み重なっていると、やりがいよりも先に嫌になるわ」

表面上は、社交辞令といってもいいような穏やかなやり取り。だが、穏やかながらもその底にはひそやかなスパイスが聞いていた。

ティアが探りを入れれば、イリヤは陰謀を匂わせる。

互いに表向きの建前を盾に、相手に切り込んでいく。

「ところでティア嬢。人生とは、何で決まると思う」

「生まれです、オスボーン閣下」

「そう。あなたがそれを言うの？」

「はい」

答えながらも、ティアは無表情のまま思う。

なんだ、ちょっと面白くなってきたぞ　と。

今更ながらに不穏な雰囲気を感じたエレンが喉を引きつらせる。

だが、ティアはかまわなかった。先ほどのイグサとの会話とは全然違う。知的興奮から、だんだんわくわくしてきていた。

あまり公にされていることではないが、ティアは庶子だ。それも七つの時まで平民として育った。唐突に話が飛んだように思えるいまの質問は、イリヤがそれを知っていることを前提としなければ出てこない。イリヤは、祖父の代役でしかないティアの情報まで熟知しているのだ。

だがティアは、それを韜晦するような様子も見せずに問答に付き

合う。

「確かにわたしは、庶子です。けれども、ただのティアであったころのわたしと、ティア・メデイチであるわたし。そのどちらも、大差があったとは思えません。わたしは、メデイチ家の血をひいているからこそ、評価されているのです」

ユージニアの一番恐ろしいところは、実のところ軍事力ではない。大陸全土を網羅している情報網だ。というより、ユージニアの高い軍事力を支えているのは、異常な精度を誇る情報網なのだ。

その一員である目の前の女性は、情報を投げてよこしてくれるような容易い人物ではないはずだ。だから、引き出して見せる目の前の女性は言っている。

「わたしは、平民で生まれ異人街で暮らし、それから貴族になりました。だからこそ、人は生まれで決まると、人生は血であると、そう思うのです」

貴族の子供は貴族に。そうあるからこそ、今の社会は成り立っている。

ティアの意見に、イリヤはくすり、と笑った。

「あなたは、生まれより能力で評価された人間よ？」

「過大な評価がすぎます、閣下。それに、生まれがなければ能力は評価されません」

「頑固ね」

「申し訳ございません。ご不快を買ったならば、お詫びいたします」「いえ。いまの社会では、その回答で正解よ。けれども、あなたは今の社会が正しいと思う？」

「浅学なわたしには、到底答えかねます」

「そう。ならば、人間は何で決まる思う？」
「……そのような深謀な問い、わたし如きではますます答えを出す
ことができません」

半ばやり込められているやり取りの中、ふと思い浮かぶ。ちよつと反撃してみよう。ティアは短い沈黙で、頭を回した。

いまのこの場は、行ってしまえば余興なのだ。それならば、この際、今の状況とイリヤの人物像は捨て置く。考えてみれば、いまのこの場はティアにとっても何かを犠牲にするような状況ではないのだ。まさしく、座興以外のものでもない。

そもそも、イリヤはなぜティアに声をかけてきたのか？ 先ほど政財人たちと話していたのが興味を引いたか、はたまたティアが関わっていた王族の騒動を耳にしていたか。それとも、エレン？ 理由は知らないが、何やら興味を持っている風だった。ならば、それが。

(いや、違うか……)

正解らしきものを掴みかけ、しかし否定した。

自意識過剰でなければ。おそらくイリヤはティアと会話の場を作るためにエレンを使ったのだ。エレンにイリヤの興味をひくような何かがあったのは確かだろうが、それだけではない。

では、なんだ。

ここに来てからの記憶が、ティアの中で泡のように浮かんでは弾ける。いくつもいくつも記憶の断片が浮かんでは消え、そして、唐突に光明が差した。

「閣下」

「なに？」

繰り返される問答の中、初めてティアから質問をする。

イリヤが聞き返してくる、それにティアは、落ち着け、といい言い聞かせる。息を吸って、吐いて。興奮せずに、心音を平常に。

そうして、聞く。

「……ルイ王国には、何があるんですか？」

相手の目をまっすぐに見つめ、渾身の思いを込めて突きつけた。根拠はない。だが、目の前の人物に反撃するならこれしかないとも思っていた。

イリヤの瞳が鮮やかに輝いた。何の変哲もない鷲色の目に、鋭利な光が音もなく閃く。

「なぜ？」

その時、初めて、イリヤ・オスボーンがティアの前に現れた。

漏れ出た気配に、後ろのエレンがびくりと反応する。ティアは、慄然とした。

ささやかな反撃は成功した。その証拠に、ようやく相手の興味を表にひき出せた。真の交渉事ならば、ここからが本番だといえるだろう。

だがティアは、彼女に対して一歩たりとも踏み込んでいきたくなかった。誰が、底なし沼に好んで踏み入るだろうか。毒の杯を進んで飲み干すだろうか。目の前にいるイリヤ・オスボーンの目は、まさしくそれだ。

「……」

じとり、とティアの首筋に冷や汗が浮かんだ。正直、初めての経験だ。審判がいるなら、ギブアップを訴えたくなかった。もしくは、

ティアが何かを任されていた立場だったのならば、決死の覚悟で突っ込んでいったらどうか。

けれども、別に何かを引き出す必要など最初からないのだ。今のティアは、何か得ようとする必要もない。ただ婚活に来たお嬢様でしかないのだ。

だからこそ、ティアはイリヤノ簡潔で深い問いに

「……勘です」

と、ふてぶてしくも、ポーカーフェイスのまま真実で答えてみせた。

「あら」

イリヤはきょとん、と目を丸めた。ついで

「……ふふ、うふふつ、ふふふ！」

口元を抑え、それはもうおかしそうに笑った。

それまでの含みのある笑いではない。演技でもなく、慎ましいながらも女性らしい笑い声だった。

「あなたは、本当に愉快ね」

だが

「あんなところには、何にもないわ」

気配がすつと引つ込む。

先ほどまで展開されていた毒の底なし沼を、夜に紛れるフクロウ

のように、見事に消し去ってみせた。

「では、失礼するわね」

「はい。お話、大変楽しませていただきました」

イリヤの言葉を合図にティアが一礼することによって、お開きになる。

イリヤが他の人垣に紛れるまで見送って、ティアはほっと肩の力を抜いた。

「ティア様あ……」

よっぽど怖かったのか、エレンが腕にしがみついてくる。ティアとしても、そつとう精神を削られた。

「わたしも疲れた」

泣きつ面のエレンの頭をよしよしとなでながら、先ほどの会話を考える。考えるべきことはいくつもあったが、わかりやすく重要だったのは

（ルイ王国で、何かあるのかな……）

そう思うが、所詮は他国のことだ。ティアが介入できるものではない。

後でイグサにでも伝えておこう。そう決めて、ティアはパーティーに戻ることにした。

「よし、エレン。今度は一緒にあっちに行こう」

「嫌です、もう帰りましょーよー！」

「確かあつちに、異大陸の珍しい果物が……」
「ほんとですか！」

そんな会話をしながら、パーティーに戻っていく。

今回の報酬は、エレンの操縦方を完全に覚えたことかな。

あまりに単純に表情を輝かすエレンの笑顔に、ティアはもう一度、口元を抑えてくすりと笑った。

第八話 王宮という華やかな舞台を作り上げる者たちについて（後書き）

難産でした。頭のいい人の会話なんぞ、知・る・か！ と思いがら書いていました。残念な頭をしている書き手ではないです。疲れた割には残念なやり取りです。

そういえば、服飾関連でいいサイトを見つけてましたのでご紹介を。

`ttp://www.costumegallery.com/
research.htm`

1800年代から現在まで、イギリス限定ではありませんがかなり細かく（おそらく3年ごとぐらい）時々の服飾流行についての資料があります。しかも当時の絵付き。帽子から靴まで、それぞれの分類まで。サイト自体も整理されてて非常に見やすいです。そう、そして！

あとは、文字さえ読めれば完・璧です！（イギリスのサイト様なので、サイトの全文字英語です）

大事なことなので二回いいますが、残念な頭をしている書き手ではないです。

裏話 真・王宮という華やかな舞台を作り上げる者たちについて

エルレインは働いていた。それはもう、働いていた。着用しているエプロンドレスにふさわしく働いていた。いつそ馬車馬のように働いていた。いや、むしろ蒸気機関のような勢いだ。くべられていく燃料は、きつとエルレインの体力と精神力と生命力だろう。神の血をひくエルレインだからこそまだまだ余力を持っているが、普通の人間ならばとつくに過労死しているに違いない。そんな身を削るような行いで連日連夜働いている彼は、疑いようもなく王族らしく王宮を支えている一員である。

「それでも、今はお姉ちゃんがないからましなんだよね……あれ？」

掘削のような勢いで削っていた書類の一枚。エルレインは手を止めてその内容を呟いた。

「ティアちゃんが出るんだ。珍しい」

姉がサボると宣言したパーティーに関するものである。もともとメデイチ侯爵が出る予定だったのだが、何の事情かティアが代役として出るらしい。ティアとは、エルレインも仲良くしていた。

ティアの性格でパーティーなどに出るとは思わなかったが、あまり物事を深く考えないエルレインとしてみればどうでもよかった。

「ティアちゃんが出るなら、ボクも行きたいけど……まあ、無理だよなー」

久しぶりに友人に会おうと姉の代理でもしようかと思ったが、仕事量の多さを勘案して諦める。できる限り姉がいないうちに片づけてしまいたいのだ。姉がいたら、無駄に邪魔されるのだ。

さあ、お仕事再開だ、と気合を入れかけてから、それ以上の問題があることに気が付いた。

もしかしたら、ティアが出るならエリザベスも出ると言い出すかもしれない。いや、あの姉のことだ。間違いなく我がままを炸裂させるだろう。自分から宣言したサボりなどあっさり撤回するに決まっている。エルレインが必死に作ったアリバイなどあっさり破り捨てるだろう。

「うーん、でも……」

エルレインは腕を組んで思索する。

エリザベスは、公爵家に出向していることになっている。エルレインが必死になって作ったサボりための口実ではあるが、真実そちらに向かっている。パーティーまでもう何日もないし、いまから知らせを出しても間に合わないだろう。

それでも、ぶっちゃけ軍神の血をひくかなり超人なエルレインが頑張って走れば間に合ってしまうのだが

「……………」

積みあがる書類の山を見て、エルレインは半ばうつろな目になった。

「うん、無理。無理無理無理無理」

自分にはそんなことはできない。エルレインはそう聞かせる。不

可能はないと豪語する姉とは違うのだ。そもそも、嫌いな奴がいるからと自分勝手に欠席をする姉が悪い。自分は仕事をしているのだ。文句を言われる筋合いはない。

「そりゃ、ユージニアのが嫌なのはわからないでもないけどさ」

公私混合も甚だしい姉の自業自得だ。遠く離れた姉のことは置いておき、パーティーの準備を任せられているメイド長にだけはこのことを伝えておくことにした。

王宮とは誰の者が。それはメイドのものである。なぜならば、王宮を作り上げているのはメイドだからだ。各所に配置され雑事の一切を引き受ける縁の下の力持ち、王宮の隅の隅まで知り尽くしているオールラウンダー。それがメイドであるからだ。

そう言っただけで憚らない、そして王宮の真の支配者とささやかれるのがここにいるメイド長、アイネ・クライネである。

「さて、みなさんにお知らせすることがあります。重大なことなので、心して聞くように」

『はい！』

居並ぶメイドたちが一斉に返事をする。

メイド長の前にずらりと整列するメイドたち。王宮に勤める彼女たちだ。その練度は軍のそれと遜色ない。

そのリーダーであるアイネは、三角メガネをきらりと鋭く光らせた。

「いま、エルレイン様からご連絡がありました。お客様の変更があったようです」

『はい!』

「メイドチ侯爵ですが、代役としてティア嬢をよこすそうです」

『っ!』

メイドたちの間に衝撃が走った。

「これにより、三日後に行われる夜会は、いつものパーティー……という訳にはいかなくなりました。理由は、わざわざ説明するまでもありませんね?」

『はいっ、メイド長!』

メイド長の言葉に、居並ぶメイドは一糸乱れぬ返答をする。

それも当然。ここにいる彼女たちにとってみれば、国を支える重鎮などより一人の少女のほうがよっぽど大切なのだ。たった三年だけこの王宮にいた、しかしその三年間誰よりも仕事に誠実だった魅力的な女の子。この王宮のメイドたちで彼女に好意を持っていないものはいない。

その様子に、巷で鬼のメイド長と評されるアイネは満足そうに微笑んだ。

「よろしい。では、私達の全力をもって、かつての仲間であった彼女を迎えましょう」

『はい!』

パーティーに給仕は必要不可欠だが、その人気はメイドの仕事の中でも非常に低い。

なにせ、身分の高い人の接待である。直接かわるため。些細な粗相でも厳罰が下るのだ。そんなリスクのある仕事をしたがる人間はいない。特に、今日のようなお偉いさんが集まる時はなおさらである。

だが、今回ばかりは違った。

「ちよつと待ちなさいよ、ネネつ。順番通りなら、今日はあたしが入るはずでしょう！」

「いいえ、ニーナ。大切なパーティーに、粗相をしでかしかねないようなガサツなあんたなんて、出・せ・ま・せ・ん」
「なっ」

明日のパーティーでの給仕を決める出勤表を前にして争って言い合っている。非常に珍しい光景だといえる。普段ならば強制的に割り振るこの仕事が、今回だけは我も我もと希望者が殺到し、もはや出れる枠はあと一個しかないという状態なのだ。

「うっさいっ。ティアさんのお世話はあたしがするのよ！ いままで受けた御恩をお返しするの！」

「ほら、考えが仕事の本分とずれてるじゃないですか。気持ちはいよくわかりますけど、あのパーティーには、きつと素敵に着飾ったティアさん以外にも、その他大勢がいるんですよ？ 全く、これだからガサツなニーナは」

「お客様をその他大勢扱いするあんたにとやかく言われたくないわよ、陰険ネネ！」

だが、どちらも自分の正当性を固持して譲らない。ニーナと呼ば

れた赤毛のメイドが言葉を荒立てるのに、ネネと呼ばれたメイドが慇懃な言葉づかいながらきっぱりと断る。立場は同じな二人のため、平行線をたどるのだ。

そんな中、てくてくとした足取りで二人の少女が部屋に入ってきた。砂糖菓子みたいなふわふわの巻き毛を持った、一目で双子とわかるそっくりの容姿の持ち主だ。

彼女たち言い争う二人は脇を抜け、出勤表にさらさらと自らの名前を書き込む。

「さて、明日の出勤枠のラスト一個は、シエイラとー」

「シヨコラの二人で仲良く半分こですね」

「なにやってんのあんた達!?!」

双子の行為は身勝手なくせに堂々としすぎである。ネネとニーナが二人して詰め寄るが、シエイラとシヨコラは怯まない。

「えゝ、だって。パーティーの途中で入れ替わったところで」

「わたしたちはそっくりなので、ティアさんぐらいいしが気が付きません」

「誰がそんなこと責めましたか! 一つの仕事をを入れ替わって二人で分けるのはいつものことですから今さら何も言いません」

「そうよ。問題は、なんであたしたちを差し置いてあんたらが出勤しようとしてるってことよ!」

「そんなの簡単ですよ」

「この間お二人のシフトを変わってあげたじゃないですか」

「うっ」

心当たりのある二人は、声を詰まらせる。

「ここは譲るのが」

「筋つてものですよねー?」

シェイラとシヨコラはくすくすと真つ黒な笑みを浮かべて、過去に貸し付けた恩の回収を始めた。

あまりの利子の多さに、カモにされた二人は怒りで拳を震わせる

「あんたら、どうでもいい時に限ってあちこち恩を売るから……!」

「どうしようもなく性悪ですね、この黒砂糖姉妹……!」

「気が付かなぼうがー」

「おまぬけさんなんですよ〜?」

「くっ」

「可愛いドレス姿のティアさんをお世話するのは、ティアさんとたまあーと一緒に働いてたお二人じゃなくてー」

「直の後輩で、いっつもいろいろ教えてもらってたわたしたちなんです〜」

「くっくっくっ……!」

双子の挑発に、びきり、とネネとニーナのこめかみに血管が浮かぶ。

柳眉を逆立てる二人に、黒々とした笑顔の双子。その間には、険悪な雰囲気渦巻いている。

だが

「なにしていますの、あなたたち」

そこに新たな参入者が現れた。豪華な金髪を、これまた見事に縦ロールにしている少女である。このメイドたちの取りまとめ役の上級メイドである。

「……やれやれ」

騒ぎを聞きつけた彼女は、その場の様子を見て、ふう、と息を吐いた。

「そんな低レベルな言い争いをしてますとは。やっぱりあなたたちにはまかせられませんわね。まあ本来出る幕ではありませんけど、ここは伯爵令嬢である、あたくしサファニアス・ノノア・イグニアスが」

「……それはないです」「」「」

「あなたたち!？」

さっきまで険悪だったメイド達が急に仲良くなって口をそろえた。

「そんな高圧的な給仕がどこにいるんですか」

「というかイグニアスさんが入れる枠なんて最初からないわよね」

「アスアスさん、ぶっちゃけ仕事できないですもんねー」

「ていうか、アスロールさん。いい加減、メイドにあるまじき縦ロールはやめてください」

上司に向かって好き勝手に言い立てる。

「あ、あああなたたちい？ あたくしが誰だか、わかっていますわよねえ？」

ただの悪口も混ざったそれらにプライドの高いイグニアスは、わなわたと全身を震わせるが

「なんですか、縦ロールさん。パウハラなら全力で反抗しますからね、縦ロールさん」

「ちよつと、ネネ。その呼び方はひどいわよ……。なんか、縦ロー

ルが悪いみたいじゃない。縦ロールっていう髪型には何の罪もないのよ?」

「そうですね、ネネさんー。ニーナさんの言うとおりですー。アスアスさんは性格と仕事をこなす能力がこの王宮の誰よりも悪いだけですよー? 縦ロールは素敵ですよ縦ロールはー」

「もう、みんなひどいですよ。アスロールさん、みんなの言うことは気にしちゃダメですよ? いつまでも縦ロールなアスロールさんでいてくださいね? あ、でも仕事の際はうざいのでやめてください、縦ロールは」

「うわああああああんっ、部下のくせにいいいい!」

案外あっさり部下に泣かされたイグニアスは、全力で遁走した。

上司を泣かせた面々はとえばそれを見送り

「うわ、泣いちゃいましたね。昔に比べればましですけど、相変わらず根性のない人です」

「まあ、もともとお嬢様だし。それにしても、イグニアスさん泣かしたところで、罪悪感が全然湧いてこないわ」

「ていうかアスアスさん、昔にティアさんと一緒に仕事した後から扱いやすくなりましたよねー」

「前は仕事のできなくて身分を笠に着てるっていう、最悪なプライドの塊でしたからね」

面の皮の厚いことこの上なかった。

それから四人は顔を見合わせ、不穏に笑う。

「じゃあ、邪魔者もいなくなったところで再開するのでしょうか」
「そうね。誰がティアさんにふさわしいか、ようやく決着がつくのね」

「そんなのはー」

「わたしたちに決まっているんです」

たった一枠をかけた濃密な激戦が、いま始まった。

裏話 真・王宮という華やかな舞台を作り上げる者たちについて（後書き）

オールメイドな話でした。

あ、今回ぞろぞろと出てきたキャラですが、要望でもない限りおそらく二度と出てこないの覚える必要は一切ございません。

四人のうちだれが勝ち残ったかは適当に想像しておいてください（ていうか、前話に書いてあります）。

第九話 祭日という穏やかな時間が流れる日について

「失礼します。 ティア様」

そう断ってティアの部屋に入ってきたのは、リリアだ。

「ティア様。 お伝えすることがあります」

リリアが突然部屋を訪ねてくることはままあることだ。 純粹に仕事だったり、祖父からの伝言を預かっていたり、もしくは単純にティアをからかいに来るだけだったりもする。

しかし、今回はリリアの様子が少しおかしかった。 いつものような胡散臭い笑顔は浮かべていない。 真摯な表情に、ちょっと悲しみが混ざっている。

それに、ティアは不審げに眉をひそめた。

「どうしたの、リリア？」

態度が、おかしい。 いつもの人を食ったような、一縄筋でいかなのがリリアだというのに、その象徴たる笑顔がないとは、何とも不自然だ。 しかも今気が付いたが、リリアはメイド服ではない。 私服である。

だが、すぐにその理由に思いたる。

「あ、そうか。 誕生祭だった」

近々、初代国王の誕生祭があるのだった。 前後一週間は祭日となるため、使用人たちも休暇に入るのだ。

「休暇のあいさつ？ 何日ぐらい？」

「ティア様。今までお世話になりました」

「どうしたの。キモチ悪い」

ただの休暇であるはずのリリアから今生の別れのように頭を下げられ、正直に言葉が漏れ出てしまった。結構ひどい言葉だが、いつも結構ひどい扱いをされているので仕方がない。

「突然で申し訳ありませんが、職を辞すことになりました」

「え」

いきなりの報告にティアは無表情を崩して目を見開く。

「ど、どうして？」

そんな大事が前もって知らされなかったなど、おかしい。動揺から思わず言葉が乱れてしまった。

そんなティアに、リリアは肅々と頭を下げた。

「実は、今度結婚をすることになりました」

「なんだ。嘘か」

反射的に、その割にはさっきとは異なり、やたらスムーズに喉から言葉がついてでる。

「いえ、本当ですが」

「いや。リリアが結婚できるわけがない」

何の根拠もなく断言してしまった。何の根拠もないが、ティアの

言葉にはなぜか確信が込められていた。

「全く。タチの悪い冗談はやめて」

そんなティアの反応に、リリアはそつと悲しげに顔をうつむけた。

「認めがたいお気持ちは、察します」

「いや。リリア。ちょっとしつこい」

「正直に心情を吐露しますと、私もティア様から離れるのは……少し、淋しいのです」

誰だこいつ。

リリアの態度にティアは啞然と口を開いて呆けてしまった。こんなリリアじゃない。あまりに予想外な反応に、ティアの脳は目の前の現実を受け入れることを拒絶し始めた。

「あれ？ あ、そっか。ウイング家長女のリンデイスか。いつ髪切ったの。紛らわしい」

そつだ。確かリリアにはよく似た姉がいた。リンデイスという名前で、二度ほどあったことがあるが、性格はリリアに全く似ず、穏やかで慎ましい女性だった。目の前にいるのはそつちか。

いつの間に入れ替わったのだろつ。ティアはそう疑問に思ったが

「いえ、私はリリアで間違いありません。というより、姉はとうの昔に結婚してます」

リリアは、ティアの現実逃避をあつさりぶち壊してくれた。

「え。いや。だって」

「確かに、いつもと態度が多少異なるかもしれませんが。でも、最後ぐらい、素直な気持ちに従おうと思っっているのです」

「いや。わたしの前で、リリアが素直な気持ちに従わなかったほうが少ない」

「そんなことはありません。いつもは、裏返した言葉をかけてばかりでした」

「ちょ。ちょっと待って」

キモチ悪い言葉を出し続けるリリアを押しとどめた。ティアは片手で鈍痛を発し始めた額を抑え、もう片方の手でリリアを牽制する。おかしい。何かがおかしい。というより、何もかもがおかしい。落ち着け。そう思う。イリヤ・オスボーンと対峙した時を思い出せ。あの時のように、思考を澄ませる。これは、あの時とは比べ物にならないような異常事態だ。

「そもそも、相手は誰」

「……ティア様もご存知かと思えます」

聞くと、リリアが微かに頬を染めた。

それにティアは、ぞつと鳥肌を立てた。

「イグサ・フォン子爵様です」

その名前を出すただけだというのに、声音が夢見る乙女のように恥らっている。

ティアはといえば、その声音を聞かやいなや、鳥肌を通り越して腕にぶつぶつとじんましんを発生させ始めていた。さきほど立て直した精神が、あつという間に瓦解する。

「え。あいつ?」

「はい。最初はあつた時には何だこの胡散臭い奴は思っていました
が、何度か逢瀬を繰り返すことによつて、その本質が見えてきまし
て。恥ずかしながら、私と似たところもあつて、惹かれていきまし
た。あれで結構、一途な人なんですよ?」

リリアがとろとろとした、甘い表情になっていた。

「……っ」

無形の衝撃をたたきつけられたティアは、よろりと一歩後ずさつ
た。

(やばいやばい本気でキモチ悪い……!)

今やティアの全身は総毛だつて目の前の人物に対して拒否を示し
ていた。気絶しなかつた自分をほめてやりたかつた。情けないこと
に、恐怖のあまり泣き出しそうだった。

そして、はつと気が付く。

「そうか。偽物だ」

「はい?」

リリアが可愛らしく小首をかしげる。その仕草に、ティアはます
ます確信を深めた。

「ここまでリリアそっくりに化けるとは、面妖な。どんな怪人かし
らないけど、リリアに化けたのが運のつき。メデイチ家に入り込む
なんて……どんな目的か、吐け!」

「いえ、ティア様。私は本物ですけど」

「そう」

ティアは落ち着きを払って返す。ペタペタと顔から全身を触ってよくよく確かめても、肉体は本物のリリアのようだ。

これが変装の名人な怪人だという線は消えてしまった。ならば

「悪魔が取りついてるのか。去れ、悪魔！ リリアの体に乗っ取るなんて、許されることじゃないつ。リリアを解放しろ！ さもなくば、今すぐ教会に連れて行って、祓うぞ！」

「いえ、私は誕生祭の記念日に合わせて教会で式を挙げますが……ティア様？ 落ち着いてください。ほら、好きだったお茶をいま入れますから」

「……！」

その言葉に、そうだ、と思う。

リリアの入れる紅茶は特級だ。誰にも真似などできない。それを飲めば、この目の前の人物が偽物だと確信できるではないか。

自ら墓穴を掘った相手の提案に目を輝かせたが、けれども、同時に思う。

「これで、ティア様にお茶を出すのも最後になるんですね」
「……」

もし、用意してきた紅茶が、いつも通りだったら？ そんな思いでドキドキと心臓を跳ねさせているティアの前で、リリアは感慨深そうにお茶の準備を始める。

「びんぞ」

そつしてリリアが差し出してきたのは

「……あれ？」

真っ黒な、ブラックコーヒーだった。

という、夢を見た。

フィリカ王国には、大型休暇が二つある。ひとつは年末年始。もうひとつは、初代国王の誕生祭だ。職場ごとに差異はあるが、どちらもその記念日の前後にだいたい一週間ほど休暇が与えられる。いまは、そのひとつである初代国王の誕生祭を行っている。

メデイチ家も例外ではない。雇っているもの全員が一斉に休みに入るわけではないが、それでもこの間の屋敷の人間が半減し、静かになる。

そしてティアといえば、エレンがいないのもものすごくまったりとしていた。

「平和……」

エレンはいまティアの傍にはいない。この町にある実家のほうに戻っているのだ。

「とても、平和……」

今朝は起きた時に冷や汗びっしょりになるような悪夢を見たが、それに反して今日は平和だった。もしかしてあの夢は何かの予兆かもと戦々恐々としていたが、別に何も起こらない。基本、平和だ。カフェに行った時にも感じた平穏が、そこにあった。エレンのドジに対して身構える必要もない。エレンに教育を行う必要もない。貴族令嬢こうあるべしというような、ゆったりとした平穏だ。そう、あとは

「お嬢様。何かお考えはかしてですか？」

目の前にいる性悪さえいなくなれば、完璧なのだ。

「……リリア」

ティアは平穏をぶち壊しにしてくれたリリアをにらみつける。夢のような状態になったらそれはそれは心臓に悪いが、今のままでも十分タチが悪いメイドである。これぞリリアだ、という感じにいつも通りでちよつとほつとほつとしているが、それにしただっていつも通りにムカツとくる言動なのため、素直に喜べない。

「実家に、帰らないの？」

「もちろんでございます」

ティアの威圧なぞそよ風程度にも感じていないのだろう。肩口で切りそろえられた金髪揺らしながら、表面上だけは従順なメイドであるリリアは笑顔で答える。

「お嬢様をおいて一人帰るなど、とても私にはできません。お嬢様のホームがここであるように、私の帰るべきホームもここなのです」

「そう」

何とも聞こえのいい美辞麗句だ。メイドこつあるべしという忠誠を示している。

珍しく殊勝なことを言ってるが、リリアが実家に帰らない理由は簡単だ。

それを了解しているティアはことん、とソーサーにカップを置いて切り札を差し出す。

「ちなみに明日、アンジェラ姉さまがウィング男爵家からこつちに帰省するらしいんだけど」

「明日の朝一番に実家ホームに帰らせていただきます」

やっぱりこれがリリアだよな。そう思い、ティアはリリアの入れた紅茶をもうひとすりした。

本日は初代国王の誕生祭である。この日の王都では、年に一回の記念日を祝い、一週間を通してのお祭り騒ぎが繰り広げられる。

「エル。わたくし、大事なことに気が付きましたの」

そんな中、女王であるエリザベスは、天井と壁のないオープンで豪華な馬車に乗って、ゆつくりとパレードの中心を走っていた。麗しの女王を一目見ようと、通りの左右は熱狂する国民でいっぱいだ。

「何、お姉ちゃん……」

話しかけられたエルレインは、げっそりした声色で答える。

王家の一員として、ついでに護衛としての意味も込めて、エルレインは姉の隣に座っている。今ばかりはさすがにエルレインもメイド服ではない。きつちり大元帥としての軍服を着ているのだが……その可憐な容姿から、どう見ても女の子が無理に軍服を着て男装しているようにしか見えない。

その中で、ふたりは国民に笑顔を向け、手を振りながらこっそりと言葉を交わし合う。

「ボクはもう疲れたよ……砂に還りタイヨ」

ちなみに通常の軍務に加えてこの誕生祭のスケジュールを取り仕切ったエルレインは、そろそろ過労で死にそうである。ほんののところ、こんな女装もできないパレードには参加せずに寝たかった。

第一、護衛とはいっても、エリザベスとて軍神と大魔女の血をひいているのだ。魔女として生まれる王家女兒は、生まれつきの一騎当千な猛者として誕生する王家男児のような鉄壁な肉体は持ち合わせていないが、それでも、例えば狙撃されても皮膚が銃弾を跳ね返すぐらいには丈夫なのだ。そもそもお姉ちゃんが負けるとかないよ、なにも自分がわざわざ護衛に行く必要はないじゃない近衛隊がいるよてか可愛げの欠片もない軍服なんて着たくないよと、エルレインは訴えた。

そして、全部無視された。

「うっ……この際、メイド服でもいいから……お姉ちゃんの給仕に甘んじるから、かわいい服を着させてよお……ドレスを、スカートを……」

活力源である女装を取り上げられて、いつも以上に元気がなくなってしまうている。

だが、弟をいじめたくてしかたがないドSなエリザベスが、疲労困憊なエルレインに遠慮するはずもない。今も疲れ果てた弟の願望など無視して自分の言葉を続ける。

「エル。わたくし、結婚できますのね」

「……？」

今更な姉の言葉に、エルレインは顔をあげて疑問符を浮かべた。

もともと、エリオット、エリザベス、エルレインの王家三子の中で、結婚できるのは王位継承権を第一位を持つエリオットのみだった。それが、エリザベスが王位を篡奪することによって、エリザベスが結婚できるようになったのだ。

普段なら変態な王族への婚姻は遠慮すべきことだが、全国民の前で変態ではないと宣言したエリザベスだ。そのため、エリザベスのところには縁談の申し込みが殺到している。

「何？ お姉ちゃん、結婚したい相手でもいるの？ すればいいじゃん」

「そして、お兄様が結婚できなくなっていますのね」

「無視？ お姉ちゃん、無視なの？ 会話する気あるの？」

だが、その通りである。

王位を正式にエリザベスが継いだ今、エリオットとエルレインは結婚できなくなっている。

とはいえ、女装趣味なエルレインは、一切結婚願望がないから別にかまわない。もともと結婚できないのだし、それに対して恨み言を言う気はない。

「わたくし、自分の楽しみのために王位を奪い取りましたけど……この弊害に対しては何の考えも持っていませんでしたわ」

「そりゃ、お姉ちゃんはノリで王位を奪ったからね……でも、お兄ちゃんは結婚できないほうが良いと思うよ？」

兄に協力していた手前あまり言いたくないが、何せ『実の妹とも結婚できる法案』を密かに画策していた変態である。もし王位にいたら、エリザベスとエリオットが結婚していた、という弟としてあまり考えたくない可能性も、決してゼロではなかったのだ。

国民に迷惑をかけないという前提であつたなら、まあエリザベスが一番妥当なのかもしれない。

だが、エリザベスは、そんなエルレインのことをきつと睨みつけた。

「いいえ、これは『ティアのことをこつそり陰から見守り応援する会』会員NO.1にして会長であるわたくしとしては、由々しき問題ですよ！」

「え、なにそれ。ボク、そんな会、初耳だよ？」

「そうのです？ 結構な数の会員がいますのよ？」

主な会員は、王宮のメイドとかである。一部、ティアのファンな貴族の令嬢もいる。

「ちょっとボクもそれに入る……じゃなくて。何？ お姉ちゃん、そんな会を運営してるとか、実は暇なの？ 王女のころは別にいいけど、女王になったんだからもつと生活改めようよ。ていうか、仕事しようよ！ 今回の誕生祭のスケジュール運営とかさ！」

「暇じゃありませんわ。わたくしは日々、『ティアのことをこつそり見守り応援する会』の正体不明の会長として、ティアに関わることの情報収集という大事なことをやっているんですの」

その言葉を受けてエルレインは、もっと大事な問題があるんだけどなあ、国事に関わるものとか、とだけ思った。言葉に出さないだけの賢明さは持ち合わせているのだ。

「で、お兄ちゃんが結婚できないからって何が問題なの？ むしろざまみろって感じだけど」

「だって、このままですと、お兄様とティアが結婚できませんわ……！」

「うん。無理だね」

王家の決まりどうこう以前に、エリオットの性癖とティアの感情的に無理だ。

「わたくしは、ティアと家族になりたいと、常々思っていましたのに……。家族になって、対等な立場で話してみたいと思ってましたのに……。だからティアとお兄様にぜひとも結婚して欲しかったのですに……」

「あ、それボクもちよつと思つてた」

マシンな家族がほしいと、それがティアならば何の不足もないと、エルレインは日々切実に思っていた。ティアが王宮にいた頃のエリオットを見る視線を思えばなおさらである。ついでにティアの恋心に気が付かない兄には、死ねバーカこのシスコンの変態のカス、とたまに思っていた。

「でも、もう無理だよな」

あんな変態的暴露の場を見てしまったのだ。百年の恋もぶっ飛ぶような行為である。傍から見ててヤキモキするような、自覚すらし

ていなかったティアの初恋はあっさり冷めてしまったに違いない。全く、ティアを欺いていた兄は万死に値する。

「いいえ」

だが、不可能はないと豪語する姉の意見は、エルレインと異なつた。

「エル。あなたはティアのことをよくよく理解してませんわね」

「そっかな……」

「そうですわ」

釈然としないエルレインに、うふふ、と含み笑いをしてからエリザベスは告げる。

「わたくし、決めましたわ」

「なにを？」

「ちよつと頑張ることにします」

エリザベスは、ぐっ、と可愛らしく握り拳を作って決意表明をする。

「……………えつと」

勝手気ままな姉が、やっとやる気を見せてくれたのだ。姉の分の仕事まで請け負って言葉通り忙殺されかけているエルレインの立場からすれば、喜ぶべきことなのだろう。

だが背筋に、たたり、と冷や汗が落ちる。馬車の上から国民に向かって手を振る姉を見ていて、嫌な予感が、それはもう嫌な予感がしてたまらなかったが、なんとか言葉をふり絞る。

「が、がんばって……？」

王弟であるエルレインは、女王である姉に向かって『何をがんばるの？』とは、恐ろしすぎてとてもとても聞くことができなかつた。

ティアは、幸せに浸っていた。

ドジなエレンはいない。リリアも帰り支度で忙しいためティアにかまっている暇がない。その上、明日には大好きな姉の一人が帰ってくる。

「あの悪夢……何かの虫の知らせかとも思ったけど、やっぱり気のせいかな」

自分の勘も鈍ったものだ。そうつぶやいて、ティアは用意されたカップに口をつける。

しかし。

エレンもいなくなり、リリアが忙しくしているからだろうか。いつも世話をしている使用人が抜けたための不手際か、用意されたそのカップの中身は、ティアが飲む物にしては珍しく、紅茶ではなく

「……あれ？」

真っ黒な、ブラックコーヒーだった。

ティアの夢のような平穩が崩される日は、そう遠くない。

第九話 祭日という穏やかな時間が流れる日について（後書き）

リリアさんのセリフを考えるのがメンドクサクなってきた今日の頃です。けれどもティアについてお気に入りのキャラなので、書きたい気持ちは溢れています。でも、一番書きやすいのは、エルレインなんですけどね。いじめてりゃいいんだもん。

最初のところ、感想で頂いたご意見を軽く参考にさせていただきました。感想いただいて、うれしかったのです。活力と発想のものを頂きましたこと、改めてお礼申し上げます。

ここまで目を通してくださった方、お気に入り登録をしてくださった方、評価を入れてくださった方、皆様ありがとうございました。

第十話 呪詛という魔法に等しい悪意について

ところでティア嬢。人生とは、何で決まると思う。
生まれです、オスボーン閣下。
そう。あなたがそれを言うの？
はい。

あなたは、生まれより能力で評価された人間よ？
過大な評価がすぎます、閣下。それに、生まれがなければ能力は評価されません。

頑固ね。

申し訳ございません。ご不快を買ったならば、お詫びいたします。

いえ。いまの社会では、その回答で正解よ。けれども、あなたは今の社会が正しいと思う？

浅学なわたしには、到底答えかねます
そう。ならば、

人間は何で決まると思う？

アンジェラが、帰ってしまった。

姉の帰りを見送ったティアは、沈んだ面持ちで部屋にいた。彼女にしては珍しく、誰が見ても落ち込んでいるとわかるほど、表情を表に出している。

「……姉さま」

かなり姉、特にアンジェラになついているティアだ。仕方がないことなのだが、大好きな姉がいなくなってしまうのはだいぶ淋しい。それに、さらなる苦難が降りかかることが前もって予想されているのだ。

アンジェラがウィング男爵家に戻ったということは、まず間違いなく入れ替わりにリリアが戻ってくるはずだ。ティアからすれば、天使の入れ替わりに悪魔が送り込まれるようなものである。

そして、エレンの休日も、今日が最後だ。

それらは、ティアの平穏な日常の終了を意味している。

「はあ」

あからさまにため息を吐くが、うじうじしていても仕方がない。ティアは意図して気持ちを切り替え、ぐっと体を伸ばした。

「……うん」

最後の休日。窓の外を見てみれば、今日はよく晴れている。

「羽を、伸ばそう」

だから、ティアは久しぶりに街を出歩くことにした。

リリアがいなければ、ティアのお忍びを止められるような使用人はいない。

あつさり屋敷を抜け出したティアは、途中、古着屋で質素な服を飼って着替えた。そしてそのまま異人街へ。黒髪黒目のティアは、異人街に入れば周囲にあつさり紛れ込むことができるのだ。

異人街とは、そのまま異大陸の血をひく人間が集まってできた地区である。港湾都市ならではの街区ともいえる。生粋の異人もいるが、多くは二世や三世の、この都市で生まれた人間で、貧民街ほどではないが、低所得者の割合が多い。

ティアもここで生まれ、七歳まで育った。ティアにとってみれば、ある意味で故郷ともいえるかもしれない。他の地区を歩けばその黒い髪と瞳は周りから浮いてしまうが、ここではそんなこともない。ティアがほかのどこよりも落ち着く場所がここなのだ。

そうやって喧噪のなかを歩き、どこかの市場でも覗いてこようと考えていると

「なあ、ちょっとぐらいいだろ？」

そんな声がティアの耳に入った。

察するに、誰かからまれているようだ。言ってしまうはよくある

ことである。裏路地ならばともかく、こんな大通りで騒いでいるのだ。聞こえる限りでも、そんなに悪質なからみ方をしているように思えない。

ちらりと声のしたほうに目をやる。からまれている人のほうは男たちが壁になつて見えなかったが、最悪でも大事にはならないだろう。そう判断して関わらないように通り過ぎようとしたが

「す、すみませんっ。その、えっと、用事があるのでっ!」

その覚えのある声を聴いて、足が止まった。

嫌な予感を抱きつつも、振り返って確認すると、やはりだった。

「……おい」

意外性のないことに、からまれている女性がエレンだった。休暇中の使用人との出会いに、ティアは立ち止まって嘆息する。

「あの子は……」

うめきながらも、ティアはエレンがここにいる理由を考えてみた。

? ここまで自力で買い物に来たところで、からまれている。

? 買い物しようとして迷子になったところで、からまれている。

? 実は誘拐されていて、逃げるところを連れ戻されそうになっている。

「うん。とりあえず?はない」

確信を持ってそれだけ言える。そうそうない事態の?以上に?である可能性は低いだろう。

からまれながらも、そこにティアが通りかかるあたりエレンらしい。不良どもを引き付けたのは、エレンのぼわわんとした、いかにもちよろそうな雰囲気、ティアが通りかかったのは純然たる運だろつ。

「あ、あああの困ります。わたし、買い物に来ていて……！」

「いいじゃないじゃん」

「何なら俺たちが手伝ってやるからさあ」

「ちよつと失礼」

ティアは半ば強引に、男たちとエレンの間に割って入った。視線が一斉に集まるが、怯むようなこともない。イリヤ・オスボーンの時と比べれば百倍ましだ。臆さず割り込むことにした。

ティアの登場に、まずエレンがぱちくりと瞬きした。

「あれ、ティア様？」

「様とか言つな、この迷子」

お忍びの最中である。せっかく周囲にまぎれているのに、様なんてつけられて呼ばれたら台無しだ。

「え、え？ 何で迷子だってことまでお分かりなんですか？」

「見ればわかる」

不思議そうに聞いてくるが、推察するまでもなく明々白々の羊さんである。

だがティアの出現に戸惑っているのはエレンだけではない。むしろ、男たちのほうが動揺は大きかった。彼らからすれば、からみやすそうな雰囲気醸し出している、トロそうな女の子にちよつかいをかけてみただけである。そこに、予想外の上玉が釣れてしまった

状況だ。

ティアは、どう対応しようかと男たちにちらりと目線をやる。それだけで、男たちは一斉に顔を赤らめた。

「悪い。わたしたち、用事がある」

なぜ顔を赤らめる、といろいろ自覚が足りないティアは疑問に思ったが、気に留めることでもないので男たちにそう告げて、エレンの手をひく。こういう手合いは、まともに相手をするとは面倒なのだ。

「あ、ちょっと……」

逃すのには大きすぎる魚に、諦め悪く腕が伸びてきた。

払いのけるのは容易だが、無用な反感を買うだけだ。それをするりとかわして、ティアとエレンは人ごみに紛れた。

ここは港湾都市だけあって、市場の賑わいは他の都市と比べても盛況だ。特に異人街の市場には、この大陸の人間からすれば物珍しいものが多く売られている。かしこで、威勢のいい呼び込みの音が響いていた。

その中に、ティアとエレンはいた。

面倒な足手まといができてしまったが、このまま放っておくのも不安なので同行している。手を離すと何故かはぐれる未来予想図がやすやすと浮かんできたので、きっちりと仲良く手をつないでいる。そんな二人は知らぬ人からでは主従ではなく、ただの友人同士にか見ないだろう。

エレンは案の定買い物に来ていたらしかったので、ティアが近場の市場まで案内してきた。もともと寄ろうかと思っていたところである。

そこに到着して買い物内容を聞いたのだが

「なぜ、パンを買うだけなのに、迷うの」

「すみません……」

エレンがしょぼりしてうなだれる。

あまり一般的ではないコメを買いに異人街に入るのならばまだ理解できるが、パンならば市場に限らずあちこちで売られているはずだ。気合を入れてここまで連れてきてしまったのが気恥ずかしくなってしまう。

「あの。ティア様」

「何？」

「何でこんなところにいらっしやるんですか？」

先ほど買った長パンを抱えながら、エレンがおそるおそる、といった感じで訊いてる。

「お忍び。明日リリアに会っても、黙っておいて」

「ふひゃっ？」

リリアに知られたら、怒られることはないが嫌になるまでかわれる。ひよい、と面白半分でもりすがった時に買ったせんべいをエレンの口の中に放り込むと、面白い声を上げた。

「口止め料。おいしい？」

「何の味もしません……」

「どうやらお菓子付きのエレンは、お気に召さなかったらしい。悲しげな声に、懐柔は失敗かと肩をすくめる。」

「きちんとコメの味がする」

ティアも一緒になってかじりながら評する。昔はよく食べていたこの安価なせんべいを、ティアは結構気に入っていた。裕福な現在でも、見かければ無性に食べたくなってしまふ。

「それに粉っぽいです……」

「粉を固めて焼いただけだから」

「食べてるとノドが乾きます……」

「はい」

文句を垂れる口に、今度はそこらへんで買った干しブドウを放り込む。今度は何の文句もないようで、もぐもぐと咀嚼していた。

「ティア様は、いろいろご存知ですよね」

「そう?」

市場に連れてきて、適当に買い物をしたことだろうか。

この程度、そんなに珍しいことでもない。貴族の子弟などでも、たまに家を抜け出して下町の酒場などに顔を出すことだってある。

「ティア様」

「何?」

「わたし、何にも知らないんです」

「まあ……」

「口クにお使いもできないぐらい、役立たずです」

「……そうかも」

どちらも積極的に否定はできないので、消極的に肯定する。事実、五歳の子供でもこなせるような面白い物内容で迷子になったのだ。

「ティア様」

「うん」

「わたし、生きていてもいいんでしょうか」

思わず、立ち止まる。

だが、エレンの表情は暗くなかった。落ち込んでいる様子でもなかった。むしろ、きょとんとした顔で突然立ち止まったティアを見つめ返している。

ただ、当たり前のことを当たり前前に聞いている表情なのだ。

「……何で。そんなことを聞くの？」

「わたし、呪詛持ちなんです」

「……………」

話が、飛躍した。予測不可能な不意打ちを食らわせられ、思わず黙り込む。

「……ちよつとごめん」

一瞬かなり混乱したが、それをすぐさま立て直す。ティアは断つてからエレンの手のひらを取り、目立たぬように軽く雷を発生させた。

エレンと触れている手のひらからは、発電しなかった。

再度、ティアは黙り込む。

「……」

呪詛持ちというのは、神に呪われた人間の総称だ。魔法と同じように、親から子へと伝えられるものとされているが、実際あまり詳しいことはわかっていない。もともと少なかったのだが、一時期、呪詛狩りの運動があったため、いまでは神から直接恩恵を与えられた王族以上に希少な存在となっているからだ。今では根絶したというのが一般的な見方である。いま現在では特に規定はないが、すくなくとも歓迎はされないだろう。

そして、貴族であれば呪詛持ちの判別は簡単だ。彼らには一切の魔法が効かない。いまエレンに、ティアの雷が通じなかったようにだ。

それが何故か、と問われれば答えは単純だ。

曰く、呪われた身に、神の祝福は通じないのだという。

「確認、できました？」

「……どんな呪い？」

市場は人の流れが激しい。いつまでも立ち止まっただけでは迷惑だし、何より止まったまま会話をすると盗み聞きをされやすい。ティアは改めてエレンの手をひいて歩き出した。

「三代に一人、呪いを持って生まれます。本人には些細な悪戯程度の不運を、そして周囲にはそれ以上の不幸をばらまくような呪いです」

「……性格の悪い、呪い」

どうやら魔法と違って、一定の条件が付くようだ。三代に一人となると、ちょうど忘れた頃にやってくる。しかも、自分よりも他人のほうが不幸になるというのは、嫌なものだろう。

「それと、たぶん副産物か何かだと思っただけですけど、神様と精霊様
のことが、ちょっとだけ分かります」

理解の追いつかないことを言われたティアが、眉をひそめる。

「どういうこと？」

「あ、えっと。ティア様だったら、雷の精霊様に愛されているのが、
リアさんだったら風の精霊様に祝福されているのが、見ればなん
となくわかるんです。なんでかは……すみません、よくわかりませ
ん」

「へえ……」

呪詛持ちにそんなことができるなんて、初めて聞いた。一生口外
することのない知識だろうが、情報なんて何が役に立つかわからな
い。ティアは胸の内にとどめておいた。

「わたしが生まれた一年後に、祖父の商売が傾きました。父や母が
詐欺にかかったのも、成功して軌道に乗った、その矢先だったそう
です。両親は、というか家族の誰も、わたしが呪詛持ちなんてこと
は知りません。自分たちが、その家系だということを認識していな
いんです」
「そっか」

ティアは表情を揺るがせず、それだけ言葉に出した。

苛烈な迫害時代があったのだ。呪詛持ちだと隠すのは当然である。
百年以上たてば、その過程で自覚すら失くしていくのは自然の成り
行きだ。

そしてその状態では、エレンが己のことを家族に打ち明けること
はできないだろう。

「だから？」

だが少なくともその程度のことは、同情には値しない。事実、見ていればわかるが、エレンは不幸な人間ではない。不運な人生であっても、エレンはそれなりに生きてきたはずだ。今まで生きていき、自分の中でそれなりに消化していたはずの疑問のはずだ。

いまさらティアに聞くことでは、ない。まして呪詛持ちという、おそろしく不利になるような身上を明かした意味が分からない。

エレンは、うつむいて自分の足先を見つめた。

「ネルバの方に、言われました」

「オスボーン閣下のこと？」

「はい」

なるほど、と納得する。あの人、引きずり出したというなら納得できる。同時に、イリヤ・オスボーンが、王家の血をひくという噂が事実だということの裏付けがとれてしまった。ネルバというのは、北の帝国ユージニアの始祖とされる梟神の名前なのだ。

ユージニアの王家はそもそも神の子孫だということを疑問視されているのだが、想いもがけずにもものすごく重要な情報を拾ってしまった。そんなことを思いつつも話を促す。

「何を、言われた？」

「あなたは、自分がなんなのか知っていて生きているのね、と」

その言葉に。

エレンに対して、初めて純粹な怒気が湧いた。

たったそれだけか、と、ティアらしくもなく明確な怒りを覚えた。

「エレン。わたしは、オスボーン閣下との問答を、たまに思い出す」
「あの時のことですか？」

「そう。エレンも聞いていただろうけど、人生とは何で決まるかと問われ、わたしは生まれと返した」

例えばこの異人街に、異大陸の人間がなぜいるのだろうか。それは、彼らがその血をひいているからだ。ティアがなぜ七歳までここで過ごしたのだろうか。それは、ここで生まれたからだ。人生の選択肢は、生まれた時にあらかじめ絞られている。この社会が、そういう風にできているからだ。

「今の社会が正しいかと聞かれ、わたしはわからないと答えた」

それが正しいかどうかなど、ティアにとってみれば、どうでもいいことだった。

ティアは、人生において一度も正しさなどというものを重視したことはない。正しさというのは客観的なもので、ティアが重要視しているのは常に主観だからだ。

「ならば、人間は何で決まるかと質問された」

イリヤ・オスボーンに問われた時は答えなかった。ティアの主観を、あの時あの場で言葉にすることはできなかった。何より、あの時はただからかわれていたただだったから、答える必要があるとも思わなかった。

だが、今は違う。

「エレン」

まっすぐエレンの目を見つめて、呼びかける。

ティアは思うのだ。

例え神に祝福されていようと、その逆で、嫌悪の象徴として呪詛をかけられていようと、身分が貴族であろうと平民であろう、今の社会システムがどんな決まり事を謳ってみせようと、それでもティアは、確信している。

「人間は、生まれでは決まらない」

メデイチ家に拾われたのは、ティアにとって人生の大きな転換期だった。

そこには、貴族と呼ばれるにふさわしい、素晴らしい人がいた。けれども、貴族と呼ばれるクズも、そこら中に転がっていた。異人街にいた時と、人間の本质は何ら変わらなかった。

そしてやはり、ただのティアであった頃の自分と、ティア・メデイチとなった自分。どちらも大差があったとは思えない。

「だから、エレン」

ティアは、はぐれないよう繋いでいた手を離す。そして、目を怒らせ、怒気をはらまし、苛烈な、突き放すような口調で言い放った。

「自分という人間ぐらいは、人に任せるな」

ねえ。あなたは自分が何かわかっているの？

何か不幸にさいなまれていない？ 理不尽に覚えが悪かったりしない？ よく、悪意のある他人に目をつけられない？ 何か、周りに不運がふりかかったりは？

ああ、全部承知の上なのね。私に気が付いたということは、そういうことだものね。だって、あなたは。

あなたは、自分がなんなのか知っているくせに、生きているのね？

能無しに生まれて。

努力がほとんど報われないと知っていて。

悪戯のような不運に見舞われることがわかっていて。

そのくせ、自分以上に周りを不幸にすることを決められて。

それなのに自分が生きるのは、あまりにずうずうしくはないかと。

彼女に言われるまでもなく、ずっとずっと、物心ついてから今まで、絶えることなく思っていた。絶望するわけでもなく、ただ当然の疑問としてエレンについて回っていた。

けれども、その疑問が、今日、解消された。

「ネルバのご息女様。わたしは生きてもいいらしいです」

ひっそりと、それでも頬をほころばせてつぶやく。

嬉しかった。そう。結局のところ、自分は生きたかったのだ。両

親を、祖父を不幸にしたのはきつと自分が原因だというのに、それでも自分は生きたかった。

けれども自分はそう思っていて、他人からどう思われるかが心配だった。

おそらく、ティアに死ねといわれれば、エレンは死んでいた。自分の生きる価値をかけらも見いだせず、生きたくとも、どこか死にたがっていたのだから。

だから、ティアのような主人に巡り合えて、とてもとても、自分は幸運だ。

「ありがとうございます、ティア様」

神に呪われた身だけれども。

エレンは、両手を組んで祈りをささげる姿勢でそう言った。

夜明けとともに目を覚ますティアの朝は、この屋敷の誰よりも早い。

「お嬢様」

使用人の誰よりも早く起きたティアが、一人で着替え、身支度を済ませて部屋でくつろいでいると、リリアが来た。

「おかえり。休暇、どうだった？」

エレンが遅れてくる代わりにリリアが来るのは珍しくもない。それ自体は気に留める位ことでもないので普通に声をかけ、ティアはぎくりと固まった。

リリアの表情がおかしい。珍しく笑顔ではない。神妙な顔をしている。

悪夢が、フラッシュバックした。

「……………りりあ」

急激なストレス負荷から意識が一瞬かすんだが、それでもティアは何とか言葉をひねり出した。

「結婚するとか言わないよね」

恐々として問いかけるティアに、しかしリリアはいつも通りにつきり笑った。

「質問の意図が理解できませんが、寝不足とほですか？」

「どうやらいつも通りらしい。」

「よかった……………。で？」

「はい」

よかったはよかったが、それでも暴言を吐かれているのは変わらない。ティアはエレンをぎろりと睨みつける。

リリアは、また至極真面目な表情に戻った。どうやら本当に重要な話らしい。

「急な報告になります、申し上げます」

リリアはそのまま頭を下げ、あくまでも事務的に、淡々と報告した。

「エレンが自ら仕事を辞して、この屋敷を出ました」

昔話 ティアという女の子について

ティアが六歳の時に、母が死んだ。

ティアは、異大陸のから来た異人の三世だ。一昔前にこの大陸で流行った茶の貿易で成り上がるうと移民をしてきたらしい。結局は失敗して、異人街の片隅で工場労働者として一生を終えた。祖父と祖母はティアが二歳の時に亡くなったらしい。

その子供である母は、評判の美人だった。知り合いの老夫婦の好意で、茶屋で雇ってもらっていたが、彼女を目当てにしてくる客も多かった。

父について、母がティアに話すことは、ついになかった。だが、母が望んでティアを産んだのではないということは、幼いながらなんとなく理解していた。私生児、と。その単語を聞かされたのはいつだっただろうか。その意味を理解したのはいつだっただろうか。なににせよ、そう言われるのは、自分が母から愛される資格がないと周りから知らされたようなものだった。

母が死んだとき、ティアは泣かなかった。

悲しくなかつたわけではない。胸の内をくりぬかれたような喪失感にも襲われた。涙をこらえるようなプライドを持つ歳でもなかった。

それでも泣かなかつた理由は、ティア自身にもよくわからない。単純に、母が死んだという現実を認められなかつただけなのかもしれない。

ただ、母の死の床でティアはひとつの言葉を繰り返していた。

ごめんなさい。

重荷になつてごめんなさいと。自分がいなかったら、美人だった母はきつと幸せになれたのに、ごめんなさいと。生まれてきて、ごめんなさいと。

謝り続けるティアに母は苦笑して、最期の言葉を残してくれた。それは、ティアの人生において宝となる言葉になった。

それからティアは、老夫婦に引き取られた。とても幸運だったのだと思う。両親を亡くした孤児が、路地裏でひっそり死んでいくようなことに誰も気を留めないような時世である。救貧院や孤児院に入れられたとしても、その生活が悲惨になることは想像に難くない。それから一年、ティアは慎ましくも従順に生きてきた。ただ老夫婦のほうは、子供らしくないティアに、ちよつと戸惑っていたかもしれない。もしくは、まったく笑わないその無表情に過剰な心配をしていたのか。ティアと彼らの間には、家族というにはほんの少し足りない隔たりがあった。

そんなティアには、誰も知らないことではあったが、ちよつとした特技があった。

雷を発生させられるのである。

昔にそれを母に自慢したら、決して人には話すなど、珍しく恐い顔で言いつけられた。母が死んだ今では、遺言の一つとして固く守っている。

それでもティアは、あの、ぱちり、ぱちり、という音が好きだった。だからこっそり、人目につかないようにして雷を鳴らすことはやめられなかった。

だから、買い物に出たその日の道ばたで、きつと誰も見ていないだろうと思つて。

ティアは、軽く、指先で雷を鳴らす。

ばかり、という小気味よい音が響いた。

その音に、アンジェラ・メディチはぴくりと反応した。

その日のアンジェラはとても上機嫌だった。彼女は気分が落ち込む日というものがほとんどない人間だが、それでもいまこの時はいつも以上に上々な気持ちだった。

人生の大体をノリで生きているアンジェラだったが、気分が酔いにはもちろん理由がある。

今日はよく晴れていた。部屋に閉じこもっているのはもったいない。そう思って、刺繍の授業をさぼることにした。とりあえず、怒涛の勢いで家庭教師の女性を説得、および懐柔。町へと出ることにした。

けれども外出の際、一人ではさびしい。ようしせつかくだから友達と一緒にいこうと使いの人を出してみたら、慇懃な返答が来た。

否、と。

だがそこは社交界でも無敵の天然娘と謳われるアンジェラ。その程度では諦めず、いつもアンジェラに対して『寄るな来るな話しかけるな』という、刺々しいオーラを解き放っている友人に自ら直接会いに行き、渋る彼女を引っ張り出すことに成功したのだ。

そうして一緒に町をまわることになったのだから、うれしくって仕方がなかった。そのためアンジェラは、いつも以上に高いテンションで馬車の横の席に座っている友人に話しかけまくっていた。

その時に、ばかり、という音が聞こえたのだ。

届いた音量は、針を落としたようなかななものだったが、アンジェラは聞き逃さなかった。それは彼女にとって、よく聞き覚えの

ある音だったのだ。

一方的にしていた会話を「ちょっとごめんね！」と、やはり一方的に打ち切ってアンジェラは窓から音のしたほうを探した。その奇行に対する友人の反応だが、もとよりアンジェラの話など右から左へ流していた彼女は、非常に都合がよさそうだった。

アンジェラは彼女にしては珍しく真剣な表情で、窓から通りを見渡す。

その視線が、ふと、ある女の子に止まった。

黒髪黒目の、異人の女の子。

「あの子だ」

その断言には何の根拠もない。勘だ。

だが何よりも自分の勘を信じて生きるアンジェラは、迷わず馬車の扉を開け放った。

「ちょっとそこの女の子！」

走行中の馬車の扉を開くなんて、危険極まりない。だが、アンジェラはかまわなかった。まだ車輪の回転を止めない馬車からドレスの裾を、ぎりぎり舌に穿いているドロワーの見えない範囲ではためかせ、飛び降りた。

ちなみに馬車に残っているアンジェラの友人は、この人いつそのまま死んでくれないかなという目をしてアンジェラの危険行為を見守っていた。

「捕まえた！」

「……え？」

その勢いのまま、あろうことかアンジェラはその女の子に抱き着

いた。ぶつかつた勢いは十分危険なレベルだったが、押し倒したりはせず、アンジェラは少女を抱きしめたまま器用にくるくる回つて力を逃がす。ダンスの基本だ、と淑女みたいなことを言ってみたいが、これは姉からいろいろ仕込まれている成果である。

「ふっふっふ。逃がさないぞー？」

「え？ え？」

アンジェラは捕まえた女の子を逃がすかとばかりに、親愛を込めてぎゅっつと博愛固めにする。

女の子が呆然としている間に、遅まきながらも止まった馬車からアンジェラの友人、リリア・ウィングが出てきた。

「何をしてるんですかアンジェラ様。危ないじゃないですか」

台詞とは裏腹に、ちっとも心配していなさそうな棒読みで近づいてくる。歩くたびに揺れるきらきらさらさらな長い金髪が相変わらず綺麗だなーと思いつつも、アンジェラは、つんと唇を尖らせる。

「もう、リリアちゃん。いつも通りにアンシーって呼んでよ」

「そんな風と呼んだことは一度もねえですよ、アンジェラ様」

義務感九十九パーセントでアンジェラに付き添っているリリアは、苛立ちが限界突破しかけて微妙に敬語が崩れかけている。リリアからすればそれは反発心の表れだろうが、アンジェラはもっと気安く話してほしくてますます調子に乗る。

「そんなー。なんだかんだで外出に付き合ってくれてるじゃん。仲良しじゃん、わたしたち！」

「付いてきたのはおごりだって聞いたからですよ。服を一緒に見て

回れば買ってくれるって言ったからですよ。貧乏貴族を舐めないでください。簡単に金で釣れるんですよ。なにせお金欲しさに娘を商人のところ嫁がせたくらいですからね、ウィング男爵家は」

「それリンデイスさんのこと？ でもリンデイスさん幸せそうだよ？」

「だからますますムカつくんですよ、あの姉め……。結婚前はぐちぐちしく鬱陶しかったのに結婚した途端嬉しそうに……。それよりその小汚い小娘から早く離れてください。せっかくのドレスが汚れますよ。それ高いんですからね」

「む」

アンジェラは、小汚い呼ばわりされた少女を、ぎゅっと抱きしめる。こんな可愛い女の子に向かって、なんてことを言ってくれるんだろう。

「リリアちゃん、デリカシーがないよ。それにこれ、お忍び用のドレスだから大したことないもん」

「ちっ。これだからブルジョワは」

ものすごく忌々しそうにリリアが舌打ちする。ストレートに本音を出すことのない彼女だが、お金のこととなると、こうあからさまに嫌悪を示すことが多い。

「それが一着いくらすると思ってるんですかね……。こっちはたまに自力でドレス縫ってるって言うのに。少しはお針子さんの苦勞を知れっというんですよ、全く」

「ねえ。それよりこの子！」

「そもそも馬車出しとお忍びとかのたまう精神が理解できませんよ。なんですか？」

「魔法が、使えるんだよっ。しかも、雷の！」

「あり　いえ」

ありえませんが、と否定しかけたのだろうか。リリアは口を開けたが、途中で思い直したように閉じた。

「なるほど、あの脳みそ下半身なら確かに……おっと失礼しました」

リリアがすっかりこぼれた失言に口を抑える。すっかりというか、たぶん、わざとだ。

「アンジェラ様の父上でしたね。まあ、あれなら隠し子が一人いようと十人いようと驚きませんが」

「違うよりリリアちゃん。アレはもう父親じゃないよ。メデイチ家から勘当されてるもん。それより乗って乗って。おじい様に紹介するから」

「……？」

「アンジェラ様。……もしかしてその子供、連れて行く気ですか？」

ものすごく嫌そうな顔で聞いてくるリリアに、アンジェラは名前も知らない女の子を馬車にあげながら輝く笑顔で頷いた。

「もちろん！」

リリア・ウィングはそれはもう不機嫌だった。

リリアはそもそもアンジェラのことを苦手である。その侯爵令嬢に、権力を背景にしたパワハラで連れまわされるのだけでも苦痛だ

というのに、加えてこの事態である。

リリアは、アンジェラが連れ込んだ少女にちらりと目をやった。何が楽しいのか、アンジェラはその少女を膝に乗せているのだ。嫌でも目に入る。

「……………」

無表情で、一言も口を利かない。顔立ちは幼いながらも整っているが、同時に子供らしくもない様が可愛げをさらに減らしている。もともと可愛げ溢れる人間は基本的に苦手とするところなので、それ自体はかまわない。

だが。

問題はそういうことではないのだ。リリアは内心でため息を吐いた。

雷の魔法を使ってみせたというなら、確かにこの少女はメデイチの血をひいているのかもしれない。

だがこの髪と目。

メデイチの血をひいているというならば純血の異人であるはずがない。おそらくはハーフなのだろうが、あまりに異大陸の血が濃く出てしまっている。

異人の象徴であるような、黒髪に黒い瞳。

社交界は、娯楽に飢えた俗物どものたまり場だ。もしこの少女がメデイチ家に来たとしても、それが彼女のためになるとも思えない。格好の話ダネとして、陰で、時には面と向かってさんざん笑い話の槍玉に挙げられるだろう。

少女自身も、そしてメデイチ家そのものも。

「……………本当に連れて行くんですか？」

リリアは再度尋ねる。

おそらく、この少女個人にとつてもメデイチ家全体としても、何の益もない。むしろ、両者ともに不幸になるだろう。それを承知しているのかと尋ねたのだが

「うん！」

何にも考えていなさそうなツラで元気いっぱいに頷いてくれた。

「……それだつたらもう何も言いませんが」

この侯爵令嬢の一番扱い難いところはこういうところである。行き当たりばつたりなくせに、彼女は何故か物事を間違えない。失敗もするが、最終的には正解するのだ。何とすべきか幸せになることを決めつけられている、とでもいえばいいのか。

おかげでアンジェラの意見には論理的な反論できないため、やりづらくて仕方がない。

「知りませんよ。何言われても」

「大乘だよ。うち、そんなの気にする人はいないもん。……そりゃ、リアちゃんは社交界とか嫌いだろうけどさ」

「ありがとうございます。アンジェラ様のおかげで、あそこが大嫌いという気持ちに正直になれましたからね」

いまはもうシーズンになつても社交界に顔を出すことはやめて引きこもりになっているリアだが、本来は貴族の娘らしく生きる覚悟はできていたのだ。実際、自分の性格を押し殺し、笑顔の仮面をかぶつて、一年ほど何の問題もなくご令嬢の方々と接し、ご子弟方を適当に見繕うような生活を続けた。

そんな折に、この侯爵令嬢に出会つたのだ。

いまでもその時のことははっきり覚えている。

初対面の日、礼も作法も仕草も表情も、一切非の打ちどころのない完璧な挨拶をして見せたというのに、アンジェラといえばそんなリリアを指さして一言「そのウソ笑顔、キモチ悪いよ?」と、ぴかぴかの笑顔で指摘してくれたのだ。

大恥かかされたおかげで、ありとあらゆることが一気にバカらしくなった。

アンジェラに指摘されて、気づいてしまったのだ。自分を押し殺して生きる必要があったのか、と。所詮落ち目の男爵家次女の自分が、そうまでして貴族である努力をする必要があるのか、と。

答えはNOだ。いくら考えてもそんな自分を納得させられる理由の切れ端すら見当たらなかった。だから辞めた。それだけだ。

この太平楽な侯爵令嬢とは、それ以来の腐れ縁である。リリアからコンタクトを取ることはない。しかし何を気に入られたのか、社交界に出ることもなくなり引きこもり気味になったリリアをことあるごとに引つ張りだそうとしている。

リリアにとってみれば、おそろしく邪魔である。

「でもリリアちゃん。社交界に出なくって、将来どうするの?」

「どこかでメイドでもやります。理想は王宮ですかね。知る限りで、一番給料が良いので」

ウィング男爵家には、使用人を雇うような余裕は存在しない。そのため、リリアは掃除洗濯炊事をこなせるようになっていた。趣味に至っては、紅茶を淹れることである。メイドをやる時にはそれなりに役に立つ経験だろう。

「少なくとも、実家を喜ばすような政略婚はしたくないですね」

リリアの答えを聞いて、アンジェラは目を輝かせて身を乗り出してきた。

「ね、ね。それだったらうちに来ない？ おじい様に言つて、お給金弾むから。そんでもつて、わたしのレディースメイドにならないっ？」

「そうですね。アンジェラ様がどこか余所へお嫁に行つたら、メデイチ家への奉公も考えます」

「わたしいないじゃん！ 意味ないじゃん！」

「それ以上に意味のあることなどありません」

そんな風に話している間中、アンジェラに抱えられたままの少女はずつと無言だ。口をきけないのか、と思つてしまふほどである。

なんとなくその少女を眺めてみるが、しょせん自分には関わりないことなのでどうでもいい。動揺のないその目が余りに子供らしくなく、ちよつと気に食わないだろうか。だが、もつと気に食わない侯爵令嬢がいるのでその程度のことには気にならない。

とりあえず、リリアはアンジェラに指摘した。

「どうでもいいんですがアンジェラ様。いまあなたがやっていることは誘拐以外の何物でもありませんからね」

「うそお！？」

ウソではない。当たり前のことだが、道ばたにいた子供を保護者の了解なく連れまわすのは立派な犯罪だ。

だが実行したのはリリアではないから別にいいだろう。リリアだつてきちんと止めたのだ。けれども、侯爵令嬢が駄々をこねれば、男爵令嬢でしかない自分が止められるはずもない。それを証言をしてくれる目撃者には御者がいる。メデイチ家の使用人は侯爵の訓戒が行き届いており平等なので、リリアに罪をかぶせてくるようなことはしないだろう。

「ま、いいんじゃないですか？ メディチ侯爵の後ろ盾があれば、警察だってそうそう手を出してきませんよ」

自分の潔白を立証しているリリアは、無責任に言い放つ。

「そういう問題じゃないよ！」

「そうですね。どうでもいい問題でしたね」

かましい二人と、ずっと無言の一人の少女。

それを乗せた馬車は、もう間もなくメディチ侯爵の所有する屋敷にたどり着く。

メディチ家の長女、クリアフィメ・メディチは意志の塊のような、苛烈な女性だ。

強情で、強靱で、何より不屈。男相手にだってひくことを知らない。いつだって社交界を焼き尽くさんばかりの熱を放ってドレスをまとっている彼女は、一部に崇拜され、大部分から非常に嫌われている。あまりの気の強さから、きつと一生結婚できないだろうと陰でささやかれているのはご愛嬌だ。

そのクリアフィメは、妹を睥睨していた。

常識知らずの妹のアンジェラとその被害者のリリアが、異人と思しき少女を屋敷に連れてきという連絡を受けたからだ。

妹が騒ぎを起こした場合、処理するのは大抵クリアフィメである。急ぎ玄関に駆け付けた彼女は、勝手してくれる妹をたっぷり五秒間ねめつけた。アンジェラは特に恐れた様子もなくにこにここのんびりした笑みを浮かべている。

「アンジェラ」

「何、お姉ちゃん？」

怒気を込めて名前を呼んでも怯まない。アンジェラは、この姉とは生まれた時からの付き合いなのだ。怒られるのに慣れてしまっている。

だが、クリアフィメもアンジェラが生まれてから世話している。妹の奇行にはそこそこ慣れている。猫を拾ってこようが野犬を引き連れてこようが大蛇を屋敷に入れ込もうが今更驚かない。

しかし、である。

「誰よ、その子？」

さすがに人間を拾ってくるのは許しがたい。

クリアフィメが視線を下に移せば、そこには七歳ぐらいの少女がいた。ちんまりとした可愛い女の子だ。おそらく異人だろうその黒髪黒目の少女は、いきなり連行されたのだろう。かわいそうに、緊張からか、うつむいていて一言もしゃべらない。

理由もなくこんなことをしでかしたというなら、久しぶりに叩きのめしてやる。その意思を込め、クリアフィメは社交界でも畏れられる灼熱の瞳でもって妹をにらみつけたのだが

「新しい妹だよ！」

思わぬカウンターに、ぐらりとクリアフィメの体が斜めにかしいだ。体というより、心の一部が傾いた表れだった。

「……………いま、なんて言ったのかしら？」

「だから、妹なんだって。わたしたちの！」

「……」

再度の主張にクリアフィメは頭痛をこらえるように額を抑えた。真実、頭痛がし始めた気がする。

妹が、どんな経緯で見つけ出したのかは知らない。

だが、この妹が見つつけ出して、ここまで自信満々に言い切るといふならばそれは真実なのだろう。残念ながらこの妹には、嘘を吐くだけの知恵もないのに余計なことばかり掘り出してくることにかけては天賦の才がある。

そして今回のそれは、元父親のどうしようもない不始末を意味していた。

「……アンジェラ。私、ちょっと出かけてくるわ」

それだけ言い残し、クリアフィメはふらりと歩き始めた。

「とりあえず、その子はおじい様と会わせてあげなさい。以降の扱いは、おじい様に一任するわ」

「はい！」

「あの、クリアフィメ様。どちらへ？」

のんきに手を挙げるアンジェラと違って、リリアがわずかに不安そうな顔で聞いてきた。彼女は、アンジェラの友人にしておくにはもったいないほど物事の機微が読める。

クリアフィメは立ち止まらずに答える。

「聞き出すついでに、もいでくるわ」

『どこに』という問いに対して『何を』という答えで返す。何を、ましてや誰の、などというのは言葉にはされなかったが、リリアに

はクリアフィメの怒りの熱がひしひしと伝わった。

「……」

「いってらっしゃい！」

「……？」

クリアフィメの言葉の意味をよくわかっていない少女は首を傾げ、その意味を承知したリリアは顔をひきつらせて、アンジェラは元氣よく姉を見送った。

ティアは困惑していた。

傍から無表情で落ち着いているようにしか見えないが、実際はかなり混乱していた。

突然馬車からぴかぴかのお姉さんが出てきただけでも、七歳の子供が思考停止するには十分な事態だ。その上、明らかに貴族と思しきそのお姉さんが自分を抱きしめた挙句、馬車に連れ込んだのだ。そして、自分には一生縁がないような立派なお屋敷に連れてこられた。

その中で、ティアは考えた。

よくわからないけれども、何か悪いことをしただろうか、と。考えて考えて、必死に自分の失点を探して、ふと気が付いた。

ああ、母との約束を破ってしまった。雷を他人に見せてはいけな
いといわれていたのに、ばれてしまった。

それなら仕方がない、とティアは諦めた。きっとこれは母との約

相変わらず無言のままのティアの代わりに応えようとしたアンジエラが、笑顔のまま固まった。それはそうだ。目の前のお姉さんはティアの名前を知らない。聞いてこなかったのだから、ティアは答えなかった。

痛いばかりの沈黙が続いた。

いたたまれなくなつて、ティアは初めて口を開いた。

「……ティア」

「そうか」

やはり無表情のままつつむいているティアに、気を悪くした様子でもなく言った。

「何であれ、家族が増えたのだ。アンジエラ、よくティアを見つけたな。ティアよ。お前に会えて、良かった」

それは何気ない言葉だった。

なんてことのない言葉だった。

けれどもそれは、まっすぐティアの胸をついた。

「……あ」

唐突に、涙がこぼれた。

ぼろぼろと、頬を伝って顎先まで滑り落ち、落下した。

「え、ちょっとどうしたの？ あ、もうっ。おじい様、なに女の子を泣かしてるの！」

「む。わ、わしのせいか？」

ティアはぼろぼろ泣いたまま、言い合う二人の勘違いを直すこと

もできなかった。言葉も出せないほどにぐちゃぐちゃで激しい感情が吹き荒れていた。いまので、母の背後の言葉がよみがえったのだ。母は、最期にこう言い残してくれた。

誰に何を言われようともね、ティア。私はあなたに会えて、良かったわ。

たったそれだけのことだったのだ。自分は、生きてもよかったのだ。周りに振り回され、たったそれだけのことを疑問に思っていた自分が腹立たしかった。母から与えられていた愛に疑念を挟んで自分の愚かしさが、どうしようもなく憎たらしかった。

その母は死んだ。とても悲しかった。自分を、ただ無償で愛してくれた家族はいなくなってしまった。とてもさびしかった。

けれども、母と同じことを言ってくれる人がいる。

「かぞく、なんですか？」

涙を流しながら尋ねたティアにまだ言い合いを続けていた二人は、慌ててこつちを向いた。

そして、ぴたりと動きをそろえて頷いた。

「うん！」

「うむ」

その言葉に、嬉しいのか、悲しいのか、やっぱり嬉しいのか、まだ幼いティアにはよくわからなかった。

だからティアは、やっぱり泣いた。今度は、声を上げて、みつともなく、何より子供らしく泣いた。泣くことで、訳の分からないほど激しい感情を吐き出しながら、自分でも知らないうちに決意していた。

「わた、しも」

何分泣いていただろうか。いつの間にかティアはアンジェラの胸にすっぽり包まれ、彼女に縋り付くようにして泣いていた。

そんな状態で、ときれときれ、しゃくり上げながらも、ティアは母には伝えられなかったことを言う。

「あえて、よかったです」

今度こそ、周りに惑わされず、家族を、大切な人を、自分を愛してくれる人を愛して生きていこう、と。

ティアは、幼いながらにしてそういう人生を選択した。

昔話 ティアという女の子について（後書き）

サブタイトル通り、まんまティアの過去話です。本編より十一年前の話。それぞれの性格がやや違うので補足します。蛇足でもあるので、斜め読みをしてください。

・ティア。七歳。ようやく一人歩きができるような年。利発な子供だけど、自己主張は弱いので、ずっと無言。無表情の弱気っ子です。

・リリア・ウイング。十四歳。反抗期なので、家族が嫌いです。けどまだ子供なので、大人になった時に比べて色々と素直。この時はたまに会うぐらいの頻度だったので、アンジェラと接するのはまだ大丈夫でした。

- - - - -

こっからは完全についてです。

・アンジェラ・メディチ。十四歳。思春期なので父親が嫌いです。この六年後にリリアの兄と恋愛結婚します。その時メディチ侯爵はかわいい孫娘の結婚を阻止せんと邪魔しましたが、邪魔されたがゆえにアンジェラは家出します。そして、アンジェラが来たがゆえにリリアは男爵家から逃げ出しました。

・クリアフィメ・メディチ。十八歳。思春期も反抗期も終わらせていますが、そういうの関係なく父親が嫌いです。母親のことも嫌いでしたが、四年前に亡くなった人のことを何か言っほど悪意のある

人ではありません。

強気のあまり結婚できないといわれつつも、なんだかんだで他国の大貴族と結婚します。侯爵は当然のように邪魔してきましたが、その魔の手は彼女自身の手ですべて蹴散らされました。そしてこの人はきつともう登場しません。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

え？ 弟？ なにそれ知りません。そのうち名前だけでも出てくるんじゃないでしょうか。

第十一話 主人という部下に対する強権の持ち主について

自分を、自分で決めろと言ってくれた人がいた。

その人には珍しく、怒ったような、突き放すような言葉だったけれども、自分を認めてくれたそれがうれしかった。

だから。

そんな人を、自分の不運には巻き込みたくなかった。

リリアは下げられたエレンの頭をじっと見下ろした。

誕生祭の終わった次の日のことである。遅刻常習犯が、珍しくも朝早くにリリアのところに来た。リリアが仕事に取り掛かるよりも早くのことで、おや、今日は雨ですかねと天気が心配になったが、残念ながらそんな軽い話ではすまなかった。

エレンは話を終えると同時に、深く深く頭を下げた。

「辞める、と」

先ほどエレンから申し出された願いを、リリアは繰り返す。

「はい」

何の前振りもない辞職願ひ。それがどれだけ相手に迷惑をかける礼を失した行いか、承知しているのだろう。エレンは先ほどから一度も顔を上げていない。

とはいえその程度で許されることでもない。

「突然ですね。迷惑だと、わかっているでしょうに」

「はい。申し訳ありません」

軽く責めてみたが、それでもその声は頑なだった。

少しつづいたくらいでは決意を翻す気はなさそうだ。リリアはその時点で、引き留めるといふ選択肢を捨てた。

「理由は何ですか？」

「ティア様に、これ以上は迷惑をかけたくないんです」

「迷惑、ですか」

はたしてどれのことを言っているのやら。割った食器のことか、汚した絨毯のことか、焦がした壁のことか、それとも客にぶつけた茶器のことだろうか。

（まあ、あの時は大変愉快でしたが）

エレンの過去の失態を挙げつつ、軽く思い出し笑いをしつつも、もちろん、そのどれでもないことぐらいリリアもわかっている。

（『ティア様に』ですか）

リリアは先ほどのエレンの発言を胸の内転がす。他人に、でもなくお屋敷に、でもない。あくまで『ティア様に』迷惑をかけたくないのだという。

エレンとティアの相性が良いだろうとは思っていたし、その予想は外れなかった。

だが、思った以上にエレンは脆弱な精神をしているらしい。

どうせどうでもいいことに対して、変な責任感を感じているのではないだろうか。

(所詮、お金とお金の関係と教えたんですけどね)

そんなことを考えてしまうあたり、精神の耐久度の問題ではなく、どちらかといえば性格の問題なのかもしれない。

雇った時にはあまり危惧していなかったが、人が良すぎるというのも考え物か。仕事に対し、情熱を持つのはいい。けれども、仕事相手に対して必要以上に感情移入をするのはいただけない。だからよくよくそう教えていたつもりだったが、どうにもその訓戒は行き届かなかったようだ。

「そうですか。辞めたければ、それもいいでしょう」

リリアは無理をしてエレンを引き留めようとは思わなかった。辞職の理由を詳しく探る気もない。どんな訳があるうとも、やる気もなくした人間を雇おうとは思わない。ついでに、エレンをやめさせても大して穴が開いたりはいらない。ティアが少しさびしがるかもしれないが、その分からかってやろう。

リリアは先のことを考えながらも、形式上の問答を続ける。

「しかし辞めたとして、これからどうするんですか？」

「……あ」

試食を許可する前提のリリアの問いに、エレンはいま気が付つきましたとばかりに顔を呆けさせる。

やれやれと肩をすくめる。やはり勢いで決めたのか、身の振りかたを整えないで辞職を申し出たらしい。

ほつといてもリリアの責任ではないが、このままの娼館に行かれないのたれ死んだりされればさすがに目覚めが悪い。

「一筆、推薦状を書いておきます。一応、私の実家も貴族ですから。困窮しているので、給金はここと比べると劣りますが、ないよりましでしょう?」

「い、いいんですか!」

「賤別です。それに絶対に雇ってもらえるかは確約しません。そこはあなたの努力次第です」

「いえ、ありがとうございます!」

涙で目を潤ませながら感謝されるが、リリアとしては親切だけでそう言ったわけではない。親切心がないわけではないが、それはせいぜい半分ほど。残りは

(アンジェラ様が、この娘の粗相ドジで少しでも苦勞いたいめみれすればいいんです)

と、そんな個人的な気持ちだ。

まあ、あまり期待していませんが、と内心でこっそり付け足して、リリアはエレンの辞職を許可した。

その決定が、自らを地獄につい落とすなどとは、露とも知らずに。

エレンの辞職はリアからティアに伝えた。エレンが推薦状を受け取ってすぐにそちらに向かってしまったからだ。

ティアは、エレンの辞職を聞かされても一切動揺しなかった。ただ一言。

「理由は？」

と、問いかけてきた。

たぶんごまかしは効かないだろう。ティアは自分へ向けられる感情には鈍感だが、物事の機微を読み取るには優れている。

「迷惑をかけたくない、と」

いつもの笑顔の裏でそれを半ば悟りつつも、エレンの意思を尊重し、一部を抜いて台詞をそのまま伝えた。

「そう」

だがティアはその一部が何か察した。

ティアが頷く様子を見てリアはそう考えたが、実は違った。

というか、そもそもさっきの質問はそういうことではなかったのだ。エレンが辞職したということを知った時点で、ティアはもうその理由など察することができていた。事情の張本人であるティアがわからないはずはないのだ。

「リリア」

ずっと、ティアの眼差しがリリアの笑顔の仮面を貫く。

「だが、エレンの辞職理由なんて聞いた？」

ちりり、という熱がリリアの肌を焼いた。クリアフィメが社交界を渡り歩いていた時に放っていたのものによく似ている。

あ、やばい、という危機感がリリアを襲った。本家本元の熱量には及ばないが、さすが姉妹というべきか。人ひとり焼き尽くすには十分だ。

ティアはエレンの辞職理由を最初から知っていた。だから『理由は？』という問いはエレンについて向けられたものではない。

先ほどの質問は、リリアへの攻撃の前哨だ。

「と、いいますと……」

「リリア。何で、エレンを辞めさせた？」

「私が辞めさせたわけではありませんが……」

リリアはなんとか焼き殺されないように逃げ道を探すが、無駄だった。

ティアが本気になれば、舌戦においてはリリアですら敵わない。

「エレンは、わたしのレディースメイド。ようするに、わたしの専属。リリアの一存で、わたしに何の知らせも寄こさないでエレンを辞職させてもいいと、思ってるの？」

「……」

言い逃れをしようとしていたリリアだが、四方をふさいだ正論に

口をつぐむ。

いまのティアは無表情である。より詳しく言えば、恐ろしいまでの無表情である。

相当、怒っている。

「それに、リリア。仕事に私情を挟んだでしょう？」

「……」

口達者なりリアが、何も言い返せずに黙り込む。

振り返ってみれば、確かにアンジェラのところに行ったら楽しいかもという悪戯心にかまけて、行使すべき権限を越えてしまっていた。言ってしまうえばリリアは、読み違えていた。彼女が持っていた以上にティアはエレンのことを気にかけていたのだ。

「……申し訳ございませんでした」

それ故に、自分の失態を認め頭を垂れる。いつもかぶっている笑顔^{うしろ}を消し、よく回る二枚舌から出る言い訳を捨て、ただ従順に謝罪をする。

それにティアも熱を収めた。腐敗も情弱も何もかもを焼き尽くさねば気が済まなかったクリアファイメとは違うのだ。真摯な謝罪を受ければ、許すぐらいの甘さは持っている。

だが、それで感情が収まったかといえ、それはまた違う。

「わたしはね、リリア。エレンがここを辞める、というだけなら別にいい。エレンが自分の生き方を掴んだのなら、わたしは喜ぶ。それで離れていくな、祝福もする。でも、迷惑？」

いつになく口数が多いのは、表情からは推し量れないほどの激情に駆られているからだろう。

「エレンは、わたしの事を舐めすぎている」

聞きようによつては傲慢な物言いを、果敢に言い切る。

ティアははまだ頭を下げたままのリリアを一瞥し、立ち上がった。

「出かけるから、準備をして。エレンの奴に説教しないと気が済まない」

ティアの言葉にリリアは顔を上げる。その顔にいつもの笑顔を浮かべていたのは、リリアの意地がそうさせた。

「エレンがどこにいるか、ご存じなんですか？」

「うん」

その瞬間、無表情娘の怒気がわずかに綻んだ。気配で察するぐらいにしかすべのない微細な変化だが、付き合いの長いリリアにはわかった。

ふっ、と薄く笑ったのだ。

「どうせ、ウィング男爵家でしょう？」

勘が良いのもあるだろうが、やはり賢い。リリアの思惑をあつさり見通していた。

勝ち誇った主人の態度に内心で舌打ちしながらも、リリアはこりと笑う。

「さすが、ご明察です」

「また、心にもないことを」

おそらくあそこまで腹を立てたのは、エレンへの怒りのほか、リリアが私情を挟んだのを見抜いたのもあるのだろう。最初からリリアがティアに報告をしていけば、ティアはその場でエレンに説教をすることができた。おそらくティアは、エレンが辞職するかもしれないと予想していた。だが、その前にリリアが報告を寄こしてくれるだろうと信頼していたのだ。

仕事に対する信用と、リリアに対する信頼。

その二つを同時に裏切ってしまった。確かに責められるべき自分の失態だ。ティアの怒りは最もで、お叱りを受けること自体は構わない。

しかし、非常に重大な問題があった。

ティアは、いつにないくらいリリアに腹を立てていたのだ。

「ということ、リリア」

かなりご立腹らしく、なんだかんだでリリアに甘いティアだが、今回は容赦しなかった。

「一緒に行こう」

リリアを地獄の底に突き落とす一言を言い放ってくれた。びきり、とりリアの笑顔が引きつった。

「も、申し訳ありませんが」
「ちなみに」

相変わらず無表情で、しかし会心の言葉をリリアに送る。

「さほど無茶でもない主の命に、メイドが拒否権を持てると思わないほうがいい」

致命的な一撃が、リリアの心を打ち砕いた。

「お嬢様……それは、あれですか。成る程。要約するに、あれなんですね」

いつも浮かべている笑顔など彼方に吹っ飛ばし、今ならきつと悟りを開けるに違いない心境になったリリアはいっそ穏やかな口調で言う。

「私に死ねと、そうおっしゃるのですね」

「……前々から疑問に思ってたけど、リリアは何でそんなに姉さまが苦手なの？」

その頃エレンは地図を片手に新しく職場の屋敷がある王都に到着していた。行先は、もちろんウィング男爵家。駅から歩いて二十分ほどの好立地にある、小さなお屋敷らしい。駅からウィング男爵家までの地図もリリアに書いてもらい、準備は完璧のはずだった。

だが、その表情は駅のプラットフォームから出て五分で早くも泣きっ面になっていた。

なぜかという疑問に答えるのは至極簡単だ。

エレンは、地図が読めない女なので迷っていた。

「……ここ、どこですかあ」

まだ大丈夫、きつと適当に歩いていけば元の場所に戻れるとしばらくうろろろしていたが、所詮は東西南北の確認もできない方向音痴である。一分も歩かないうちに、自分のいる場所がどこなのか本格的にわからなくなってしまった。

メインストリートから外れてしまい、何だよくわからない路地に入り込み、そこから逃げるようにして抜け出したら後は、もうどうやったら駅に戻れるかもわからない。そういえば、いつだかパンを買いに行った時も同じパターンだった、と思い出したがもはや遅い。よく知りもしない王都で迷子になり、一人心細くなる。ここはエレンの知り合いが一人としていない王都だ。いつかのようにティアが来てくれるような幸運が舞い降りるはずもない。

どんどん気鬱になり、どうしよう、このまま死んじゃうのかな、などといじけていたその時だった。

「くすん。せつかくりリアさんに推薦状頂いたのに……」

「あら、あなた何していますの？」

うずくまってツンツンと地面をつついていじけていたエレンに、心配した様子で声をかけてくる人がいた。

「こんなところでうずくまって……気分でも悪いんですの？」

「あ、いえ違うんです」

エレンは慌てて立ち上がった。

ただ単純に、神様宛に地面に恨み言でも書いてやろうとしていただけだった。石畳なのだが。

それだというのに勘違いで心配されてしまったては申し訳ない。親切はありがたいが、誤解はきちんと解かなければ。

「ただ、いじけていただけ　え」

すぐに謝ろうとしたが、声をかけてきた人を見てエレンは絶句した。

美しい女性だった。リアアとは違う、なんとというか真の意味で穏やかで優しそうな女性だ。なんだか天使か聖女様でも降臨したのではないかと思ってしまう。少し残念なのは髪の色だろうか。その美貌をそぎ落とそうとしているかのような、灰を被ったような色だった。

けれども、エレンの目はそんな表層には反応したわけではなかった。

呪詛が反応したのだ。しかも、それが示したのは精霊ではなく、神の名前。

「マ………！」

あれはマルスの眷属だと、エレンに刻み込まれた呪いが教えてくれた。

「ま？　『マ』って何ですか？　魔窟？　魔物？　魔界？」

思わず漏れ出た言葉に、女性が首を傾げる。だがエレンは、なんだか微妙に不穏なそれらの予想単語を否定する余裕はなかった。驚愕のあまり、目を見開いたまま固まっていた。

マルスの眷属といえば、この国で十人といない王族しかありえない。エレンの身分では当然、それぞれのご尊顔を直接うかがったことなどないが、王族のことなら噂ぐらいに耳にしている。

エレンの知る限り、この年代の王族の女性はたったの一人しかない。

「え、エリザベス女王陛下……？」
「あら」

確かに目を見張るような美貌の持ち主だが、話に聞いていたのは髪の色がまるで違う。確か女王は四方千里を輝かすような美しい金髪を持ち主だったはずだ。そもそも女王様がこんなところに出歩いているはずもない。

そんな常識から自分で自分の言葉を疑っているエレンに対し、灰色髪の彼女はちょっと意外そうな顔になった。

「何でバレてしまいましたの？」

きちんと変身していますのに、と首を傾げながら、髪の色を変えただけで完璧に変身していると勘違いしている彼女は、自らがクイーンエリザベスだということを認めた。

第十一話 主人という部下に対する強権の持ち主について（後書き）

カメの歩みですが、やっと話が進んできました。どうでもいいことですが、最近サブタイトルを考えるのが楽しくなってきました。

ここまで目を通していただいた方、お気に入り登録をしていただいた方、評価をいれてくださった方、ありがとうございます。

一話目投稿した時点で最後の一行は一字一句決まっているので、そこを目指して頑張っていきます。

第十二話 神話という史実に現れるような異端児について

朝起きたら、エルレインはエリザベスになっていた。

「わあ」

エルレインは起き抜けにその事実を確認した時、思わずそんな言葉が出た。

なぜかは知らない。なぜかはちっともわかりたくもないが、昨日、誕生祭の終了とともにとうとう過労でぶっ倒れたエルレインが朝起きたら、その姿かたちがエリザベスになっていたのだ。

誰の仕業かなんて知りたくもないのに、考えるまでもなくわかってしまった。

「え、なに。頑張るって、ボクのいじめに本気を出すってこと？」

メモタルフォーゼ
肉体変化はエリザベスの十八番だ。明らかにその被害を受けてしまっている。理由？ そんなものはエルレイン自身が知りたい。

エルレインはうつろな声を響かせるが、残念ながらそれを聞かせるべき相手のエリザベスは、すでにこの王宮にはいないことを彼自身も承知していた。

その証拠に、エリザベスにしては珍しく気を使ったのか、書置きが置いてあったのだ。

『ぜひ、探してください』

読み終わった後は一秒も迷わずにびりりと破いておいた。

「絶対やだよ。お姉ちゃん、馬鹿じゃないの……って、あれ？」

本人がいないためにやや強気に罵詈雑言をこぼしていた彼だが、置手紙を二つに破り四つに千切り八つに分割し十六の木端にしたときに、ふと思った。

いま王宮にエリザベスはいない。ついでにいま自分は女の子になっている。最高にプリティーな自分の姿で花ではなく姉と同じ格好というのがいささか不満だが、それにさえ目をつぶれば、どんなドレスだつて着放題だ。しかも、立場は大元帥から女王へとランクアップしている。

ということは、だ。

きらりとエルレインの目が輝いた。彼の目に生気がもったのは、エリザベスが女王になって以降、久しくなかったことだ。

「なんか、すごく都合がよくない？」

それこそ、姉を探さないほうが確実に幸せになれるぐらい、エルレインにとつて都合がよかった。

自分がいなくなる？ そんなものはいくらでも偽装可能だ。なんならエルレインは大陸全土の女装を究めるためんの旅に出かけたとしても言い訳すればいい。それでごまかせてしまうのが、フィリカの王像なのだ。

「ようしつ。じゃあ、早速偽装工作からやらなきゃね！」

これから始まる姉のいないハッピーな日々を夢見て、エルレインは行動する。

そう。

これから始まる、大陸全土を巻き込んだ大騒動がなければ、本当

に、都合がよかった。

北の帝国ユーージニア。大陸統一に最も近いと言われる軍事国家であり、同時にこの大陸にある国家の中で最大の面積を誇る国土を持っている。大陸のおよそ三割を占めると言われるその広大な国土はしかし、厳しい気候に見舞われており人が住むのに適しているとは言えない。それ故に軍事に特化した国家となり、産業革命以降は石炭や石油が豊かに存在する資源国家としての面も目立ち始めた。その王族の始祖たる梟神ネルバは、実体のない神として知られている。

人には見えぬ体を持ち、気まぐれに巫女に舞い降り託宣をもたらす、賢き梟。それがネルバだ。

そのネルバは三人の巫女に子を残した。それが、ユーージニアの王族の始まりだ。

ただ、実体がないがゆえにどうやって子をなしたかという興味もつともな疑問から、ユーージニアの王族が本当に神の血をひいているか疑問視されている。

だが、フィリカの王族が軍神マルスと大魔女モルフィナの子孫であるように、ユーージニアの王族が梟神ネルバの子孫であるのもれっきとした史実である。

それを確信しているのは当の王族たちだ。

なぜならば、始めに生まれた子供たちは、三百年経った今もなお生きているのだ。

「そもそもそ処女懐妊なんぞ、よくある奇跡だと思っのじゃがのう」
氷廷とも呼ばれる宮殿。ユージニアの首都にそびえ立つそこは、
いまの台詞をこぼした美しき女帝、ツエツツーシキラ・ユージニア
の支配する場所だ。

朝日を照り返す新雪を思わせる銀髪。蠱惑的なスタイル誇る彼女
には、傲然としたさまがよく似合う。奇跡によって生まれた彼女に
してみれば、自分の正当性が疑われるのは少し面白くない。

ネルバの実子は、それぞれ生きながらえている方法は異なってい
るが、三人とも現在も生きている。

そして彼女こそが末の妹にして最後のネルバの実子。大国ユージ
ニアの恐怖の大帝と畏れられる一方で、実に好き勝手に生きている
姉たちの処理係をこなしている苦労性、時々極北の山岳地帯にいる
ドラゴンに憑依し暴れてストレスを解消しないとやっていけないほ
どの激務を押し付けられているという側面を持つ女帝である。

そのツエツツーシキラは、とある山で捕まえた、よく喋るトカゲ
の尻尾を掴んでぶら下げていた。

「なんだ、いきなり愚痴を言い始めて。聞いてほしいのか？」

「うん？ ああ、いやのう。ちょっと思ったのじゃが、王というも
のは、何じゃと思っ？」

女帝に問いかけられたトカゲなエリオットは、真面目に返事をす
るのもバカらしいので皮肉を飛ばした。

「お前のことじゃないか、トカゲの帝王様」

「国境侵犯の犯罪者の分際でやかましいのう、トカゲ殿」

彼女は、冷ややかな美貌で爬虫類を見下す。もちろんいまはトカ

ゲにされているこれがなんなのかは承知しているが、それ故にこれが変態だと確信しているため最低限の敬意を持つとも思わなかった。

「まあ、妾が王だというのは否定せんよ。この世で最も多くの王位に就いた純然たる帝王じゃからの。じゃがのう。貴族が貴族じゃという理由で好き勝手できる時代は終わったように、王族が王族であるという理由で専横できる時代も終わった。では、我らにはたして何の意味があるのじゃ？」

「お前らはいまでも十分好き勝手してるじゃねえか……」

「……まあ、確かに姉上たちが好き勝手に生きておるのは認めるがのう……それでも、おぬしらにだけは言われとうないわ」

軍神と梟神、その力の一端を引き継ぐ二人の視線が、ばちりとぶつかり合う。

軍神マルスが残した力が無双を可能とする部の力ならば、梟神ネルバが現世に落としていった力はその真逆の、人の精神に関する魔法

。ユージニアの王族は他人の感情や記憶を読み取ったり、血をひく者同士での遠距離思念の通話ができる。そのためユージニアは、代々積極的に落胤を作り、その血をひく人間をあちこちにばらまいた。その思念のネットワークを大陸中に広げて情報を集めている。それが、ユージニアが誇る異様に正確な情報網の正体だ。

「ほほう。好き勝手だと？ ドラゴンに憑依して暴れまわってた割に何か言ってくるるじゃねえか。おかげであそこで雪崩は起こるわ竜巻が発生するわ……あれ、ほとんどお前のせいだぞ？」

「ははん。トカゲに変身してドラゴン狩りなどと叫んでいた変態を制止するためじゃ。他国に入ってあんなことをしてかすとは、相変わらずフィリカの王族には常識がないようじゃのう」

「なっ、ふざけんな！」

ツエツツーシキラのあまりにバカにした物言いに、エリオットもいきり立つ。

「妹のためなんだから仕方ないだろ！ そんな常識も知らねえのか！」

「おぬしがふざけるではないわっ、このカス！」

ツエツツーシキラが全力で腕を振り、ぶん、と音を立ててエリオットを勢いよく床にたたきつけた。

床にことがった爬虫類などに目もくれず、ツエツツーシキラはかつてない悪寒に肩を抱いてぶるりと震える。

「こっつの変態一族が……！ 汚らわしい。妾ともあるう者が戦慄を
禁じ得んわ」

「痛ってーな。そういう暴力的な奴は嫌われるぞ」

「……確かにそうじゃな。暴力者は嫌われるのがどつりじゃよな。
妾も三百年前に大陸を跨いで暴れまわったモルフィナのことは、い
まだ嫌悪をもって忘れられんしな」

「執念深いな、ババア」

「おい。いい加減、おぬし死にたいのではなかるうな……？」

まだ二十代の若々しい体を持つツエツツーシキラは、こめかみに青筋を立てて殺意を込めて睨みつける。ネルバの実子である最初の三人は、他の王族とは一線を画する魔法を使用できる。唯一にして完全な精神支配の魔法の持ち主である彼女らは、どちらかという
と精神体に近いところがある。ツエツツーシキラは死んでは王族の血をひく赤子に憑依して生を繰り返しているため、その肉体に引
張られて若々しいままなのだ。

とはいえ、長く生きる彼女にすらエリオットを殺す術はない。先ほだから幾度となく視線を介してこのトカゲの精神を破壊しようとしているのだが、ことごとくかき消されてしまっている。

ツエツツーシキラは忌々しそうにしながらも、言葉を続けた。

「ひとつ、言っておくがのう。妾達は、王族だから好き勝手にこの国を治めているのではない。国を治めるに足る能力を持っているから、王族という役割をこなしているのじゃ」

「うわあ。気持ち悪いぐらい自信満々だな……」

「おぬしなどに気持ち悪いなどと言われとうないわ……。それに、おぬしらも一緒じゃろう？」

「気持ち悪いのがか？ おいおい心外だな、ツツツ」

「一緒にするなど言っておるじゃろうが！ ついでになんじゃその呼び方は！ 怖気がするわ！」

「いやだつて発音しにくいんだもん、お前の名前。なんだよつえっつーしきらつて」

「かの体の生みの親が決めた名前じゃつ。妾の感知することではないわ！」

ツエツツーシキラに怒鳴りつけられるが、エリオットは悪びれない。
い。

他に並ぶものの女帝は、いらだたしげに足を組みなおした。

「おぬしらも力があるからこそ自信を持って王族なんてものをしておるのだらう。個人でもって、国を守るほどの武の力がの。そもそも王権国家にとって、国とは、王のものじゃ。義務をこなすために多少好き勝手しようつと、文句を言われる筋合いはなからう？」

「……まあ、ないな」

エリオットとて好き勝手しているという自覚はある。多少バツの

悪そうな顔で顔をそらした。

「子供のころは、誰だって一度は王様になりたいと思うものじゃ。しかしのおう。大人になれば、王になりたいと思うものはぐつと減る。王という座に課せられる重責を察することによって、しり込みをするんじゃない。だから、人は王というものを血によって押し付ける。それが無能だろうと暴虐だろうと構わずな」

「……なんでそんな話をし始めたんだ？」
「別に、大した理由ではないよ」

エリオットの問いに、憂う様子もなく傲岸に笑って言った。

「姉上から連絡があつたのだがのう。ひとつ、国が崩れそうな予兆が見えたそうじゃ」

「なっ」

エリオットは目を見開く。わざわざこうして面白がってエリオットに伝えるということは、おそらく南土内の国家なのだろう。

その反応を見て、ツエツツーシキラは満足そうに呵々と笑う。

「南土には不甲斐のない国王もいるものじゃな」

イグサ・フォンがその報告を聞いたとき、かつてない焦燥感に襲われた。

その知らせを受けとった後の彼の行動は素早かった。可能な限り迅速に自分のやるべきことを終えて、この件について調べるように耳打ちしてくれた少女のところに向かった。

「早く、彼女に知らせないと」

イグサはティアに知らせようと、わざわざ王都から急ぎ彼女の實家に向かい門戸をたたいた。

しかしそんな彼に、応対に出てきたメイドは肩口で切りそろえられている金髪を揺らしながら一礼。

「申し訳ありません。お嬢様は、ただいま不在です。使用人には行き先も帰りの日取りも伝えられておりません。早々にお帰りください」

「え？」

門前払いをされていた。

第十二話 神話という史実に現れるような異端児について（後書き）

今回のオチ担当は、イケメンで仕事もできるはずなのにいまいち決まらないイグサ・フォンさんと、命からがらウイング男爵家から逃亡したリリア・ウイングさんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5251y/>

王族という偉大なる変態に挑むいたいけなメイドの人生について

2012年1月6日20時48分発行